

博麗の(やる気の無い)神主

執筆使い

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

博麗神社には常にやる気のない駄目神主がいた。

「あく、面倒くせえ」

この男…

「依頼だ？しょうがねえ…」

駄目人間にして…

「一瞬でカタをつけてやらあ」

幻想郷最強の男…

「ふいー。終わった終わった。茶でも飲んでねよ」

である（多分）

※作者が前に書いた作品のリメイクとなっております

目次

プロローグ

依頼だ？ 面倒くせえ | 1

紅霧異変

赤い霧？ 面倒くせえ | 7

漸く着いた… 面倒くせえ | 13

門番？ 面倒くせえ | 20

よっしゃラスボス… って違うのかよ、面倒くせえ | 27

面倒くせえけど本気出すか | 34

まだ遊びたいだど？ 面倒くせえから嫌だ | 41

雑談だど？ 面倒くせえ | 47

面倒くさかったけど、一件落着か… | 53

春雪異変

また異変だど？ 面倒くせえ | 59

マヨヒガだど？ 面倒くせえ | 66

人形館か… 面倒くせえ | 74

剣士なのか庭士なのかはつきりしろよ、面倒くせえ | 81

視点：霊夢 | 88

生き死にだど？ 面倒くせえ | 95

面倒くせえからボス戦はやらないぜ…マジで | 102

封印だど？ 面倒くせえ | 109

BBAの過去だど？ 面倒くせえ | 117

百鬼夜行

宴会!! 宴会 ! 宴会… 面倒くせえ | 123

やっぱりガチの戦闘は面倒くせえし、死ぬ | 130

お土産だと？ 面倒くせえ

137

面倒くさかったが… やつと宴会だぜひやつほう!!

143

飲み比べだ？ 面倒くせえ

150

時代遅れか… 面倒くせえ

156

視点：魔理沙

162

永夜異変

どう見ても満月だろ？ 面倒くせえ

168

面倒くせえから妖怪狩りじゃあああああ!!

174

なんだかんだで調査は面倒くさいのぜ… ハッ!? b y 魔理沙

181

視点：咲夜

188

こっから先は面倒くせえ

193

プロローグ
依頼だ？ 面倒くせえ

ここは幻想郷。忘れ去られた者達が最終的に行き着く場所は、のどかで、平和で、まさに全てを受け入れてくれる楽園そのものである。

「ひ、ひいつ?! 助けてくれ?! 人間を襲ったのは… 必要以上に食べちゃったのは謝るから?!」

そして… それはそれは残酷な話だ。余程のことが無い限り、管理者や調停者（巫女）が動こうとしないこの場所では『決して手を出してはいけない人物』が存在する。

「ふわあ。めんどくせえ。つたく何で霊夢の野郎じゃなくて俺を呼んだんだよあのBBA」

博麗の神主… そう呼ばれている存在は、基本的には巫女同様種族間の面倒事には関与したりはしない。だがしかし、ひとたび彼が動いてしまえば、逃げる事すら出来ずに死を味わうことになってしまう。

人間離れた速さで逃げ惑う妖怪。とはいえ森の中という事もあつてか中々思うように進めなく、所々木々や岩に引っかかって無数の小さい傷が出来ている。そんなのも御構い無しに走り続ける彼であつたが、

「痛つ、しまつ、ひいつ?! 助けてください許してください助けてください許してくださいツツツツツ!!」

一際大きいそれに躓き、とうとう追いつかれてしまった。見上げる

とそこにいたのは自分の力が一切通じなかった恐怖の象徴である。プライドとかの類は最早彼にはなきに等しい。

「許して欲しいのか？」

「は、はい!!」

黒いボサボサの髪、死んだ様な目、まるでやる気一つない男に怯える妖怪。ひと回りもふた回りも巨大な筈の彼は、惨めに縮こまって土下座までする始末である。

そんな時に出てきた提案。それは妖怪にとっては天国から地獄に吊るされた蜘蛛の糸であった。喜びを現しながら必死に目の前の神主のご機嫌を取ろうとする妖怪。

だが、無常かな

「だが断る」

そもそも釈迦の蜘蛛の糸など目の前の外道が吊るすわけがない。やるとしても、目前で自前のハサミで切り落としてその様を見つめながら愉悦に浸っている。まさしく人の皮を被った悪魔である。

「え」

人里から少し離れた森の中。断末魔をあげる暇もなく、一つの巨大な爆発音が生じて、妖怪の腰から上の部位が綺麗さっぱり消滅したのだった。

「ふわあくあ。人里の連中も面倒くせえ依頼をしやがって… スペカなり、上白沢に頼むなりしろっての」

依頼人曰く、ずっと昔に封印された類の妖怪である為スペルカード

ルールが適応されないし、実力的に彼が言う人物では対応出来なかったから泣く泣く頼み込んだらしいが、そんな事情博麗の駄神主には関係ない。

「まあいいや。とりあえずこいつ連れて行こ」

妖怪だったものを少しばかり刻んで討伐の証拠を見せて報酬を得る為に人里へと向かう。その際紫色の血がこべりついてしまい、神主が着る様な白い着物が汚れてしまいが御構い無しである。

「とりあえず茶菓子でも頂るか。腹減っちゃったし」

.....
.....
.....

「オラよ。こいつが証拠だ」

「あ、ありがとうございます... ひいつ!？」

またか、神主はそう心で呟く。周囲から向けられる視線... それはもう慣れたし、何も言いはしないがそれでも気にしてしまう。

確かに彼らの気持ちは解る。自分は外からやって来たよそ者、それも能力者だ。これが普通の人間だったり、それ程強力な能力者でなければこの様な視線を受ける事もなかっただろう。

「... んじゃ、用は済んだんでこの辺で」

だが、いちいち気にするだけ面倒だと考えている神主は報酬を貰ったのを確認し次第その場を後にする。外を出ても見渡す限り鬱陶しい視線。それでも彼は目くじら一つ立てる事無く何時もに場所へと

早足で赴いた。

やがて、目的地に着く駄神主。そこは自分が住んでいる博麗神社でもなければ、時折暖をとりに赴いているマヨヒガでもなく

「ゼエ…ゼエ…おばちゃん！ 何時もの10人前で!!」

欲望を満たす所
甘味処である。この神主、日も暮れはじめの夕飯時にまさかの寄り道である。しかも補給する栄養分は糖分一色という駄目っぷり。

「全く…博麗の巫女が帰りを待ってるんだろ？ それなのに道草食っていいのかいアンタ？」

「良いんだよ。どうせあいつはぐーたらでもものぐさな奴だ。まるでダメな みこ 略してマダミのあいつが俺の心配なんざするわけねえだろうが」

口でボロクソという駄神主。一応居候させて貰っている立場だというのにマダミ呼ばわりするあたり、相当な外道である。甘味処のおばちゃんも、相変わらずの平常運転である目の前の駄目人間に敢えて何も言わずに巨大サイズの団子を10本箱に詰めて差し出す。

「あん？ おばちゃん、今日はお持ち帰りじゃなくて此処で食べるから別に箱に詰めなくて良いんだけど」

全部を箱に詰め終わった彼女は人差し指で駄神主の方…彼の後ろをちよいちよいと指差す。

その仕草にもしやと冷や汗を流しながら駄神主は振り返る。そこに居たのは鬼の形相をしていた巫女装束を身に纏いし少女だった。

「え、えーと…いつからそこにいらしたんでしようか？ 霊夢さん」

恐る恐るそんな事を聞いてみる博麗の神主。もし…もしあの言葉を聞かれていれば最悪自分は死んでしまう!? そんな思いが彼の生存本能の9割を占めていた。

「まるで ダメな 巫女…の所からよ」

あ、終わった。今までの走馬灯が彼の脳裏に思い浮かんで行く。もし彼が某有名な漫画の第4部のラスボスであれば、第3の爆弾を発動してやり直したり出来るだろうが生憎この駄目人間にスタンド能力は備わっていない。

「別に帰りが遅いのは構わないわ、依頼で疲れて寄り道する事ぐらい私だって時々するから。けどね…」

いつの間にか彼女の拳には霊力が込められていた。恐らく鬼をも殺せるだろうエネルギーを察知した彼はすぐさま逃走を図る。

「結界だ?!」

だがしかし、彼女の十八番の結界に阻まれて逃げ場を失ってしま
う。

「まあ、そんな事はいちいち言ってもキリがないからやめとくわ。だから、何か言い残す事はあるかしら?」

笑顔…物凄く黒い笑顔で博麗の巫女が問いかける。

「…出来心だったんですはい」

その言葉のすぐ後、轟音が鳴り響き、幻想郷最強の男の悲鳴（断末魔）が聞こえたのは言うまでもない。

紅霧異変

赤い霧？ 面倒くせえ

突如、幻想郷が赤い霧に包まれた。常識にとらわれてはいけない事に定評のある地ではあるが、流星にこの事態はこちらにとつても異常な光景である。

所謂異変と呼ばれるそれを解決していく。それが博麗の巫女、ひいては博麗の神主の役目である。そして件の彼はというと…

「赤い空、赤い雲…ま、いっか。昼寝の続きだ続き」

だらけていた。もう一度言おう、だらけていたのだ。異変解決？なにそれ美味しいの？ とでも言わんばかりに職務を放棄して寝転がる駄神主。

「さーて、シエスタシエス！」「させると思ったか!!」「ごふう!？」

何もしないで只々だらけた毎日を過ごすのがまかり通って良いのか？ 答えはNOである。故に彼は二人の少女によって、自分の数少ない（側から見れば数多い）休憩時間を奪われてしまうのだった。

「全く…油断も隙もあったものじゃないわ」

前日もチラとだけ出ていた少女…名を博麗霊夢。この幻想郷の要である博麗大結界の管理や異変解決等行う博麗の巫女で、他種族同士の争いが絶えない幻想郷を少しでも良くする為あるゲームを立案、そして今の幻想郷を作り出した巫女でもある。

「乙女2人が異変解決に向かうつてのに男がエスコートしないでどうするんだぜ！」

もう一人は黒いとんがり帽子と魔女が着るような黒い衣装を身に纏っている。彼女は霧雨魔理沙といい、上記の博麗霊夢のライバルである普通の魔法使いだ。

二人は神主を無理やり叩き起こした後、お腹を抑えてうずくまる彼に詰め寄りながら異変解決に向かうよう尋ねたのだった。

「いやいや、お前ら先輩、俺後輩。俺は後輩でまだこの仕事に慣れてないんで留守番をしますんで、いつてらっしゃい先輩方〜」

しかしながらそこは駄神主。一流のサボリスキルで言い訳を瞬時に導き出し、二人に言い放つ。その時の彼の表情のムカつきようは、見る人が見れば頭に血管を浮かび上がらせながら怒りを露わにする程である。

「心配しないでいいわ」

だがしかし、現実には（駄神主にとって）無情かな。

「こんな事もあるうかと神社には結果を張っておいたの。だから先輩に敬意を払わない後輩よりはよっぽど侵入者対策になるわ」

「え…いやいや、嘘？」

「ほんと」

二人の満面な笑み。それはこの一連の勝負が彼女達の勝利によって終了を迎えてると悟ってしまい

「…嫌だあああああ!?!」

こうして、駄目人間の叫びと共に二人の少女と一人の男が（無理矢理）異変解決へと向かうのだった。

.....

「嫌ね、どうせ実害があるとかそんなんじゃないから今回の異変解決しなくていいと思っただよ。だから引き返そうって……話聞いているか？」

数分後。赤みがかった空中を当たり前の様に飛んでいる3人……その内の一人である博麗の駄神主が愚痴を言いながら見苦しくも引き返す事を提案している。そのしつこさをどこか別の所で発揮すればいいのだが……生憎この駄目人間に今の所そんな予定はない。

「聞いてるわよ。どんなものだろうと、それが異変であれば解決に向かうのが私とあんたの役目じゃない。それに実害だったらあるわ」

「どんな？ 俺が見た限りでh「洗濯物が乾かない」は？」

彼女の言葉に一瞬のフリーズを起こしてしまう神主。直ぐそばで箒にまたがりながら飛んでいた魔理沙も、彼女の言葉にぽかんと、目を点にしながらい口を開いてしまっている。

「だから、洗濯物が乾かないのよ。あの霧が日光を防いでるせいで」

もう一度言われる事により、フリーズが解除された神主。そしてその言葉の意味を理解した彼はわなわなと肩を震わせ、ガバツと天を見上げて叫び出す。

「おかしいと思ったよ!! 魔理沙はともかくお前まで妙に乗り気だったからおかしいとは思ってたんだよ!!」

愛しさとか切なさとか心強さが現れる様な叫びはしかし、某龍玉でお馴染み最近出番をサボりがちのピンクの魔人みたく、空間に穴を開けて赤い霧を吹き飛ばすとかそんなことはなかった。

「まあ… 元氣出せって。くよくよしてたら解決出来るもんも解決出来ないぜ」

その様子を見かねて、魔理沙が彼の肩に手を置き慰めの言葉をかける。だが、外道には中途半端な慰めは逆効果であった。

「うるせえ! 慰められても俺の心の傷は癒えねえよ!! それにお前もある意味同罪じゃボケェ!!」

「なっ!?!折角慰めてやってるのに… そりゃないぜ!!」

「悔しかったらマスパでこの赤い霧吹っ飛ばしてみやがれ!! そうすりゃ万事解決だぜ!!」

「出来るか!?! そして私の口調をパクるな!!」

異変解決を始めてまだ数分しか経っていないのに、既に口論となり収集がつかなくなってしまうている。幻想郷の危機だというのにこんなことで足止めを食らってしまうのは、ひとえに彼らの相性の悪さがなせる技なのかもしれない。

「二人とも、そんなのはどうでもいいから後にしましよ。時間は待つてくれないわ」

「お前が言うな!!」

そんな二人の息の合った突っ込みは先ほどの駄神主一人の叫びよりも響いていたとか……

……
……
……

「そーなのかー」

突如現れた黒い球体、それが晴れることにより現れた金髪の少女。どう見ても倒さなければならぬ相手を目の前にして三人は

「そーですかー」

素通りしようとしてた。面倒くさいから、早く洗濯物を乾かしたいから、どう見ても今回の異変に関係なさそうだから、それぞれ思うことは違ってはいたが見事に息の合ったスルー術である。

「無視しちゃ駄目なのだ!」

思わずツツコミを入れてしまう人食い妖怪。本来彼女はそんなキアラではない筈なのにそういったセリフを吐いてしまったのは、三人の息の合ったボケのなせた業であるのかもしれない。

「貴方は食べてもいい人類?」

「こいつ敵らしいんで先輩方、やっっちゃってください」

「……普通そこは後輩が戦うもんじゃないのか?」

「いやいや。私みたいな最弱が一番槍をやった所でそれは唯の嚙ませ犬です。ヤ無茶したくないんですー」

「あんたこの中で一番強いじゃない」

せつかく三人の進軍が止まったのでいつも人間を食す時に発する決まり文句を言うのだが、三人は一切聞く耳を持っていない。

「私の…話を…聞けええええええええええ!?」

夜符『ナイトバード』

その様子に本来無邪気なはずの人食い妖怪は堪忍袋が切れてしま
い。スペカを放ちながら戦闘を開始するのだった。

To be continued…

漸く着いた…。面倒くせえ

「一体何だったんだ？ 結局」

「きゆううう…。」

数分後、ボロボロになっていたのは人食い妖怪の方だった。実力も、戦闘経験もはるかに上の三人を相手に勝つ要素など寧ろ無いに等しいわけで、生きていたのが不思議なぐらいである。

「…。ほらよ」

そんな様子を見かねた神主が、懐からおにぎりを一つ取り出して少女に差し出す。これにはその場にいた誰もが驚いたようで、沈黙が一瞬だけ訪れる。

「え？ いいの？」

「元はといえば、俺たちがお前を無下にしたつてのもあるしな。だからこれでお相子だ」

そういつて、先を急ぐ神主一行。人食い妖怪…。ルーミアは渡されたものをまじまじと見つめ一口だけ頬張った。

「お前が自分から親切なんて…。どんな風の吹き回しだ？」

あまりに予想外なことに、魔理沙が思わずそう聞いてしまう。それほどまでに、彼が立ちはだかる敵に対して情けをかける上に塩を送る

ような真似をするのが珍しい光景だということである。

「あ？　ちょうど懐にあつたからくれてやったただだよ」

「… あんたも優しい所があるのね」

幻想郷に現れて日の浅く、意外にも多くの事が謎に包まれている彼ではあるが、そんな神主にも情の一つが存在していたことに思わずほっこりとしてしまう少女二人。だが、次の言葉でそんな気持ちなど吹っ飛んでしまう。

「ワサビ入りのおむすびだけどな（しかも腐りかけ）」

「え？」

駄神主は、それはそれは清々しい笑顔を見せている。まるで先程のイラつきやマイナスのオーラが嘘の様に消え去り、水を得た魚のごとくイキイキしている。

「いやー、前に店の余りものという事で貰った方がいいが流石に食べる訳にはいかなくてな、ずっと懐に入れてたはいいが中々食べる機会が訪れないし…　ほんとちようど良かった」

「(げ、外道だ…　悪魔だ)」

二人がそんなことを思っていたのとほぼ同時刻、一人の少女が空中にて悶絶したという…

.....
.....
.....

「てか、洗濯物を乾かしたいんだったら俺の能力で一発じゃねえか」

駄神主はサボる口実を探すのに余念がない。自分の能力さえあれば、そもそも異変解決しなくても良いのではないかとまで考え提案する始末である。

「どうせあんたの事だから、面倒くさいの一言でやらないでしょ？」

だがしかし、駄目人間の扱いに手慣れ始めている^{ラスボス}霊夢の口撃により、彼の目論見は一向に進みはしなかった。寧ろしてたまるか。

「あのなあ。俺だって働く時は「よく来たな！ 人間!!」あ？ 誰だ？」

ふと、声が聞こえたのでその方向… 白い霧がかかった湖の方を見ると、小さな影が神主の目に映った。

「ここを通りたくば最強のあたいと勝負しろ!!」

氷で出来た小さな羽根に、通常の間人より一回り小さい背丈。そして目でわかってしまう⑨のオーラによって、彼女が一体何者なのか直ぐ様わかってしまう。それ故に

「妖精か…」

「妖精ね…」

「妖精だぜ…」

あからさまに薄いリアクションをとってしまう3人。外の世界で

は珍種などと呼ばれているだろう妖精は、此処幻想郷ではさほど珍しくもない。

どれくらいかといえば、普通に人里に行けば会えるレベルのエンカウント率の高さなのだ。

「どうだ!! 驚いたか!!」

しかし、彼らのそんなリアクションも頭が弱いとされている種族である妖精には一切理解できず、何故か誇らしげに胸を張って威張っている。

「… 面倒くさそうなのが現れたな。先輩お先にどう、グエツ!？」

神主は直ぐ様二人の後ろに回って観戦を決め込もうとするが、霊夢が首根っこを掴むことにより阻止されてしまう。その光景は情け無いの一言に尽きる。

「零治。今日1日飯抜きでも良いのかしら?」

霊夢が自分のことを下の名前で呼びながら言う事は、大抵碌なことではない。そしてもし断った場合、言った内容は絶対に実行されるだろう。其れ程までの凄味を、黒い笑顔と共に博麗の巫女は放っていた。

「… やってやりますよ先輩!!」

「(現金というか… 本能に従順というか… ま、とりあえず私は一旦休めるから良いや)」

その様子を見て、魔理沙は自分に戦闘の順番が回らなかった事に少しばかり胸を撫で下ろし、観戦を決め込もむのだった。

「おまえ、あたいの強さにびびってるのか？ まあ、それはしぜんのせつりだからしょうがない。なぜならあたいこそが最強だからだ!!」

最強… その言葉と、自分を馬鹿にしていた言葉に反応しピクリと全身を震わせる。

「おい… 今なんつった？」

さしもの氷精も、その異様で尋常じゃない雰囲気を感じてしまい、何かしらのアクションを取ろうとするのだがもう遅い。

彼女は幻想郷最強の男を怒らせてしまったのだ。

「あ、あたいは…」

「俺はビビリじゃねえんだよオラア!!!!

彼の右手から一つの巨大なエネルギー弾が生成される。所謂弾幕と呼ばれるそれは、余程のこと以外での殺傷能力が付与してしまう位の威力を禁止しているのだが、外道にはそんなの関係ない。

「あたっ」

超スピードで彼女がいた場所を通過するエネルギー弾。空は3人がいる場所より更に上空まで駆け上がっていき、一際大きい爆発となって白い光が辺りを照らした。

「… さて、汚ねえ花火を打ち上げたし、此処までエスコートしましたしそろそろ俺はこの辺で「まだよ。それに敵の本拠地も近いみたいだし」ですよね〜」

幸いなのは、妖精である彼女は自然そのものが破壊されでもしない限り何度でも蘇ることだろう。そして蘇った時にはすっかり彼のことなど忘れていて、また同じ過ちを繰り返すであろう。チルノという水精はそういう奴なのである。

「…一応聞くが、その根拠は何なのぜ？」

「勘よ」

話は戻って、どうやら博麗の巫女曰くそろそろ目的地であろう場所まで着くらしい。

勘と聞くと胡散臭くて、絶対に当たらないんじゃないかと思われるが、博麗の巫女のそれは100発100中である。その勘の鋭さは異変解決で本領を発揮し、彼女が行く場所には絶対に黒幕が潜んでいる程である。

「…まさかとは思うんだが、あの館だつたりするか？」

神主が指差す先には、一つの立派な屋敷。幻想郷では珍しい西洋の作りであり赤で覆われたその建築物は、誰がどう見ても絶対今回の異変と関係があると睨んでしまう程である。

「…うん。どう見てもあれしかないわ」

同時に結論を出した後、3人は屋敷の上空で徐々に降下していき門の前で着地する。

そこには、門番らしき人物がいた。らしきというのは、今現在の彼女の状況によるものだ。

「ZZZ...」

そう、立ったまま寝てしまってるのである。しかも仁王立ちのまま微動だにせずにいびきをかいてる為、本当に寝ているのか疑わしい。

「... あれは罨と見るべきかしら？」

「別に素通りしても構わないんじゃないか？」

二人が、そのまま進むか確認するかのどちらかで決めあっている傍ら、馱神主は何をしているかというところ。

「... くだばれ」

「「え？」」

『超熱線 ブレストレイザー』

片手にとんでもないエネルギーを貯めて照準を館に合わせる馱神主。何とこの外道、主人公として絶対にやってはいけないことの一つ『初っ端から敵の本拠地そのものへの攻撃の実行』

をしようとしている。普通の人間であれば多少でも躊躇するだろうが、生憎この馱目人間にそういった類のプライドは存在しない。

「デメエラのせいはこちらとら面倒くせえ思いしてんだ、別にぶっ飛ばしても問題ないよなあ!!」

おおよそ八つ当たりにも近い巨大な光線が、聳え立つ赤い館へとまっすぐ進んでいったのだった...

To be continued...

門番？ 面倒くせえ

「…」

紅魔の館の最上階に存在する玉座の間。そこにある立派なそれに座っている主人は紅茶を飲みながら高みの見物をしている。

「お嬢様、良いニュースと悪いニュースがございます。どちらからお聞きしますか？」

何も前触れもなく、突然とでも言わんばかり現れ方で館の主人の傍らにメイドであろう服装を身に纏った銀髪の女性が立っていた。

「そうね… じゃあ良いニュースから」

「良いニュースは… 博麗の巫女、そして博麗の神主が此処を嗅ぎつけたようです」

その言葉を聞いて、彼女はくすりと笑みを浮かべながら、備え付けられていたスプーンをカップに差し込み中身をかき混ぜ出す。

自分の退屈を満たしてくれるものがやって来たかのをまるで喜んでるかのような笑みは、思わず見惚れてしまうほど残酷なそれであつた。

「そして悪いニュースなのですが… 博麗の神主が館そのものを破壊しに攻撃を加えてきました」

歯切れの悪いメイドの言葉を聞き、いじくり回していた右手をピタリと止める。

「幸いにも美鈴が阻止した事により一発だけで済みましたが、それだ

けでもあらかじめパチユリー様が張っていた結界にかなりの罅が入る始末です」

「理論上鬼の攻撃も耐えうる事が出来る結界を一発で… つくつく」

俯き、体を震わせ始める館の主人。悔しがっている訳でもなければ、恐怖に怯えている訳でもない。今の彼女が抱いている感情は

「アツハツハツハツハ!! 実に面白いじゃない… 博麗の神主」

興味という2文字であった。

場面は変わり、こちらは紅魔館の入口前。先程放たれた巨大エネルギー波は、いつの間にか起きていた門番に軌道を逸らされ館を覆っていた結界を掠めて上空で爆発を起こした。

片手に吹いている煙を振り回して消す動作をしながら、博麗の神主はつまらなそうに門番の方へと視線を向ける。

「危ないですね… 寝てる人に攻撃し、あまつさえ他人の館を吹き飛ばそうとするなんてどんな神経しているんですか？ 貴方」

「だから言っただろ霊夢。こいつ絶対起きているから不意打ちするなって」

「何で私のせいになってるのよ!!」

さも自然な流れで隣の巫女に罪をなすりつける博麗の駄神主。およそ主人公に似つかわしくないその態度に、門番は苛立ちを募らせながら目の前の外道を睨みつける。

「貴方みたいな卑怯者……はつきり言って私は大嫌いです」

「だってさ魔理沙」

「私じゃない。お前の事だ」

此の期に及んで自分の非を一切認めないどころか、他の人物になすり付けようとする駄神主。それが彼女の苛立ちを余計に募らせていく。

「その上自分の非を認めようとしな……何なんですか？」

「一応博麗の神主をやってる者です」

瞬間、目の前に放たれた拳。それは、温厚で滅多に激情を見せる事のない門番が戦闘を開始した合図でもあった。不意打ち気味に放たれた速く重い一撃はしかしながら、右手でしっかりと握り締められ止められてしまっている。

「すみませーん、先輩方。面倒くさいんで、こいつの相手頼めないでしようか？」

「元はと言えばあんたが招いた事だからパス」

「残念だが、私も先を急ぐんでな……パスだぜ」

余裕を見せながらの受け答えに、彼女の門番としてのプライドが刺
激され表情が歪む。

「あなた方を通すわけには…!?」

すぐさま先へ進もうとする2人を迎撃しようとする門番
であったが、それが出来ずにいた。

「ちよいと冷えるが… 動かない方がいいぜ? 下手したら粉々に砕
けるからよ」

先程駄神主に放たれた拳から広がる冷気… 0を下回りマイナス
にまで達する温度のそれは周囲の水分ごと彼女の腕を凍らせていた。
瞬間的な冷凍により、一瞬遅れて激痛が走る。

「……つつつ!? くつ!!」

悶絶するのは一瞬、直ぐ様凍った右腕を引っ張ってその場を離れ
る。その際脆くなっていた右腕は肘から先を地面に切り落としてし
まう。

「…で? まさか片腕でこのままやり合おうってか?」

「それは半分正解、です、ねっ!!!」

凍った右腕を拾い自分の気で解凍した門番は、元あった場所に無理
やりくつつつけた。

彼女が人間でなく妖怪であること、素早く引っこ抜いた時に出来た
もののため切断面が綺麗だったこと、その2つによりくつついた右腕
はボロボロではあるが元の肌色を取り戻し動かしてみせることが出
来た。

「…随分と無茶すんなあ。別にほつといても壊死するわけじゃねえのに」

「私はこの館を守る門番です…こんな所で足止めを食らっている場合じゃありません!!」

「…だから、俺をこの場で止めると?」

相手が本気になっているのを見て、神主も少しばかり構えをとる。いくら面倒くさがりの外道である彼とて、場を弁える事ぐらいはするのだ。ましてや相手が死ぬ気であれば尚更に…

「(状況ははつきりいってピンチ。先程彼が放った弾幕でさえ、全力を持ってわずかに軌道を逸らすことしか出来なかった…気を読めるからこそ…わかつてしまう)」

底が読めない。目の前の神主を見て思った感想である。その気怠さな表情とは裏腹に全身から放出しているエネルギーの質は、自分の主人どころか妹様をも上回っているのではないか? そう思わずにいられない程だった。

「…沈黙は」

肩で息をして動こうとも返事をしようともしない彼女を見兼ねてか、彼は一瞬で腕一本分の間合いまで詰めた。

決して油断していたわけではない。

長年生きてきて、主の為に尽くし、そこらの妖怪程度であれば苦戦一つせずに倒す程の実力を身に付けている門番…そんな彼女が全く反応できない程の刹那と速度で彼は攻撃体制に入っていたのだ。

「肯定と見なすぜ？」

迫り来る拳^死。彼女の脳裏には今までの思い出が溢れかえると共に、絶対的なそれに対する恐怖で身体が動かせずにいる。

10…5…1…だんだんと近づく毎に、確実に心を蝕む恐怖。最期に彼女が思い浮かんだのは、最初に主と出会った時の思い出。涙を流しながら彼女はゆっくりと死を受け入れる…

「…やーめた」

寸止めされた。その事實は死を受け入れた彼女に疑問符を浮かび上がらせ、侮辱として捉えさせてしまう。

「…どうして、殺さないんですか？ 少なくとも私は貴方を殺すつもりで…」

「二つ、こいつは異変解決だ。化け物を殺す依頼じゃない。

二つ、幾ら向こうが殺ってきたからって、殺り返すのは餓鬼のする事だ。生憎俺は餓鬼じゃねえ。

そして三つ、面倒くさい。テメエを殺した所で、テメエの仲間から恨みを買われるんだ…面倒くさいことこの上ねえだろうが」

彼女は目の前の神主を見て、最初とは違う評価を下した。

「…甘いんですね。貴方は…」

「甘くて結構。俺の好物だからな」

決して周りに流されない、だらけきった信念を心に持つ人間。

「んじゃ、この先通らしてもらおうぜ」

そう、彼女が評価を下した駄目人間は主が待ち構える館へと歩を進めていくのであった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

よっしやラスボス…… って違うのかよ、面倒くせえ

「さーて…… っーか見た目より広いなあ、おい」

屋敷を入って少しばかり進んだ場所にある長い廊下にて、神主は呑気にそんなことを呟いていた。彼の傍らにはPと書かれた大量の札…… 妖精メイドの屍がばら撒かれていた。

「ったく、どいつもこいつも客の持て成しをするどころか襲いかかって来やがる。どんな教育をすりゃあこんな風になるんだか」

そうは言うが、そもそも侵入者に対しておもてなしをする住人などあまりいない上にこの駄神主の場合、正当防衛どころか過剰防衛にみなされる事をやっていた。

襲いかかって来た妖精メイドが一人残らず一回休みとなっている事から、彼の容赦のなさがわかるだろう。現に、終盤に至っては命乞いをして来たものも居たのに、そんなの御構い無しに迎撃している。

「せめて道案内の一つでもしやがれってんだよ」

しかも理由が数が多くてイラついたからというのだからというのだから、メイド達にとっては災難なことこの上なかった。

「…………… 仕方ねえ。面倒くせえが、アレをやるか」

辺りを暫く見渡した後、このままいつでも迷うと判断した神主は片膝をつきながら右手を地面に添え、目を瞑る。

『感知 サーモグラフ』

瞬間、彼の暗闇に映るのは赤や緑、黄色の配色をした線。赤外線とも違う、所謂熱エネルギーを神主は感じ取っていた。

「…こつから上の方…こいつは霊夢か。戦闘中みたいだが…空間移動テレポートの類の相手と戦ってんのか？ 座標が安定しねえ。んで、その先には…成る程。一際でかいのが一人」

最初に自分がいる場所より上の階を探知する。大抵こういう類の異変やゲームではラスボスというのは最上階とか兎に角高い所にいると相場が決まっていると、彼は思っていたからだ。

一通り見た後、次は自分が進む先の方を探知し始める。先…先…少しばかり降りた場所。そこまで探知した彼は一瞬顔を歪ませる。

「っ、こつちは魔理沙の野郎か。不味いな…今んところ接触してねえみたいだがあいつの性格上絶対そのまま進む可能性がある」

別に彼女が死んでしまうのは、この外道にとっては一切問題ない。だが問題なのは、自分にまでそれが降りかかる事である。他人の落ち度でこつちまで迷惑を掛けるというのがこの駄目人間には我慢ならなかった。

「…出てくる前にぶっ飛ばす（魔理沙を）」

動機こそ、主人公とは思えない程酷いものではあったが、彼は珍しく早足で廊下を駆けるのだった。

.....
.....
.....

「ずっと… 1人だったの」

先程、図書館らしき場所で自分と同じ魔法使いと戦闘し、見事勝利を収めて幾つか本を拝借した霧雨魔理沙はそのまますすぐ地下深くへと進み牢屋の様な個室にて1人の少女に出会った。

「そっか。私もその気持ちわかるぜ… 誰かの都合で閉じ込められる気持ちは」

曰く、彼女はずっとこの部屋に閉じ込められて寂しい思いをしていたらしい。魔法使いを否定する父の反対を押し切り家を出てった魔理沙にとって、彼女の気持ちは良くわかってしまう。故に幼き少女の寂しさを紛らわす為に、彼女の遊びに付き合う事としたのだ。

「…で、何して遊ぶんだ？ 生憎私は時間がないから、決まってるんなら早くやろうぜ」

「良いの？ やった！ それじゃあ」

七色の羽根を持つ吸血鬼は遊んでくれるといった魔理沙を見て、無邪気な笑みを浮かべた。彼女の手の平からあるものが飛び出す。

「弾幕(ショット)！」

「うおっと!? 危ない危ない… そういう手合いか」

辛うじてそれを避ける魔理沙。かなり頑丈な造りである筈の壁に穴が空いているのを見て、冷や汗を少しばかり流した。

「(不味いな… さっきので消費した魔力はまだ回復してないし、今の

を見る限り手加減つてもものを知らないみたいだ」

「どうしたのー？　じつとしてたら遊べないよ!!」

そこまで考えてるとすぐさま次弾が飛ぶ。それを冷静に回避してこちらも弾幕を打ち込む。現段階での、割と魔力を込めた1発は少女に当たった後爆発し、煙となって包み込んだ。

「悪いいな。ちよつとした考え事だ」

不敵な笑みを浮かべながら右手に八卦炉を持つ魔理沙。爆発によつて動かない少女の懐まで一気に入り込み、自分が最も使う必殺技を放つ。

『恋符　マスタースパーク』

先程の弾幕をみて、目の前の少女が自分より格上だと悟った彼女。駄神主と違って、例え遊びであろうと必要以上に手抜きをしないが故にこの一発は今持てる全ての魔力を込めたものである。これで戦闘不能になれば万々歳、多少の傷を負えば一矢報いた事となる。

その一撃は少女ごと斜め上に放たれ、天井に大きな穴を一つ開ける。

「ぜえ…　ぜえ…　少し、無茶をしちまったな。思う様に身体が動かねえ」

魔理沙は片膝をついて息を整えようとする。しかしながら、図書館での戦闘に加えて先程の無茶も祟つてか思う様にいかない。

やがて、天井の大きな穴から先程吹っ飛ばした吸血鬼が降りてきた。服は所々焼け焦げているが、少女自体はほとんど無傷。戦い始めの時と変わらない無邪気な笑みをこちらに向けていた。

「凄い凄い！ 外の人間って面白いんだね!!」

怯むどころか寧ろ楽しんで面白がっているという事実には、魔理沙は笑いしか出てこなかった。

目の前の少女は嘗ての自分であり、自分が持っていない【力】を持っている。努力家である彼女にとって、努力なしの圧倒的な力はあまり良いものではない。だからこそ踏ん張った。

「まだだ… まだ私は倒れるわけにやいかねえ!!」

「私の遊び相手はみんなすぐ壊れちゃうんだ… 貴方はどこまで遊べるの?」

方や数百年の寂しさを紛らわそうと遊びを全力で楽しもうとする吸血鬼。

方や長年の努力を持って、目の前の強敵に立ち向かおうとする魔法使い。

2人の本当の戦いの火蓋が切って落とされた!!

『加速 ソールジェット』

「くたばれゴラアアアアアア!!」

「え!?! ちょま、ぐふうつつつ?!」

「へ？ きやつつっつ!?」

なんてことはなかった。ドアを無理矢理蹴破りその場にいる2人を纏めて蹴り飛ばす一つの影。先程の熱い展開やらシリアスに入りかけた雰囲気すら読もうともしない外道。博麗の神主が不意打ち気味に2人に攻撃を加えたのだ。まさに主人公失格、まさにクソ野郎である。

「つて、何すんだ零治?! 死ぬかと思ったぜ!？」

「…っち、生きてたか」

「死んでたまるか! とうか舌打ちしたいのはこっちの方だ!! 何でいきなりこんな場所まで来て、あまつさえ私を巻き込んで容赦ない一撃加えたんだよ?!」

割と強力な一撃を横から受けたが、魔理沙は辛うじて生きていた。壁にめり込みつつも博麗の駄神主にツッコミをいれる。

「良いじゃねえか、敵はぶっ飛ばせたんだし。多分今のがラスボスっぽいし、異変解決って事で万々歳だ」

「良くねえよ!!」

駄神主の余りの言い分に限界を超えた。パワーを發揮したのか、めり込まれた壁から無理矢理出て来た魔理沙。その際帽子の中に入っていた図書館の本を離さずに抜け出て来たあたり、ちやつかりしている。

「痛たたた…今の誰? フランの遊びの邪魔をしないでよ」

少し遅れて壁ごと貫通して吹っ飛んでた吸血鬼が戻ってくる。さつきと違い余程堪えたのか首のあたりをさすつて痛そうにしている。

「…悪いけど俺、急ぎの用事「逃すと思うか？」ですよー」

馱神主は逃げようとしたが、魔法使いに回り込まれてしまった。このまま何もしないで帰ることは無理だと悟った彼は気怠そうに目の前の少女を見た。

「…お兄さんもフランと遊びたいの？」

「出来ればパスしたいんだが、どうもさつき遊んでた先輩が限界みたいなんで、」

馱神主は構える。

「遊本気を出すんでやる…少しだけな」

幻想郷最強の男は不敵に笑っていた。

To be continued…

面倒くせえけど本気出すか

想像を絶する強さを持つ2人の人物が戦うとして、狭い個室で収まる範囲であるのだろうか？

「お兄さん強いんだね！ 中々壊れないなんて!!」

「こちとらしぶとさが売りなんでなあ!!」

答えは否。戦闘を開始してすぐさま頑丈な造りの部屋は消滅（その際魔理沙は辛うじて避難した）し、2人は戦いの場所をすぐ近くの図書館へ移す。

「むきゆう…今の音は一体…フラン!? 不味い!!」

丁度タイミング良く起きた図書館の所有者である魔女…パチュリー・ノーレッジが状況をすぐさま理解して結界を張る。

ギリギリで間に合ったそれは2人の戦いの余波を最小限に抑えて館の破壊を防いでいる。だが、あくまで図書館全体を覆う結界なので自分に降りかかる流れ弾までは防ぐことができない。

「ぜえ…ぜえ…危ない!? つく…こんな事なら…ゴホツ、ゴホツ…運動の一つでも…ゴフツ、ゲホツ…すれば良かったわ」

身体能力が極端に低く、喘息気味の彼女は2人の流れ弾を命懸けで避けることを強いられていたのだった。

『禁忌 クラウンベリートラップ』

幼い吸血鬼の少女… フランドール・スカーレットが宣言とともに攻撃を開始する。それは彼女が遊びに本気を出し始めた証拠であった。

魔法陣が幾つか出現したかと思えば、それらは神主の四方を囲む様配置され赤と青のエネルギー弾を発射する。それらを幾つかは回避し、残りは熱エネルギーを纏った腕で弾き飛ばす神主。

「まだまだだ！ 鬼ごっこは相手を捕まえるまで終わらないよ!!」

だが、それらは全て軌道を変えて再び神主に襲いかかる。所謂追跡弾であるこのスペルカードは狙った標的を捕ま^{殺す}えるまで追いかける弾を発射するものだった。

「ちっ… 随分と面倒な技を初っ端なからぶっ放すんじゃねえよ!!」

『冷熱 水蒸気爆発』

逃げ惑う神主から煙が噴き出し始める。それは、周囲の水分を冷やした事により目視出来る様になった水蒸気であった。それらが赤と青の弾幕を包み込んだ事を確認した彼は急激に熱する。

「爆ぜろ」

轟音。外の世界で水蒸気爆発と呼ばれるその現象は強力な弾幕を無理矢理消しとぼした。

更に、その爆風を持ってスピードを上乗せしつつ拳を握りながら少女へ突っ込む。これがプロの戦闘員であればすぐさま迎撃に移るなりするだろうが、生まれた時から一人ぼっちで、戦う事など知らなかった彼女はただただその様を見つめるだけだった。

「そしてくたばれ」

彼の拳が突き刺さり、吹き飛ばされる吸血鬼。そのまま地面に激突し、本棚を破壊して、一つの巨大なクレーターを形成する。

「…ふう。とりあえず今の内に糖分補給、つと」

そうやって、懐から2本ほど串団子を取り出し頬張る。もろ戦闘中だというのにこの余裕、流石駄神主は伊達じゃない。

『禁忌 レーヴアテイン』

「キヤハハハハハハハ!!」

だがすぐさま、炎の剣を携えた少女が神主に襲いかかった。当たるところか掠っただけでもその桁外れの温度により灰になってしまう炎剣。それを見た彼は食べ終えた2本の串を構えて技を宣言する。

『氷刻剣 ドライサーベル』

串は凍り、2本の剣となって少女の技を防いだ。向こうが高い温度であればこっちは低い温度である。触れるだけで火傷をする程の低温である双剣は空気が抜ける様な音を放ちながら炎の太刀を確実に受け止める。

「面白い… もっと… もっとないの!!」

「ちっ… 面倒くせえ」

だが相手は吸血鬼。いくら幼いといえど、単純な力比べでは劣ってしまう。その事をわかっているのか彼は敢えて間合いを離して体制を整える。

「早く… 早く見せてよお兄さん!!」

駄々をこねる子供の如く、彼女は剣を振り回して鬱積を晴らそうとする。だが、敢えて彼は最小限の動きで避けた。無駄な動き程面倒くさいものはないと考えている博麗の神主。そんな彼が本気を出す場合、普段のド派手な技だけでなく、地味で確実な大技を叩き込んだりもするのだ。

「うざってえ… 餓鬼の相手は大っ嫌いなんだよ。クソが」

それでも中々近付けないので、余裕な見た目とは裏腹に内心物凄くイラついている。

戦いにおいて重要なのは有利に運んでいるかではなく、如何にムカつく相手をぶっ飛ばせるかというなんともらしいこだわりを持っている彼にとって、この状況は我慢ならないものだった。

「まったくどうすりゃあ… ん?」

ふと、彼の視線の先に一人の紫もや… 失礼、一人の魔女が映った。そして、外道である駄神主はすぐさま行動に出た。

「ぜえ… ぜえ… って、なんでこっちに… !?」

「一編死んでこいや紫もやしいいい!!」

『生贄 人間ミサイル』

「ちよ、それルールいは、むきゆううううううう!!?」

凍った双剣をバットの形にして、紫の魔女を吸血鬼の方へとぶっ飛

ばした。最早外道を通り越して人の皮を被った悪魔である。

そのまままっすぐと突っ込み激突するパチユリー。追撃として駄神主が弾幕を何発か放った為爆発に包まれた。

「む… きゆう…」

哀れパチユリー・ノーレツジ。彼女は外道によって死に掛けとなったのであった。

「あははは！ 面白い!! チャンバラごっこは飽きちゃったし… 今度は何して遊ぼうかな？」

しかし、彼女の犠牲はただ単に幼い吸血鬼を喜ばす事しか出来なかった。所詮もやしはもやし、そもそもダメージを与えられる要素など何処にもない。

『禁忌 フォーオブアカインド』

「二」決めた！ いっぺんに沢山の遊びをしよう!!」

言うが早いか、少女は4人に増える。分身特有の力が4等分になってしまうとかそういうったものは全くなく、単純計算で4倍の力を彼女は持ったということになる。

更に、無邪気な少女の残酷な提案はここまででは終わらない。終わるわけではない。

『禁忌 カゴメカゴメ』

『禁弾 カタディオプトリック』

『禁弾 スターボウブレイク』

『禁弾 過去を刻む時計』

「4人に増えた上にそれぞれ違うスペカ使うとか…反則じゃねえか」

先程紫の魔女をぶっ飛ばした駄神主が言えたセリフではないが、まさしく目の前に広がっていたのは反則的な量の弾幕であった。最早避ける隙間など無いに等しく、余りの光の量で目に悪い仕様となってしまうてる。

この量を避ける事は不可能である。故に彼がとった行動は

「しょうがねえ…本気出すか」

弾幕戦においての文字通りの切り札を使う事だった。この技は博麗の巫女が用いるとある技同様、制限が科せられている。

『化学 吸熱反応』

一回の戦いにつき一度しか使えない技…彼女が放った全てのエネルギー弾が彼の翳す左手に吸い込まれる。その技は…エネルギー弾を主に用いる弾幕戦においては無敵の強さを発揮する。流石に博麗の巫女のあの技程理不尽な仕様ではないが、それでも脅威な事この上ない。

「さて…俺は外道なんでな…このまま何もしない程、甘くはないぜ」

外道は黒い笑顔でもう一つの技を発動する。

『化学 発熱反応』

吸収したそのエネルギーを左手に凝縮して4人に放つ。もうこの時点で、神主の勝利は確定する。

「残念だったな。俺が大人気ないクソ野郎で」

鳴り響く巨大な轟音。それによる爆発は、少女どころか図書館、ひいてはまだ辛うじて張られてあつた結界をも巻き込み、白い光を放つのだつた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

まだ遊びたいだど？ 面倒くせえから嫌だ

「大丈夫か？ 魔理沙に紫もやし」

駄神主はあらかじめ張ってあった2つの薄い氷の膜を叩き割り、中にいた人物の安否を確認していた。

「おう…： なんとというか。 本当なんでもありだな、 お前つて」

「そうは言うが、俺からしてみればテメエらの方がなんでもありだよ」

彼が元いた世界では自分の様な能力者は余りいない。 微弱なものだったり、解析不能なものだったり、実験によって発現したりは存在するが、それでも6割方は普通の人間だ。

そんな彼からしてみれば、スペル越しとは言え努力さえすれば人間だって弾幕といった超常を発動できてしまうこの世界が異常だと思っっている。

「…： あれ？ そういや紫もやしの返事が」

ふと、神主が返事が一つ足りない事に気付き紫の魔女の方へと視線を向けた。

(?? ?) くむきゆう…：

「…： さーて先進むk 「おiiiiiiiiii!? 何で死に掛け何だぜ!?」…： 知らん」

白目むいて口から泡をブクブク吹きながら、パチュリーの霊圧がどんどん下がっていた。 運動不足気味なのに、無理矢理流れ弾を避ける

がために身体を動かさせられてグロッキーな状態だったところを馱神主の外道技によるトドメ。既に彼女のライフポイントはゼロだった。

「どうすんだぜ?! なんか魂みたいなの出かかってるんだけど!? 空から聖なる光つぼいのが照らし始めたんだけど!?」

後半、最早だぜ口調さえ忘れて魔理沙は目の前の馱神主の首根っこを掴んで揺らす。先程戦った相手とはいえ目の前で死なれては気持ちの良いものではない。というか絶対この神主が原因だっていうのに何もしないのに軽い殺意が湧いていた。

「大丈夫だっつーの。こんな事もあるうかとこいつを持ってきたから」

さて… 読者の皆様もすっかり忘れているだろうが、この馱目人間は一応神主である。つまりは霊とか魂とかの扱い方も心得ている訳だ。そんな彼が取り出したのは白い三角巾。

「死装束じゃねえか!？」

死人に着せる衣装をそつと彼女の頭に取り付けて手を合わせる神主。心なしかパチュリーの靈魂みたいなものが安らかな笑みを浮かべている。徐々に、徐々にへと彼女が天国への階段を登って行く証拠でもあった。

「死ぬなあああ?!? それ以上は進んじや馱目だああ?!?」

魔理沙が心臓マッサージをしながら必死に叫び出す。それが功を成したのか、あと一歩の所で彼女の靈魂らしきものは宿主の所まで戻っていき、入ると同時に彼女の顔色が元どおりとなる。

「む… きゆう… わたしは… いったい… あ」

むくりと起き上がり、現状を確認しようとするパチュリー。周囲に広がるは嘗てないほど荒れ果てた元図書館。長年集めた本や研究資料がチリになっている様を見せつけられた彼女は涙を流していた。今日は彼女にとって最悪の厄日だったのかもしれない。

「んじやま、帰るとすつか。いやー、ちかれたちかれた。もう身体がガツタガタで動けねえ」

そう言いつつ図書館から出て行くこうとする神主。吸血鬼との戦いをあつさりとした彼は何の心残り一つせずさつさと行動に移る。後ろで2人の魔法使いが喚んでいるが彼には御構い無しである。

「ふあゝあ。これ終わったらBBAに特別手当貰お。何せ久々に、おっと」

彼は少しばかり首を傾げる。するとさつきまで頭があつた場所をエネルギー弾が通過した。それを放つたのは普通の魔法使いでなければ、紫の魔女でもない。

「嫌… もっと遊びたいの… まだ終わりたいくないの!!」

先程吹っ飛ばした筈の幼き吸血鬼であつた。博麗の神主はやれやれと気怠そうに後ろを振り返り、少女の方に視線を移す。

最早ボロボロ、戦いなんてとてもではないができない。そもそも動くことさえできない筈の負傷。再生能力を持つ吸血鬼ですら重傷と言ってしまう程の傷を負いながら彼女は泣いていた。痛みにはない、終わってしまう事に涙を流していた。

「やめとけ。これ以上は面倒くせえ上に… 死ぬぞ?」

神主は殺気を放ちながら少女と向き合う体制になる。先程の面倒くさそうな表情ではない。まるで人を殺す獣の様な視線を相手に向けたのだ。これ以上は容赦しない…。そんな意思表示を示す。

「だって…。私は一人ぼっち。お姉様は外に出してくれない。私が全部壊してしまうから…。でもお兄さんは壊れなかった!! 思いつきり遊ぶ事が出来た!!」

それでも彼女は叫んだ。自分の寂しさを誤魔化したいがために自身の胸の内を神主に伝えた。それでも神主は何もしようとしなかった。

「…お兄さんも私を怖いと思うの？ 私と遊びたくない」と「違えよ」

神主は視線を元のだらけきったそれに戻して、彼女の言葉と寂しさを否定した。

「甘ったれんじゃねえ…。大体、そんなにこの館が嫌ならぶっ飛ばして外へ出ればいい。それが嫌だったらお姉様とやりに不満を言えればいい」

「でも…。言っても駄目だった」

「何度も言うんだよ。何度も…。何度も…。な。我儘を言つて、駄々をこねて道理を通すのは下の子の特権なんだ、使えば良いじゃねえか」

彼女は納得できなかった。目の前の神主の言い分を聞き、自分の495年間で否定されていると思い、激情に駆られた。

「何が解るの… 私寂しさの何が解るの!!」

「…」

その言葉を聞いた神主は少し口を閉ざして沈黙し、やがてゆっくりと口を開く。

「ちつとも解らなかった… そもそも解ろうともしなかった。だからこそテメエには同じになつて欲しく無いんだよ」

「同じ?」

神主が少しばかり悲しそうな目をしている。フランには、そう見えただった。

「… ま、本音を言うとテメエとこのまま戦いを続けるのがめんどいだけだが」

「珍しくまともっぽい事言ってると思ったらそう言うことかい」

しかし、最後の最後で彼が平常運転に戻った事により、魔理沙が突っ込んだ為に真相は闇の中となってしまうのだった。

「まあ… あれだ。そんなに遊びたいんだつたら今は無理だがいつでも遊んでやるよ」

「ほんと…?」

ただし、と神主は条件を一つ提示した。

「俺が態々出向くのは面倒くせえから、お前が自分から外に出て博麗神社まで来い」

「え…でもお姉様が…大丈夫だって、どんな野郎でも言う事を聞くであろう魔法の言葉を教えてやっから」魔法の言葉？」

神主はすぐさま少女の近くまで寄って、耳打ちをする。その際物凄く黒い笑顔の表情を取ったので絶対碌な事ではないだろう。

「…で、その時にこう言うんだ…：…：…てな」

「…でもそんなので大丈夫だって、この言葉を聞いて揺らがない奴なんざいねえ」

「(何故だろう。絶対碌な事じゃないってわかってしまう…と言うか何で戦いの時よりイキイキしてるんだよあの神主)」

その光景を見て、2人の魔法使いがほぼ同じことを神主に対して心の中で思っていたのだった。

To be continued…

雑談だと？　面倒くせえ

時間は少しばかり戻り、紅魔館と呼ばれる館の玉座の間に1人の人間がやって来た。

「…成る程、博麗の…巫女の方ね」

それを見て、玉座に座っている吸血鬼は驚き狼狽える事など全くせず、寧ろ残酷で冷たい笑みを浮かべていた。

巫女は気怠そうに館の主人であろう吸血鬼に答える。

「此処から出て行ってくれない？　あんたが居るせいで洗濯物が乾かないのよ」

まだ引き摺っていたのか、とでも言わんばかりに洗濯物の件を言いながら提案をする巫女。というか、何方かと言うと侵入者は彼女の方なので、この場合寧ろ出て行くのはこちらの方である。

「此処は私の城よ？　出ていくのは貴方だわ」

館の主人もその言葉が少しばかり気に食わなかったのか、殺気を放ちながら目の前の巫女を睨みつけた。

普通の人間であれば震えが止まらず指一本動かせない程のそれ。しかし、博麗霊夢という人間は駄神主と同じようなタイプである。

「言い方が悪かったみたいね。私が言ってるのは…この世から出て行って欲しいの」

殺気？　そんなもん知ったこっちゃねえと言わんばかりに彼女は目の前の吸血鬼を見ながら言い放った。しかも内容が割と酷い。流石は悪い意味で万人平等の博麗の巫女である。

「私に臆するどころか、そんな言葉を放つなんて……しようがないわね。今、お腹がいっぱいだけど……」

吸血鬼は立ち上がり背中に見える翼を広げた。更に、魔力を解放したことにより周囲の大气が震え上がる。

「やっと戦う気になった様ね。ところで、あなたは強いのか？」

それに合わせて博麗の巫女も灵力を解放する。同様に周囲の大气を震わせるそれは、吸血鬼が放った魔力とぶつかり合う事により巨大なうねりを形成している。

「さあ、余り外に出てないの。私が日光に弱いから。だけど……今はこんなにも月が紅いから本気で殺すわよ」

両者は戦闘体勢に入る。

「今ならあいつの気持ちかわかる気がするわ。こんなにも月が紅いのに……」

「永い／楽しい夜になりそうね」

言うが早いのか、2人は天井を突き破り戦いの場を赤い空に移して、戦闘を始めるのだった。

……
……
……

「ちいゝす。ベジータ・ヘターレットさんは御在宅でしょうか？ 居

なかつたらこの館は俺のものになりまーす」

数十分後、玉座の間に遅れて入って来た4人の人物。それは先程図書館にて激闘を繰り広げていた者達であった。因みに重傷人のフンは駄神主が懐から取り出した空飛ぶ陰陽玉に跨っている。

早速色々と失礼な事を宣っている駄神主。もうそういったのに慣れたのか、誰一人としてその事にツツコミを入れようとしなない。

「…誰もいねえじゃねえか。どうしてくれんだよもやし、ぶっ殺されてえのかエノキダケ」

「おかしいわね… 何時もならこの玉座でアホみたいに踏ん返っている筈なんだけど。あと私はパチュリー・ノーレッジよ」

紫の魔女…パチュリーが割と大概な事を言う。長年の親友故のちよつとした悪口を言いながら、自分の名前の訂正を駄神主に求めようとするが面倒くさがりの外道である彼には恐らく無理な話だろう。

「…ひよつとしたらあれじゃね？ お前らがいうヘタリアとかいう野郎は想像上の産物…つまり幻覚だったんじゃないの？ 良かったなフラン。これでお前は自由だ。誰もお前に文句言ったりしないんだ」

「そんなわけないでしょうが… 咲夜」

パチュリーがそう言うと、まるで最初からいたかの如く銀髪のメイドと思わしき人物が現れた。少しばかり服装がボロボロな事から、恐らく博麗の巫女と戦ったのだろう。

「はい。パチュリー様… どういった「おい駄メイド、お客様命令だ。菓子折りの一つでも持て成しやがれこの野郎」この神経を逆撫でする

ウザい男の首を切り落とすのですか?」

流石駄神主、初対面でもブレない。彼の1000人が見れば100人がイラつくであろう表情で言われた言葉に、会って間もないメイドはすぐさま目の前の駄目人間に軽い殺意を抱いてナイフを構えた。

「いいえ咲夜。それは後にして頂戴「おいこら紫もやし」それで、レミイは一体どうしたの?」

「お嬢様でしたら...」

メイドは人差し指を伸ばして天井を指差す。そこには巨大な穴が2つ空いていた。

「...成る程、空中戦か。だったら霊夢の勝ちだぜ」

その情景を見て、恐らく上空で戦っているだろう巫女の(自称)ライバルである魔理沙がそう言っただけのける。それは、長年の付き合い故の言葉であった。

「それは聞き捨てなりませんね。お嬢様が人間如きに負けるなど、有ろう筈がございせんから」

それを聞いたメイド...十六夜咲夜はすぐさま否定して、自分の主が絶対に勝つと信じて疑わない。何故なら、彼女は自分が幼き頃からずっと仕えてきた恩人であるから。

「...おいメイド。テメエには悪いが、今回ばかりは魔理沙の野郎の言ってる事が正しいだろうな」

そう、駄神主は言った。それは長年の信頼とか、友情とか、ライバ

ルとしての応援とかではない。

「ありのまま…話そう。アレは俺が行き着けの団子屋に行ってた時だった…ある事がきっかけで霊夢を怒らせちゃってな、俺は出口へ向かおうとしたが出れなかった。此処までならまだ良い。問題は…」

彼は神妙な声で話し出す。それはプロログで甘味処に赴いた時、彼女に博麗ドライバー（本人曰くまだまだ未完成）を喰らった時の事である。

「何時の間にか、世界が逆転して真つ暗になっちゃったんだよ…何言ってるかわからねーと思うが、俺も何されたかわからなかった。（物理的な意味で）頭がどうにかなりそうだった…人間とか、鬼とか、そんなちやちなもんじゃ断じてねえ。もっと恐ろしいナニカだ、アイツは」

実際、殆ど自業自得ではあるのだがその件は駄神主に少なからず影響を与えた。今となっては割と数あるうちのトラウマの1つに数えられる程だ。

「へへ、人間って凄いなだね！」

フヨフヨと浮かびながらフランが興味津々に答える。駄神主のトラウマ話も、無邪気な少女にとっては面白くて楽しい話なのである。

「妹様、違います。この馬鹿の言葉に惑わされなくてください。そもそも何故そんな大怪我していて、しかも地下牢から出ているのですか」

「魔理沙が出して、俺と戦い、レ、ミ、リアに説得という訳だ。文句あつ

か」

咲夜がフランに対して思っていた疑問に、某有名な○タヤのCMみたいなリズムで答える駄神主。それが余りにもふざけ過ぎているのか、とうとうシリアスな雰囲気は何処かへと向かってしまい

「「大有りだよ!?!」」

ツツコミと共に、いつの間にか余りに退屈となってきたので少し雑談を始める5人だった。

先程まで殺しあった者たちの会話とはとても思えない他愛のない会話。

けれども外の世界を何も知らない少女にとっては新鮮で、興味が湧き立つものばかり。

楽しい楽しい雑談は、上空の2人の戦いが終わるまで続いたのだった。

To be continued...

面倒くさかったけど、一件落着か…

「お、戻って来た」

雑談を続けて数十分後、漸く巫女と吸血鬼が降りて来た。両者同じぐらいボロボロだという事から、互角の激闘を繰り広げていた事が伺える。

「…ふあゝあ。やっと終わったか、それでどっちが勝ったんだ」

余りにも退屈だったので眠っていた神主は、目を擦りながら勝敗を聞く。敵の陣地のど真ん中だというのに羽を伸ばす豪胆っぷりは、周囲を関心に近い呆れを抱かせる程だった。

「当然、私よ」

どうやら、無事博麗の巫女が勝つたらしい。気怠い表情に少しばかり嬉しさの感情を表に出している霊夢とは対照的に、紅魔館の主であるレミリアは悔しそうにしている。

「お姉様に勝っちゃうなんて… 外の人間って凄いなだね!!」

2人の勝敗を聞き、興奮を露わにするのはフラン。彼女にとっては強さと憧れの象徴である姉が、館の外の人間に負けたということに悔しさよりも興味が湧いたのである。

「クソッ！ あそこで避けていれば… って、フラン?! あなたがどうして此処にいるの!？」

喜ぶ少女の姿を見て、驚きを隠せない紅魔館の主。その大声を聞いて漸く完全に目を覚ました神主は、少女に目配せしながらレミリアに提案をするのであった。

「あー、それに関しては俺が話すわ。えーと… エミリア・スカーレットさんよ」

「レミリア・スカーレットよ」あーハイハイ名前は気にしなくていいですよ。長つたらしくて覚えんの面倒くさいし」いや私が気にするわ。それで… 博麗の神主、貴方に聞くけどこれは一体どういう事かしら？」

そう言つて、殺気を向けるレミリア。だがそれすらどこ吹く風で神主は話を続ける。

「理由は至つて単純、こいつが外で遊びたいらしいから、外出の許可を欲しいんだと」

「それは無理な話よ… もしフランが暴走して全てを壊したら…」

それは館の主として、姉としての反論であった。

嘗て、一度だけ暴走してしまった時… 周りの全てを壊しかけてしまふ程の力を振り回した少女。その時は辛うじて止める事が出来た… だが次はどうなる？ もしそれがもう一度起きてしまったら、自分や、眷属、周囲の者… そして、彼女自身もただでは済まない。そう考え、495年もの間自分は悲しみを押し殺して閉じ込めていたのだ。

その言い分を聞いた神主は少し思慮して…

「ふわーあ」

欠伸を一つ漏らした。涙を流してはいるがそれは眠気によるものであり、彼は一切吸血鬼の話に感情を抱いてないと表面上で見取れる。そう感じたレミリアは殺気をさらに濃く、鋭くした。それは周囲の者ですら怯む代物だが、神主は一切動じない。

「全ては姉が妹の為にやった事。いやー、感動した。感動しすぎて思わず涙出ちまった…。だがな、妹の幸せまで奪っちまってる時点でそれはただの自己満足に変わってるんだと気付け。手遅れにならない内にな」

そして彼は言った。自分の意見を相手に伝えた。まるで警告をしている様に言うそれは、普段の神主に似合わない程真剣であった。

「俺は… テメエみたいな、そういう分からず屋が大っ嫌いなんだ」

吐き捨てたそのセリフは、その場の全員の耳によく聞こえたそれは、まるで神主が自分自身を苦しめているかのような、戒めの言葉であった。

「…」

その言葉を聞いて思ったところがあつたのか、黙ってしまうレミリア。その様子を見て、張り詰めた雰囲気や元に戻し元の気怠そうならしない表情に戻った神主は、少女にゴーサインを出した。

…
何故か黒い笑みで親指を下に伸ばすサインを

「んじや、俺はさっさと帰るわ。どうせ俺が居てもお邪魔虫だし、後は任せたぜ。館の修理とか面倒いしな」

「あ!? 待て?!」

そして半ば強引に逃げた。激闘による疲れ、しかもシリアスパートの直後という誰しもが油断しているだろう瞬間による行動が為に、時止めや結界などといった捕獲手段が出来なかった。

「後！ 最後にテメエらに言っけて置いてやる。俺の一番嫌いな言葉は「努力」で二番目は「ガンバる」だ!! んで自己満足は・・・大体108位ぐらいで、何故かってーと俺がそういうタイプの人間だから!! つーわけであればよ!!」

「二」(散々言いたい放題いつてのけて途中で帰るって・・・最早クソだわ)「三」

博麗の巫女、普通の魔法使い、銀髪のメイド、紫の魔女・・・彼女ら4人が心中で全く同じ事を考えたのは奇跡でもなんでもない。寧ろ駄神主相手にそう思うのはごく自然な事である。其れ程に彼はクソだったのだ。

それを見届けた2人の吸血鬼。妹の方が先に口を開く。

「・・・お姉様」

「フラン・・・」

それは、400年以上もの永い間交わされていなかった姉妹同士の会話であった。

.....
.....
.....

「――駄目だ… 死なないでくれ!! お前が居なくなったら俺は…

「――私の為に… 今までありがとう… お兄ちゃん… せめて… 最期にもう一度だけ… 昔みたいに…」

「――っ、」

「――いっしょに、外で… あ… そ… び… た… かつ…」

「異変解決お疲れ様、博麗の神主… 嫌、菊池零治」

紅魔館から博麗神社へ向かう途中の上空にてある事を思い出していた神主の前に、突如裂け目が現れその中から1人の女性が顔を出した。

彼女は八雲紫。幻想郷の事実上の支配者であり、目の前の博麗の神主を幻想入りさせた張本人である。

「黙れ、BBA… 俺は気分が悪いんだ。今回の散々しんどい目に遭った上に、テメエの面を見たからよ」

神主は目の前の女性に殺意に近いものを発していた。それは先程のいつもとは違う雰囲気と同じ悲痛なもの。まるで気怠さの裏に押し殺していたものを全て向けた様な殺気を放っていた。

「あの子を見て、思い出したの? ここに来る前の事を… 貴方がまだ駄目人間でなかった頃の「黙れ」」

「… もし、あの時テメエが余計なことをしなければ… 俺は楽になれた。今とは違ってな… だからこそ、俺はテメエを憎んでる。殺し

てしまいたい程にな」

「… だからこそ、私は余計なことをしたのよ」

彼女は悲しい表情を浮かべた。そうする以外にできることがなかったから。もし下手な事を言えば、神主は自分以外に何をしてしまうのかがわからなかった故である。

「… もういい。ここで殺気を放った所で、テメエを殺すどころか自殺すら出来やしない。だからもういい… もう、な」

やがて、埒が明かないと察した神主は殺意を消して元の表情に戻る。そして、彼は今の住まいである博麗神社へと飛んで行ったのであった。

「… 幻想郷は全てを受け入れてしまう。それはそれは残酷な話…」

そう、彼女はポツリと呟いたのだった。

T o n e x t c h a p t e r . . .

春雪異変

また異変だと？ 面倒くせえ

紅い霧の騒動が終わり、いつも通りの敵味方関係なしの宴会を博麗神社ですませて暫く経った頃。

つまりは四月・・・のどかな春真っ盛りの季節。陽気に包まれ花が咲き乱れ、ポカポカと暖かい空気が自然を癒していくそんな季節・・・

「寒い!!」

なんて事はなかった。寧ろ花ではなく雪に包まれていて冷たい空気が外に突き刺さっている。

「いやあく、やっぱり冬はこたつで丸くなるのが一番だな」

「それは私も同意ね」

春真っ盛りの時期の筈なのに外は冬まつしぐら・・・異変の類であるだろう状況だが、それを解決する役目である2人の博麗はこたつでのんびりとしていた。

「まく、そもそも態々こたつに頼らなくてもあんたの能力を使えば1発なんだけど・・・ZZZ」

「やだよ、面倒くせえ・・・ZZZ」

駄目巫女と駄神主。博麗駄目コンビはそのまま覚めることのない眠りにつくのだった。

博麗の（やる気の無い）神主く完く

『彗星 ブレイジングスター』

「つて、何勝手に終わらせてるんだあああああ!!」

轟音と共に突っ込んできたのは箒にまたがった1人の少女。勢いを付けたそれは襖ごとこたつを吹き飛ばした。

「こ、こたつがあああああ!?!」

先程のだらけっぷりから一転、まるでこの世の終わりを迎えた様な表情で叫ぶ2人。

「お前ら! さっさと異変解決に行くぞ!! 時間は待つてくれないんだぜ!!」

「こたつが…シエスタタイムが…」

「どうしてこんな目に…」

だが、魔法使いの叫びも虚しく2人は動くどころか立ち上がることもすらしらない。生きる気力を失った屍の如く、その場に跪いている。

「(駄目だこいつら、早くなんとかしないと)」

故に、そんなことを考えた魔理沙は呆れと共に2人を無理矢理叩き起こすのだった。

.....

異変が起こってるから解決に向かわなければならない。それが博麗の巫女と神主の役目である。故にいつもの3人+たまたま訪れたメイド1人が異変解決に向かう事となったのであった。

「はあー、これのどこが異変なんだよ。ただ単に雪が積もってるだけじゃねえか」

「あのなあ。今は4月なんだぞ。それなのに雪が降ってるなんて明らかに異常だと思うぜ...」

どうしても異変を認めようとしないう駄神主はこたつを壊された事もあつてか文句を言う。それに対して呆れながら魔理沙はツツコミを入れた。

「それにな...」

駄神主は銀髪のメイド...十六夜咲夜に目を向ける。その視線はまるで不審なものを見るそれに近いものだった。

「私の顔に何かついてますか?」

「なんでお前が居るって事だ...さてはテメエが犯人じゃねえだろうなあ? 駄メイド」

そう言つて神主は自分的に怪しいと思われる咲夜にいちやもんをつけて… あわよくばここで倒して異変解決した事にしようとする。相変わらずこの駄目人間は平常運転である。

「まず… 私が態々博麗神社まで来たのは、どこかの誰かさんが妹様に入れ知恵したおかげでお嬢様が未だに再起不能に陥っているのいい加減落とし前をつけさせようと思ったからです。それに、あなたは知つてると思いますが、私にそんな能力はありません」

そう言いながらナイフを構えて臨戦態勢に入るメイド。初対面の時からこの二人は馬が合わなかった。だらけきつたもの、几帳面なもの… 両者が相容れる事などあるはずもなく、犬猿の仲に近いものであったのだ。

「入れ知恵もなにも… 俺は真実を教えてやったただけだ。それにな… 吸血鬼関連、時を止める、ナイフを用いている… つまり駄目イド!! テメエはすでに人間をやめていて、気化冷凍法でも使つてこんな異変を起こした!! 違うか?」

「全然違います… というかその理論でいけば一番怪しいのは貴方だと思えますが? 駄神主」

「もういい加減にしろよお前ら!? なんで会う度に喧嘩に発展するんだよ?!」

異変も始まったばかりでとんでもなく険悪な雰囲気になつていたこの状況に耐え切れずに魔法使いは叫んだ。哀れ魔理沙、彼女は最早ツツコミという呪縛からは逃れられない運命となつたのだ。

そんな一行に近づいてくる一つの影… 前回と変わらない姿と自信満々なオーラを漂わせながら出現したのは一人の氷精であった。

「あたいと勝負しろ!!」

前回の時に駄神主に吹き飛ばされたチルノである。復活した際に頭が弱い故に記憶が飛んでしまったために、懲りずに彼女は一行に挑もうと立ち塞がってきた。

「おいメイド。お前が行け。あの野郎の相手は面倒くさいし」

「嫌ですね。あの様な馬鹿の相手は、同じ馬鹿である貴方様がやって下さい」

それでも喧嘩をやめない二人。それを見て、もういいやと悟った魔理沙はふと先ほどから一言も喋っていない霊夢の方を見た。

「こたつが・・・」

「お前はお前でいつまで落ち込んでいるんだよ!？」

もうチームワークとか連携とかそれどころの問題ではないほどにカオスな光景であった。だが、頭が⑨な氷精はその光景を見ても一切の違和感を抱かず、寧ろ自分に怯んでこうなっているんだと自己完結して口を開いた。

「流石はあたい！ たたかう前から勝つのは・・・最強であるしようこだ!!」

胸を張りながら言った言葉・・・それは4人の逆鱗に少なからず触れてしまう。

「「少し黙ってる⑨!!」」

「あたい!？」

轟音。4人が放った弾幕は氷精を完全消滅させるに至った。だが、自然そのものが破壊されたわけではないので彼女はまた復活するだろう。そして、同じ過ちを繰り返すだろう。それがチルノという馬鹿であるから。

.....

立ちはだかる氷精を明らかにオーバキルであろう弾幕で消滅させた一行。先を進んで暫くして、魔理沙は最初からずっと疑問に思ってたことを口に出す。

「... そういえばお前ら2人はよくその格好で居られるな」

そう言つて巫女と神主を指す魔理沙。自分とメイドはマフラーとコートを上羽織るなどある程度の防寒対策をしている。だが、対照的に二人の博麗の服装はいつも着ている巫女服に一般的な神主が着る様な服とどちらも寒さには滅法弱い様な服装だ。

それに対して二人はさも当然のように答える。

「俺は能力があるから寒さなんか効かねえのさ」

「私も霊力で寒さを防いでるから大丈夫なの」

「(じゃあなんでこたつにこだわるんだろう)」

寒さをもとしない2人に対して魔法使いとメイドは素朴な疑問が浮かんでいったのだった。

異変解決はまだ始まったばかり… それなのに前途は多難… 凸凹な組み合わせ（主に馱神主のせい）は果たして、無事に黒幕までたどり着けるのだろうか？

「くろまく〜」

… 答えは悪魔のみぞ知る。

T o b e c o n t i n u e d . . .

マヨヒガだと？ 面倒くせえ

「んんく… 何処だこは？」

博麗の神主が目を覚ましたのは、囲炉裏や木でできたダンス等が存在する昔懐かしき民家の様な場所だった。

「…」

少しばかり考える神主。先程まで自分は吹雪が突き刺さる雪景色のど真ん中にて異変解決の為飛んでいた筈。なのに今居るのは暖かい家の中。

「… あ」

そこまで状況を整理して思い出した。自分が何故こういった状況に陥ったのかを。

それは少しばかり時間を遡っての出来事だった。

く約10分前く

「くろまぐく」

いきなり出現した女性の、その言葉を聞いて博麗の2人はお互いに顔を合わせる。

「おい…。」

「ええ、わかっているわ…。」

そして同時に同じ事を口走る。

「こいつを倒せばいいんだな!!」

こたつを壊された恨みを丁度晴らそうと思った所に黒幕と思われる人物の出現。思わず黒い笑顔を浮かべてしまう2人の様子はおよそ主人公とは思えない程である。

兎も角、中々やる気を出さないコンビに闘志にも殺意にも取れる様なそれが浮かび上がった。

「じゃあ俺がやってやらあ!! 丁度ムカついてんだよ!! メイドや妖精に馬鹿のされるわこたつ壊されるわでな!!」

明らかに殺る気まんまん前に出る駄神主。動機が動機なので誰1人として感心の一つする事はなかった。

「春眠暁を覚えず… ってところかしら?」

立ちはだかる冬の妖怪…。レティ・ホワイトロックは駄神主にそんな質問を投げかける。

「どっちかつつーとテメエの永眠だ。くたばれ」

それに対して駄神主は主人公が言いそうにない、寧ろ悪役が好んで

言いそうなセリフを吐き捨てる。やはりこの駄目人間はいつも通り平常運転だった。それを聞いて流石のレティも少しばかり怯んだ。

「そ、そう…… 所で人間は冬眠しないの？ 哺乳類なのに……」

「するBBAもいるが…… 俺は生憎しないタイプの人間じゃボケエ!!」

そうは言うが、駄神主の場合年中昼寝という名の冬眠をしているので嘘である。寧ろこんなにあくティブな事自体滅多にない事なのだ。

「…… だったら安らかな眠りにつけてあげるわ……」

『寒符 リンガリングコールド』

彼女が宣言をすると、白と青の冷気を纏った弾幕が襲いかかってきた。避けようにもこの吹雪の中で強化されたそれは一筋縄ではないだろう。仮に弾幕自体を避けれたとしても、寒さに弱い種族である人間は冷気までは防ぐことは出来ない。

「だったら全部ぶっ飛ばせば問題ねえだろ」

彼女の失敗は、駄神主の存在である。いわば天敵である存在故にこの後為すすべもなく文字通り吹き飛ばされてしまった。

『冷熱 水蒸気爆発』

駄神主の失敗は、油断である。その一瞬の油断により、小さな……ほんの小さな氷の粒が鼻をくすぐってしまった。

「これでおわ…… は…… は…… ハックション!!!」

「「「え？」」」

宣言中のくしやみは、威力の調整を行う事が出来なかった。それはつまり駄神主が放った水蒸気を中心に、山一つ簡単に吹き飛ばせる程の爆発が発生したのだった。

「「「うわあああああ!?!」」」

剛音とともに白い光が雪の大地ごと空を覆った。

.....
.....
.....

そして現在に至るといふ訳だ。つまりはこの駄神主が全ての元凶である。

「... とりあえず、面倒くせえが探すとしようか」

面倒くさがり屋の神主にしては珍しくまともな意見。しかしその実態は、

「黒幕は多分ぶっ飛ばしたし。さっさとあいつら見つけてさっさと寝よ」

なんて事ない。ただのいつも通りの平常運転、駄神主、駄目人間の動機である。

襖を開けて部屋を出て、廊下の先を見ってみると気絶しているだろうメイドの姿が彼の視界に映った。それを見て暫く考え込む駄神主。十六夜咲夜とは前世で何かあったんじゃないかってレベルの仲の悪

さである彼は、底意地の悪い笑みで手の平に冷気を溜めた。

「名付けて、冷凍目覚まし時計」

じわり、じわりと近づく駄神主。絵面がアレなので敢えては言わな
いがそれはそれは醜悪な光景である。やがてすぐ近くまで来た彼は
冷気の溜まった手の平を彼女の首筋に当てた。

「起きろ駄メイドおおおお!!」

「!? 曲者!!」

首筋のひんやりした違和感にすぐさま飛び起き時間を止めてナイ
フを投げつけるメイド。得体の知れない恐怖に一瞬怖がっていたこ
ともあり約1秒という速さでこの一連の動作を終えてしまった。

「…成る程、そういうことですか」

止まった世界の中で、自分に何かをした犯人を理解した彼女。当
然、目の前のクソ野郎の為に態々投げつけた数本のナイフを回収なぞ
する筈もない。

「そして、時は動き出す」

その言葉とともに駄神主の断末魔にも良く似た悲鳴が屋敷内に響
き渡ったのだった。

.....
.....
.....

「あのさー、俺はちよつとふざけただけなんだ。なのに何でナイフで刺される事になってんのかなあ？」

「あんな事をされれば普通はそうなります。というか何で生きてるんですか？」

全身に刃物が刺さって出血はしたが、ギャグ展開だったという事もあり駄神主は一命を取り留めた。とはいえ完全に止血した訳ではなく傷口から少しずつではあるが血が滲み出ている。

「…まあ、そんな事よりも此処は一体何処なんですか？ 先程から妙に…猫が多いのですが」

茶色、ぶち、三毛、黒、見渡す限りの猫景色は見る人が見ればそれは癒される光景であろう。

「おい!? こつち来んな?! 傷口が開く!？」

それらが全て駄神主に群がって居なければ。ネコ科の一応肉食獣に分類される為血の匂いに誘われてこうなっているのか、はたまた単純に懐かれたかはわからないが、兎も角駄神主は鬱陶しそうにして居た。

「くそっ… この猫どもの懐きよう、やっぱり此処は「兄様ー!!」ヤベェ!？」

どうやら駄神主はこの場所に心当たりがあるらしく、廊下の向こうから響き渡る声を聞いてすぐさま避ける体勢に入ろうとする。だがしかし、猫がひつついている事で避けようにも避けられない。

「俺の… 俺の… オレのそばに近寄るなあ—— ツ!!」

最早、避け切れないと悟った馱神主はせめてもの抵抗に某第五部のギヤングのボスの如き叫び声を上げた。だが、それでも止まる事を知らない茶色い影。そして、それは弾丸の様な速さで馱神主の脇腹に激突。

「ゴフウ!？」

その2人の間に生じる真空状態の圧倒的破壊空間はまさに歯車の砂嵐の小宇宙!! 血反吐を吐きながら神主は全身の骨が折れる感覚を確信してしまった。

「嗅ぎ覚えのある匂いがしたから来てみたらやっぱり零治お兄様だったんだね!!」

「て… テメエかやっぱり… つまり此処は… ま… よひが…」

折れた。身体がではない。今この瞬間折れたのは馱神主のただでさえ脆い精神力そのものであった。それ故に視界が再び真っ白に成っていく。

「あれ? お兄様… お兄様!? 何でこんなに血塗れ?! それに何で死にかけなの!？」

先程突っ込んで来た猫耳を生やした少女… 橙はそんな馱神主の様子を見て狼狽える。そして、その光景を一部始終見てた紅魔館のメイドはというと。

「お兄様… まさかアレと兄妹… いや、それは無いわね。つまりは… 馱神主どころかロリコンとは… つくづく救い様がありませんねこの神主は)」

気絶している彼に対して割と失礼な結論を心の中で容赦無く叩きつけてたのだった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

人形館か… 面倒くせえ

「ゲフツ… ゴフツ… 大丈夫かテメエら？」

「その言葉そっくり返すわ!!」

猫に囲まれて血塗れで倒れ込んでいる駄神主を見て、霊夢と魔理沙が叫んだ。

駄神主といえど生物である。傷付き、疲労することはあるのだ。(最も、疲労に関しては日常茶飯事であるが)多分ギャグシーンでなければ死んでいただろう…。そう呼べるほどの重体であった。

「… というわけで俺は帰らせてもらうぜ。黒幕はぶっ飛ばしたし良いだろう？」

「… そう言いたいんだが、外をチラとだけ見て未だに吹雪いているからな… 私の勘だとまだ異変は終わってないと睨むぜ!!」

駄神主のセリフを魔理沙が否定する。さり気に彼が主人公らしからぬ負のオーラを出しながら舌打ちしたのは多分気の所為だろう。

「それで… 吹雪が強くて多分私の霊力じゃ防ぎ切れないし」

「私の防寒着も多分無理だし」

「私に至ってはマフラーと少しばかりの上着だけですのぞ」

「誰か暖を取ってくれる親切な人は居ないかしら／かな／でしょうか?」

3人は実に息のあったハモリ具合でその誰かさんをお願いを通そうとしている。これが普通の男であればイチコロかもしれないが、相手は外道な駄目人間だ。

「んじや俺帰りますわ〜」

逃げる駄神主。猫と猫耳少女が纏わり付いているが御構い無しである。

『幻世 ザ・ワールド』

『神技 八方鬼縛陣』

だがしかし、時を止められ場所を移動させられた上に強力な結界に阻まれて彼の逃走は失敗した。

「Nooooooooo!?!」

やたら発音の良い英語を叫びながら、なす術も無く駄神主は予備の等に縛り付けられて連行される。

その際、猫達と猫耳少女・・・橙が名残惜しそうに見つめて居たが、霊夢のまるで恋敵を見るかのような冷たい表情に恐れおののき退いた。猫は良くも悪くも危険に敏感な生き物である。

.....
.....
.....

一行は、魔理沙の心当たりを頼りに魔法の森へ到着した。その際に見えた光景は・・・

「だ、誰がこんな事を・・・」

見事に大地ごと森が抉れて居るといふ地獄絵図である。しかも、周辺の雪が多少溶けていることから熱エネルギーの爆発によるものであろう。

「…あれか」「あれだな」「あれですね」

そう、強大な熱エネルギーの爆発…そんなことをしでかした人物。勘のいい人ならお解りだろう。先程駄神主らが戦闘していた場所は奇しくも魔法の森の近くだったのである。

「…辛うじてアリスの家は無事みたいだな。パツと見だけけど」

そう言いながら、口と両手を縛られている駄神主に視線を向ける魔理沙。

「むー!? むー! (俺は悪くねえ!? だから離せ!)」

「駄目だ。やれ」

今まで碌な目に合わなかった魔理沙。漸く出来た仕返しの場合の冷酷な一言は、それはそれは清々しい表情であった。

「えー、こほん。ノックしてもしももおくし。先程貴女様がお住まいの魔法の森をぶっ飛ばした博麗の神主でございまーす。本日は友人の魔理沙めがそちらに用があるとの事なので、遥々此処までやって来た次第です」

最初はアレだが、駄神主は礼儀正しくドアの前での挨拶を行なっ

た。さしもの彼も自重の一つはする…。何せ命が掛かってるから。

「… 入って」

暫くして出て来たのは金髪の物静かな少女。その様子からして、どうやら駄神主は文字通りの骨に成らずに済んだみたいだ。

言われるがまま、一行は魔理沙の友人の魔法使い…。アリス・マーガトロイドの家へと入るのだった。

……………

……………

……………

そこには大小様々な人形があり、中には1人でに動いている物も。取り敢えず3人が家の中の人形を見ている間、魔理沙がアリスと話していた。

「… それで、私に何の用かしら？ 魔理沙」

＜ナニカシラコノドクロ？ トリアエズオシテミマシヨ

＜… コツチヲミロオ

＜オィィィィ!? ナニオシチャツテンノ!?

「今回の異変についてなんだが…。実は少々行き詰まってな…。わかってる事でも良いから教えて欲しいんだ！」

＜イマノバクハツハニンゲンジャネエ…

＜ナンカコツチキタ?! ネラウナラメイドヲネラエエエエ!?

＜コウナツタラワタシノウリヨクデ…。ツク、ナンテガンジョウサ

!?! コレデハナイフデキレナイ?!

「… はあ。全く、親友に頭を下げられちや断るものも断れないわね」

「本当か!? ありがとうだぜ! アリス!!」

2人がそんな他愛の無い会話をしている傍らで、3人は髑髏の顔が前方に取り付けられていた小型のラジコンらしきものに追いかけていた。

「… コツチヲミロオ」

「骸骨っぽい顔! ラジコンっぽい全身! なんか片言の日本語! いつから此処は杜王町になったんだあああ!?!」

逃げる駄神主。彼の能力上その爆弾に優先的に狙われてしまう。

「東方繋がりがか!? 東方繋がりがっていうのか?! だったら2つ文句言わせろゴラア!!」

駄神主は右手に冷気を集める。

「まず、主人公の技じゃねえし…」

「コツチヲミ」

そして近付いた瞬間何重にも貼り付けられた氷で包み込み動きを止めた。

「そもそも名前の読みが違えんだよ!! そんなだからとうほうって勘違いするにわかが出てくんだ馬鹿野郎!! 2度と出てくんじゃねえ!!!」

側から見れば割と良く分からないツツコミを叫びながら、氷で更に嚴重に封印する神主。まるでこの場に居ない誰かに対して怒りをぶつけている様にも見える。

「…随分と変わった友人ね」

「ただの腐れ縁だぜ…」

そんな様子を見て、2人の魔法使いはそんな会話をするのであった。

.....

「成る程…冥界ねー…」

結論を聞いた霊夢は何処か気の抜けたセリフを吐く。そもそも、今回の異変に関してあまり乗り気ではなかった彼女なので、このリアクションはある意味当然なのかもしれない。

「そりやまた随分と面倒くせえ様な場所だな〜」

駄神主も同様なリアクションを取る。こうやって見ると、ある意味似た者同士の2人である。その場にいた全員が思わずそんな感想を心でコメントするのだった。

「…それでは、そこに行けば今回の異変は全て解決するのですね？」

「よし！ 場所が解ればこっちのもんだ!!」

故に、本来であれば異変解決では部外者に近い立場の筈である魔理沙と咲夜の方が、何故か率先して行動している様に見えるのは気のせいではない。

「私は人形達のことがあるから外に出れないけど、もし何かあったら言いなさいよ」

最後に一行にそんな言葉を投げ掛けるアリス。彼らはその言葉を聞き届け、その場を後にするのだった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

剣士なのか庭士なのかはつきりしろよ、面倒くせえ

一行は、冥界の入り口前に立ちただかる3人の騒霊と相対する。

「悪いけど私達は急いでるの。だから此処を通させて貰うわ」

そう言っつて博麗一行の3人は各々戦闘体勢に入る。

「… あれ？ そういえば零治の奴は？」

… 3人が、戦闘体勢に入る。つまりは1人足りない。一行はもしやと思い括り付けていた箒に視線を移したが、縄は解かれ書き置きの手紙が代わりに取り付けられている。

『なんか3対3で丁度良いし、俺は先に冥界行つてるわ。結界程度ぶち破れるし』

「… いや何してんだあの駄神主いいいいいい!?!」

これには3人もそう叫ばざるを得ない。というか、手足を縛られて

いる上に時止め、結界を用いる能力者がそれぞれこの場にいたのに逃げおおせたのは別の意味で凄い。流石は駄神主。

「(何か良くわからないけど、苦労してるんだなあ)」

そんな一行の様子を見て、騒霊たちは同情や憐れみに近い視線を向けていたのだった。

場面は変わり、こちらは冥界。先が見えない程長い階段の前にて駄神主は大きな欠伸を一つ漏らしていた。

「ダリイ.: 本当だったら博麗神社まで逃げてえ所だったが、駄メイド+霊夢がいるから無理だし、俺は無駄な戦闘は避けるスタンスだしな。仕方ない」

さも当然の様に自分が悪く無いという事を言い出す駄神主。気怠そうに口から発せられたそれは少なくとも主人公が言っているようなセリフではなかった。

そもそも、逃げおおせることになったのも、あんな面倒くさい目にあつたのも他ならぬこの駄神主の自業自得ではあるのだがそんな事お構いなしである。

「しかし長えな階段。せめてエスカレーターにしろよ面倒くせえ.: あれか? 健康の為に長い階段にしてんのか? どうせこんな所に来んのは死人だしそんなのいいだろうが!!」

毎度お馴染み理不尽な突っ込みを入れる駄神主。しかし、一々文句

を言ってもこの状況が終わらないと言うことをわかっている彼は、後ろで戦っている3人に追い付かれて殺されたくないので全速力で飛んだ。

.....

「… あん？ 誰かいやがるな… なんか幽霊っぽいのが一緒にいるし…」

飛ぶのも面倒くさくなって、懐に忍ばせていた1人用の陰陽玉に乗って上がっていく駄神主。ある程度登ったところで、前方に白髪の剣士と幽霊の様なものが立ちはだかつて居るのが見えた。

「… まあ良いや。面倒くせえから」

そう言っつて、右手に熱エネルギーを集め出す駄神主。この作品を読んでいる皆様であればこの後この外道が何をやらかすのかお分かり頂ける筈だ。

「速攻くたばれやああああ!!」

「みよん!？」

まだ戦闘体勢に入っていない彼女に向かって、不意打ち気味にエネルギー弾を発射した。

あんまりに予想外な事に思わず変な声を上げてしまう剣士。その様を見て勝利を確信した外道の表情はクソ野郎そのものである。

「くっ、噂には聞いてたけどなんて卑怯な… はっ!!」

とはいえ、ただでやられる訳もなく剣士は腰に帯刀していた刀を抜きエネルギー弾を一刀両断した。

「甘えよバーカ!!」

だがしかし、それすらも読んでいた神主はエネルギー弾の真後ろから出現し、周囲の水蒸気を用いて即興の氷の剣を作り出して斬りかかる。

「甘いのは其方の方です!」

氷と金属がぶつかり合う音。一瞬の間に少女はもう一つの刀も抜いて神主の攻撃をいとも容易く受け止めたのだった。

「つち…二刀流か」

「同じ土俵で、私がそう易々と斬られるとでも思ってたんですか?」

「くっ!?!」

鏝迫り合いで剣に力が入る事により、脆い方である氷剣がひび割れ始める。それにすぐさま気付いた神主はすぐさま後ろへと飛び、距離を離れた。

「仕方ねえ…極少しだけ本気を出してやらあ」

『氷結 リンク・オブ・フィールド』

そう言つて、石で出来ている地面に手を当てて凍らせ始める神主。少女は最初、彼の意図がわからずに警戒しながら構えをとる。

「さて… 来な」

眼に映る範囲全ての地面を凍らせた神主はだらけきった、相手を嘗める様な構えで挑発をし始める。

先程の不意打ちも相まって彼女はすぐさま斬りかかろうと間合いを詰めて移動しようとする。だが、それが神主の狙いだった。

「(なっ!? しまった! 凍った地面だから踏み込mガッ?!)」

鳴り響いたのは骨が軋む音。思考を終えるよりも速く神主は低空で飛ぶ事で間合いを詰めて1発殴った。しかも顔面を容赦なく。流石は外道であった。

「テメエが剣士だってんなら対策はし易い。足か、武器を封じればこつちのもんだからな」

言ってる事は正しい。剣術というのは一部… ほんの極一部を除いて足による踏み込みが必要不可欠なのだ。故に神主はその足場を凍らせる事により相手の剣術を封じたのだ。

言ってる事は正しいのだ… 一応

「ゲフツ… ゴフツ…」

「さあどうする? 言っとくが空を飛んだ瞬間すぐさま撃ち落とすし、霊力辺りを込めた弾幕だったら俺には効かねえぞ」

まるで悪役の様なセリフを吐く博麗の神主。その言葉を聞いて立ち上がった少女… 魂魄妖夢の表情は、絶体絶命な状況とは裏腹に笑顔であった。

「何が可笑しい？」

「…今この瞬間を含めて、私は半人前です。足場一つでこうも良い様にやられる。ましてや貴方みたいな最低野郎に」

そう言いながら、妖夢は魂の迷いを断ち切る刀…白楼剣を鞘に納めて右手で居合の構えを取る。更に、もう片方の刀…幽霊10人分を殺せる斬れ味を持つ楼観剣を、左手で右肩の辺りまで振りかざした。

「だからこそ、礼を言わせ欲しいです」

『剣技 結蹴跌斬』

一歩も動かず、左腕一本で振り回された斬撃は当然ながら空を切る。だが、

「!? ちいっ」

すぐさま神主は避けた。勢い良く繰り出された風は、真空の空間を作り出し、時に飛ぶ斬撃として襲い掛かる事がある。それは鎌鼬と呼ばれる現象で、神主の頬を掠めて切り傷を作り出した。

『人符 現世斬』

しかも、それだけでは終わらない。なんと瞬間に間合いを詰めた妖夢、それに驚きどうしてこの状況でこんな芸当が出来たのか一瞬の間で考えて、先の地面に横たわっている幽霊の様なものを見てある結論に至った。

「まさか!?!」

「ええ、半霊を足場にしました。そして… 射程圏内です」

その勢いのまま腰に帯刀していた刀を抜きすれ違いざまに一閃、その速度は辛うじて作り出した自分の背丈ほどある氷の壁ごと神主を斬った。

「… どうやら少し浅かったみたいですね」

「ナイフやら針やら、刃物には慣れてんでな。太刀筋見て避ける事ぐらいは出来んだよ」

だが、わずかに場所を移動したことにより思った以上の深手を取る事はなかった。自分の技が破れてもなお、闘志を絶やささない剣士。

「まあ良いです。いずれ斬って見せましょう。この楼観剣、白楼剣… 我が二刀に斬れぬものなどあんまりない！」

まるで駄神主以上に主人公っぽい純粋な叫びを、魂魄妖夢という庭師は言ったのであった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

視点：霊夢

あいつと私の出会いは突然だった。

「そういう訳だから、彼をここに住まわせてくれないかしら？」

外の世界から来た者……。所謂外来人と呼ばれる存在は、極たまにはあるが幻想郷に入ってしまう事がある。主な理由としては忘れ去られた存在として流れ着いた。もしくは代々うちの神社で張っている結界に多少に不備が発生してしまったか。

「そう……」

彼は紫に連れてこられた存在……。第三の理由で此処に来た外来人。珍しいケースではあるが、特に自分に何かしらの不都合が起きるとも考えてなかった当時の私は素っ気なく答えた。

「……ふわーあ。どーも、菊池零治でございやーす。これから博麗の神主としてあんたのサポーターとして厄介になりやしたー」

博麗の神主……。その言葉に少しだけ私は気にはなったが、どうせ紫の気まぐれか何かだろうと思つて普通に聞き逃していた。

「……なるだけ邪魔の無いように。面倒だから」

少しやる気の無い腑抜けた男。それが彼の第一印象だった。

それから暫くして妖怪退治の依頼がやってきた。これは博麗の巫女の仕事の内の一つ。

別に信念とか、やり遂げる上でのプライドとかは一切なかったが、私は毎回この依頼を引き受けている。

「あんたが今回の親玉って訳ね」

あいつは恐らく邪魔になるだろうからこの依頼の事は言っていない。くどい様だが、別に博麗としてのプライドとかではなくただ単に早目に終わらせかけたのだ。

『霊符 封魔陣』

「さて… 帰ってお茶でも…」

「グルル…」

「なっ!? しまっ」

低級妖怪だと油断していた私は、封魔陣を食らって一切無傷のその五体の体当たりを食らって重傷を負ってしまったしてしまった。

「ぐう… 不味い… あいつが行ったのは、人里」

無頓着ではあるが、人が死んで気持ちの良いものではない。私は傷だらけの身体に鞭を打ってまで人里を走り出していた。

「はあっ… はあっ… あいつは… あの妖怪は…！」

妖怪が進入し荒らした里の中心部辺りまで進んで行って、私は漸く自分が追っていたものを見つけた事が出来たのだ。

「あんだ… それは…」

但し…

「ふわあゝあ。 返り血浴びちやったじゃねえか… 汚ねえ」

胴体に風穴を開けて死んでいる姿ではあったが。

死体に一番近く、それでいて冷静な表情を取っていることから例の外来人が仕留めたのだとわかる。

――大したことないな。 博麗の巫女って

外来人ではない… 周囲の誰かが言った言葉。 私はそれを聞いて等々来たか、と聞いていた…

――あいつがしっかりしてくれれば… こんな事には…

――どうしてくれるんだ！

――役立たず!!

――期待はずれ!!

悔しくも…悲しくも…ない。博麗の巫女としてやっていく上でその言葉はいつか必ずやって来るものだとかわかっていたし、そもそもずっと私は1人だったんだ。それは今までも、これから変わる事はない。たかが新参者の外来人に手柄を取られても私は…っ

「あっはっはっは!! ラッキー! これで今回はぜーんぶ俺の手柄だ!!」

ーなんだ?

ー急に叫び出したぞ?

「博麗の巫女が弱らせてくれたお陰で楽しんでぶっ倒すことが出来たぜ! 本当だったら絶対に勝てない相手だったのによ!!」

嘘よ…私の技は、本気を一切出してなかったとはいえ手傷らしいものは…!

「お陰で手柄は俺のもの! おいテメエら、俺様のお陰で助かったんだから感謝しろよ?」

ーなんだあいつ…!

ーって事は…漁夫の利?

――それを自分の手柄だなんて…

「ああそうだ。テメエの治療代も入れなきやな… 何せ俺じゃあんな妖怪倒せないから、身替わりが必要だし」

――在ろう事か博麗の巫女を身替わり呼ばわり!?

――屑だ… マジの屑だ!!

――最低!!

いつの間にか、罵声はあいつ… 零治の方へと全て向けられた。だけどあいつは何処吹く風で報酬だけかつさらって私ごと持ち上げてその場を後にした。

「いやー、ほんつと助かるわ。テメエが教えなかったお陰で俺は菓子を食べながらのんびり出来るわ、人里に来た雑魚妖怪をやっつけたら歓声を浴びるわで至れり尽せりだったぜ!… ま、俺様の有り難みを知らねえ連中だったからクソみたいに罵声飛ばして来たけど」

「… 恩を売ったつもり? 私を助けたつもり? あんた…」

言葉さえ耳に入らず、思わず心にあった言葉を口に出してしまった。それを聞いたあいつはさも当然の如く言い放った。

「あん？ 誰がテメエなんか助けんだよ。俺は思った事を口に出しただけだ。つーかあの程度倒しておけよ、面倒くせえ。お陰で戦う羽目になったじゃねえか」

きつぱりとした否定に、聞く人が聞けばイラつとする言葉。

だけど、この時の私はそんな感情は抱かなかつた。それとは別の…今まで感じた事のない気持ち。だけどそれがなんなのか私には解る気がしてきた。

「…ありがとう」

生まれて初めての他人に対する感謝の気持ち…それと…

「あ？ なんか言ったか？」

…

「… 何でもないわ」

…
それは、秘密。

…
…
…

「「っ、強い…」がくっ」「

「先を急ぎましょう。あの駄神主はどうやら先へ向かっているみたい
ですのぞ」

「ああそうだな咲夜、霊夢… 霊夢？」

「… はっ！ そ、そうね!! 全くあいつつたら私達を置いて先に行
くんだから、一人で大丈夫かし… ゲフンゲフン!? 追い付いたらた
だじゃ済まないんだから!!」

「だ、大丈夫か霊夢？ 何時ものお前らしくないぜ？」

「そもそもあいつはそうやって私の見ていない所で勝手に無茶し
て… ブツブツブツ」

「れ、霊夢ー？」

「(成る程、そういう… ある意味お似合いかもしれないね)」

「(… 絶対に、秘密なんだから／＼)」

To be continued…

生き死にだど？ 面倒くせえ

「(そろそろ飽きてきたなく、うん)」

飛ぶ斬撃をギリギリで躲しつつ、駄神主はそんな呑気な事を考えていた。

「ふーっ、ふーっ… これだけやってまともに当たらないとは」

流石に上半身の捻りだけで振るった斬撃は肉体に堪えるのか、妖夢は肩で息をすどころか深呼吸をし始める。

「どうする？ テメエもずっとそれやるのは面倒くせえだろ？ だつたらもうやめにしようぜ。俺はこの先に用があるわけだし」

それを見た神主はそんな提案を投げ掛ける。別に相手の事を考えているとか平和主義者だからとかそんなものは一切なく、ただ単に戦うのが面倒くさくなったからこそそのセリフ。

初対面で、短い間しか戦闘はしなかったが彼女は目の前の男がそういう魂胆で提案を持ちかけているんだとわかっていた。

「不意打ち… 滑らせる足場の作成… 女性の顔を容赦なく殴る… そんなことをしておいて随分虫が良いですね。あなた」

うん、私もそう思う。

「あん？ 知るかそんなもん。小さいことを一々気にしてたら長生きできないぜ、バーカ」

最早神主ではない。今回の異変の実行犯である自分が言うのもあれだが、こいつとんでもない極悪人だ。つーか何で博麗の神主やってんのこいつ？

そんな思考と共に無性に腹が立って来た半霊剣士。彼女は更に殺気を強めながら剣を振りかぶる。

「もう良いです。先程まで真面目にやってた自分がバカみたいでした」

故に、彼女がとった方法は

「もうプツンしました」

滅多斬りである。先程までの正確な狙いでの一太刀ではない。大雑把でいて数の多い数太刀で駄神主を斬り伏せようと斬撃を飛ばして来たのだ。

「ちよ、おま、なんでじゃあああああ!? 俺が何したってんだよ! なんでこんなキレられなきやいけないんだよ?!」

「あなたがッ! 死ぬまで! 斬るのをやめないッ!!」

最早やけになりすぎて先程まで余裕を見せていた駄神主が恐怖に近い感情を抱いく。真面目な者程、一旦吹っ切れると何しでかすかわからない。それを身を持って体験する光景は…無様そのものであった。

「ちよちよちよ、一旦落ち着こう。俺も悪かった、本当悪かった!! だからそれやめてくださいまじでキツいんですううう!!」

そう言いながら神主は右手から冷氣とも、熱気とも違うものを発生させた。何かが入った氷の球体。それを勢い良く剣士の方へと投げ飛ばした。

だが、当然無数の斬撃を全て避ける事など出来るはずも無くある程度進んだところで斬撃の一つにぶつかる。

「なんちゃって」

「なっ!?!」

それが駄神主の狙いだった。その物体が割れた瞬間、そこを中心に衝撃波が発生する。攻撃に専念していた妖夢が当然防げるわけがなく吹き飛ばされて、後ろの石段にぶつかった。

神主がやった事は至極単純、周囲の気流を無理矢理圧縮して瞬間冷凍で作りに出した氷の球に入れて破裂させる。所謂空気ボンベの爆発事故等といったものと同じ原理を小型で作りに出したのである。そのためには飛ぶ斬撃が必要であった。

「がふっ、げほっ、げほっ!?!」

「テメエが周囲の気流を乱してくれたお陰で、俺は楽して空気を集める事が出来た。流石に何の乱れもない所から集めんのは面倒くせえからな。敢えてこうした」

神主は予め展開した熱気の壁で衝撃波を殆ど防いだ為にほぼ無傷。そのまま、一步、二歩と半霊剣士の方へと歩き出す。

「殺すんですか...?」

武士である故、これから起こる事を訪ねつつ彼女は覚悟を決める。

「いんや。ただテメエの刀を没収……つーか使えないように冷凍させてから道案内させるだけだつーの。もしかしたら罠なり何なり仕掛けられているかも知れないし、殺すの面倒だし」

だがしかし、神主はそれを否定して手を差し伸べるのだった。真剣な戦いを臨む妖夢にとって、情けをかけられ生き恥を晒すのは侮辱に近いことだと思っっているので、決して少くない程の憤りを覚えて差し伸べた手を彼女は握ろうとしない。

「……私は真剣勝負で負けたんです。あんな無様な戦い方までしてでも得られなかった勝利……最早私には未練なんてありません」

「知るか。テメエの言う真剣勝負やら、未練やらなんざ唯の自分に言い聞かせるだけの言い訳にしか聞こえねえんだよ」

そう言つて、無理矢理二つの刀を奪い取った神主。自害でもしようとしていたのを察していた為に、彼はこういった行動に移った。

「……あなたにはわからないでしょうね。私の悔しさが」

最早彼女にとつての恥を晒すことしか出来なかった為、そんなことを口走った。それでも神主は差し伸べる手を引っ込めることをせず、口に開く。

「ああ。忘れちゃったよ、そんなくだらねえ拘りなんざ」

「忘れた……？ それh「やつと追い付いたぞ……零治い」

妖夢が言い終えるより早く、後ろからそんな声が聞こえてきた。その言葉を聞いて駄神主はギョツとして振り返る。

「…え、えーと… やけに早かったつすね」

全身という全身から尋常じゃない汗を流し出す駄神主。それもそのはず、振り返ってみればそれだけあれば普通の人など殺せるだろうという程の殺気と共に鬼の形相をしていた少女が3人いたのだ。赤の他人である筈の妖夢でさえ死よりも恐ろしい恐怖を体感している。

「私達を置いてって、自分だけ先に行く… それだけならまだ良いぜ？」

「階段を登る途中、何故か凍った石段があつてそれに気付かなかつた私達が思わず転んでしまい大分下まで落ちてしまわなければ、ですが」

「…………… コロス」

最早、勝てるのか戦うのかそんな次元ではない。選択を誤れば殺されるに等しいものである。それ故に駄神主は今まで以上にその思考を働かせる。

「(さて、まずは『素数』を数えよう。『素数』は1と自分の数でしか割れない孤独な数字… 俺に勇気を与えてくれる… 訳ねえだろうがアアアア!? 俺は神父じゃなくて神主だボケエ?! 似てるけど全然違えよ!!)」

… 一応思考を働かせている。

「(嫌そんなツツコミをいれてる場合じゃねえ、兎に角…)」

駄神主は3人の足元を見た。決して変態的なそれではなく、彼が着目したのは足に多い傷である。

「(奴らは階段を転げ落ちたって言った…つまりは足がボロボロ！
対して俺は一切の無傷!! つまり俺に有利な点はこれだという
事… だったら早い話だ!!)」

結論を出した駄神主は足に力を入れ始め

3人がいる方とは真逆の方角へと走り出した。

「逃げるんだよオオオオーーーーーッ!!」

「みよん!?!」

ついでに妖夢を引き連れて… というか手を差し伸べた状態でこの一連の行動をしたので思わず手を繋いでしまったというのが正しいが。

因みに補足として言っておくと、霊夢の殺意が倍以上高まった。

「ハッハッハー、いくらテメエらでも階段を走って駆け上がる事は出来ねえだろ！ それに床は凍ったままだk」

『幻世 ザ・ワールド』

神主はすっかり忘れていた。
足を止めることが出来る
足の速さなんて関係ない能力者がいるという事を。

「時は動き出す」

次に動いた時には鬼巫女の目の前に馱神主がいた。

「わかっていると思うけど、逃げようなんて考えない事ね」

馱神主と妖夢が最後に見た光景は逆に清々しい程の黒い笑顔で待ち構えていた霊夢の姿であった。

」

これから起こることは恐らく地獄以上の体験ではあるのだろう。馱神主はすっかり青ざめてしまった。

そして、逃げたいと思っても逃げられないので

『未完 博麗ドライバー』

そのうち2人は考えるのをやめた。

To be continued...

面倒くせえからボス戦はやらないぜく…マジで

「あらあら、客人かしら？ 既にこちら側に来そうなのが妖夢を含めて2名いるのだけれど…」

一行が石段を登った先にあつた屋敷で最初に出会った人物は、妖艶でいて何処かつまみどころのない桃色の髪をした女性であつた。彼女は駄神主と妖夢を一瞥し、扇子で口元を隠しながらクスクスと笑う。

「ゆ、幽々子様… 笑い事じゃ…」

「俺は… マジで… 無理… だから後は頼んだ」

哀れ、博麗ドライバーを食らつた2人。妖夢は半人半霊から普通の幽霊となりかけ、神主に至つてはあまりの外道さ故に普通の幽霊を通り越して悪霊となりかかつていた。

「「あ、この2人は無視して大丈夫です」」

最も、割と容赦のない3人はそんな事御構い無しではあるが。

……………

数分後、なんとか無事助かつた2人は白玉楼と呼ばれる屋敷の縁側で寛いでいた。

妖夢はともかく、敵地である場所で存分にのんびりしているその様はまさしく駄目人間のそれであつた。

「いや、危ねえ危ねえ。ギャグシーンじゃなかったら即死だった」

「何訳のわからない事を言ってるんですか…。」

主の命令で渋々茶菓子を駄神主に持て成す羽目となった妖夢。2人が会話している場所の上空では3対1の戦闘が行われているのだから、違和感ありまくりである。

因みに3人の連携は意外にも見事なそれである。やはり、駄神主という共通の敵がいる事が功を成したのだろう。彼が地味に体を張った努力による産物である。

「あなたは戦わないんですか？」

「やーだね。さっきも言ったが、俺結構ポロポロで死にそうなんだよ。だからパス」

自分以外の勝ち負けにはこだわらず、戦闘は極力避ける駄目人間。噂で聞いていた幻想郷最強の男とは余りにも掛け離れているその様に妖夢はほとほと呆れ果て、噂は全くあてにならないんだと悟った。

「まあ理由はもう一つあるんだけどな… 見てんだろ？ BBA」

神主がそう言うその後ろに裂け目が出現し、そこから1人の女性が出て来た。

幻想郷の事実上の支配者、八雲紫。何度かその姿を目にした事のある妖夢は驚き、博麗の神主は振り向きもせず舌打ちをする。

「いつから気付いたのかしら？」

「最初からだ。テメエの忌々しいアレのお陰で、俺は気配がわかるん

だよ」

「(… ひよつとしてこれって私凄いやつたりしますか?)」

いきなり彼らにしかわからない会話の内容や単語が出て来て、妖夢はそんな事を内心思っていた。少々考えた末に、新たな客人が来たのだから茶菓子を持って成さなくてはと結論を出し、それらを取りに一旦縁側を後にする。

「何であるのピンク髪のカービィ擬きを止めないんだ？ 幾らそれが俺らの役目だからって、幻想郷の季節が歪んでいる程の異変だ。何の行動も起こさずただ監視しているだけの理由にはなんねえだろうが」

「… 友人だからよ。昔からの… 彼女がまだ生きていた頃の」

神主の質問に紫はそう答える。私情を挟んだ上での不干渉という行動に彼は何も文句は言わなかった。神主自身基本的に私情を挟むタチだから。その代わり出会うたびにいつも見せる殺気を後ろにいるだろう彼女に放っている。

「… 野郎が何をしようとしているのかわかっている。だけど友人故に止める事が出来ない、ってか。随分と面倒くさくて、つまらねえ拘りだな… B B A」

「長く生きていれば、一つのことには拘ってしまうものよ…」

「あ、そ。俺は絶対に知る事は無いだろうな… テメエのそれ」

「そう… 最初と変わらず、そうするつもりなのね」

そこまで会話を進めた2人に、新しい茶菓子をお盆にのせながら妖

夢が近付いて来た。馱神主は元の気怠そうな雰囲気に戻って10人がみれば10人がイラアとなる態度で茶菓子を貰い、紫は遙かに目上の立場でありながら礼を述べて茶を啜る。

『反魂蝶 一分咲』

突如、戦闘が行われている庭園にて異変が起こった。春そのものが集まっているにも関わらず花一つ咲かなかった枯れ木から膨大な妖力が発生する。そして博麗一行3人と戦っていた本当の黒幕…西行寺幽々子とその桜に吸い込まれてしまう。

「幽々子様!？」

それを見て驚く妖夢。長年仕えてきた主人が禍々しいナニカに吸収されたのを見たのだ、無理もない。

寧ろ、そんな状況だというのに欠伸一つでリアクションを済ませている馱神主の方が異常である。

「…その表情からして、やっぱり知らなかった様ね」

「どういう事なんですか!？」

妖夢が激情を露わにして紫に詰め寄る。いつもの（馱神主が絡んでない時の）真面目で大人しめの彼女からは想像できないほどのそれを見て、八雲紫は説明に入ろうとするが…

「ふわあ…そろそろ、動いても良い頃だな。さて…」

等々、馱神主が重い腰を上げて準備体操をし始めた。いつもの気怠そうで、どこか悲しげで、殺意を露わにしたものとも違う。

「俺はアレをどうすりゃいい？ BBA」

博麗の神主：… 幻想郷最強の男の本気の闘いが今始まろうとしていた。

……
……
……

「いきなり消えたかと思えば… 何だぜあの桜は…」

そう呟いたのは魔理沙。警戒をしている為か弾幕を放たずに様子を伺っている。

「… ひよつとしてこれが黒幕であるあの女性の狙いでしょうか？」

ナイフを構えつついつでも戦闘に入れるように呼吸を整えなおす
咲夜。

「関係ないわ。全部ぶっ飛ばせば問題ないもの」

霊夢はいつも通りの気怠そうな表情とは裏腹に、その桜の異様な雰囲気
をいち早く誰よりも察知して最大レベルの警戒態勢に入る。

それほどもでに目の前の桜… 西行妖は恐ろしいものであった。

『反魂蝶 参分咲』

「「？」」

先に動いたのは西行妖。まるでこの世のものとは思えない悲痛な
音を鳴らしながら、地面に張り巡らされていた無数の根っこを伸ばし

て空にいる三人に勢いよく伸ばす。

そのあまりの速度に辛うじてよけるので精一杯な魔理沙、能力を使いつつナイフで応戦しつつも文字通り刃が立たない事に驚きを隠せない咲夜、三人の中では一番善戦している霊夢。

長くは持たない。三人が同時に、共通して脳裏に思った事である。根だけでなく、枝すらも勢いをつけて突き刺そうと伸ばしていく西行妖。爆発させても、斬っても、消し飛ばしても次々と再生するそれらによって徐々に比例していき。

『反魂蝶 伍分咲』

「っ、魔理沙!？」

そのうちの何本かが一呼吸の間に、一人の魔法使いの心臓部まで一直線に突き刺さろうと直進してきた。

「ったく…先輩どもは俺が居なかったら全然ダメじゃねえか」

だが、ダメ人間の気怠そうな声が聞こえると同時にその動きが止まってしまう。消し飛ばしたわけでも、吹き飛ばしたわけでもない。

『冷却 コールドスリープ』

氷点下を遥かに下回る温度で凍らせた。それにより脆くなった枝や根はすぐさまボロボロと崩れ落ちてしまう。

だが、それすらもすぐさま再生することにより無かったことにした妖はいくつかを再び一行に差し向ける。

『人符 現世斬』

「…別に、あなた方を助ける為にやっているわけじゃありません。

私はただ… 幽々子様を助ける為に…」

そう言いながら、妖夢がそれらを無数の斬撃で何度も斬り伏せた。それが気に入らないのか更に力を解放するため、禍々しい瘴気のようなものを発する西行妖。

「BBAが、テメエを止めたいと頼みに来たんでな… ちよつくら歯あ食いしばれよクソ桜!!」

それと同時に博麗の神主は、吸血鬼と戦った時より遥かに強大なエネルギーを纏い、拳を叩き込む為に超スピードで突っ込んでいく…

T o b e c o n t i n u e d . . .

封印だと？ 面倒くせえ

嘗て歌聖と呼ばれた男が居た。多くの者に慕われていた彼はある日己の死期を悟ってしまった。そして幼き娘を残して、自分が最も好んでいた桜の元で息を引き取ることとなった。

それから暫くの時間が過ぎたある日、彼を慕って居た多くの者が次々と何かに誘われる様にその桜の元で死んでいった。人が1人死ぬごとに満開だった花は一つずつ閉じていき、遂に完全にその蕾を全て枯れさせた。

最早妖となったそれを見た娘は、自らの命と記憶を引き換えにその桜を封印した。

死人に
食われる。

助けてくれ。

彼は

シアワセソーにこの世を去った

喜んで死んでいった。

人々の死こそがヤツのシアワセ。

殺されることによって始めて作動する

ノウリヨク。

死ぬ前の彼でさえもみたこと
のなかったエネルギー。

死体だからもう…

コロスコトナドデキナイ

時は現在、多くの人の命を奪った妖怪桜… 西行妖はというと、1
人の神主に人間でいうところの胴体にあたる部分をゴツソリ抉らさ
れた。

「GYYYAAAAAHHHHツ!」

… シリアスとホラーな雰囲気が始まろうとこの駄神主には関係
ない。本気を出した彼は強大な熱エネルギーを込めた拳をぶちかま
し、早くも勝利を得ようとしていた。

「良いか? よく聞けクソ桜」

神主は口を開いて西行妖に話しかける。

「俺は所謂外道というレッテルを貼られている… ケンカの相手を必

要以上にブチのめし、いまだ竹林から出てこれねえヤツもいる…」

再生する西行妖。それを追撃せずに語りを続けて構え出す博麗の神主。

「余りに極悪非道な野郎なんで気合を入れてやった妖怪はもう2度とこの世へ来ねえ…」

それは、中に居るものごと消滅させないが為の… 吹き飛ばすのが面倒くさいが故の彼なりの優しさであった。

「料金以下のマズイめしを食わせる食処には代金を払わねーなんてのはしよっちゆうよ… つまりだ」

男は拳を鳴らす。その顔立ちは、目の前の恐怖をものとしなない闘志に満ちたものであった。

「テメエはそれ以下の悪だつて事ぐらい、俺でもわかる！ 来な… 同じクソ野郎のよしみで付き合つてやるよ… 人の道を外れたこの俺とテメエの1対1だ」

「WOOOOGGYAAAAHHHッ！」

再生して更に枝を増やした西行妖は目の前の男を殺さんと、熱エネルギーを両腕に纏った博麗の神主は襲いかかる枝を全て消し飛ばさんと、それぞれの感情を込めてぶつかり合った。

「封印は任せませ… テメエら!!」

「これが… 博麗の神主の本気…」

「つていうか、性格変わってないか？」

余りの光景に、少しばかり現実逃避をし始めるメイドと魔法使い。だがそこはある程度の修羅場を潜り抜けてきたプロ、すぐさま自分のすべきことを模索した。

「霊夢… あれの封印、いけるか？」

「そうね… 今の状態だと少し厳しいわ」

本当はかなり厳しいのだが、せめてもの強がりを見せる博麗の巫女。長年のライバルである普通の魔法使いはその事をわかっているのか、ニヤツと笑みを浮かべてある提案をする。

「ならば、私の魔力を使え。少なくとも霊夢よりはある」

「言ってくれるじゃない… わかったわ。今回だけ… 本当だったら他人には頼らないけど… アイツのせいで変わってしまったのね。私も」

「ただし、私の借りはデカイぜ。そこんところわかってるな？」

笑顔を浮かべながら違いに皮肉を言い合い、魔力と霊力を合わせる。

なんだかんだで、長い付き合いだと理解させられた。何故なら… たったの一回でこんなにもびったりと同じ質と量で合わせて居るのだから。

「では… 私は万が一アレが来た時のカバーに回ります」

「右に同じく… あくまでカバーだけですが」

剣士とナイフ使い。用途は多少違えど相手を切り刻む武器を扱う2人が、封印の準備をしている前へと立ちはだかる。

来るものは全て斬りふせる。そんな気迫が2人の全身から滲み出ていたのだった。

「(枝のスピード、次に来る位置、インターバル、行動パターン… 演算完了)」

神主は敵の攻撃を交わしつつ枝を斬り落とす。そこからすぐさま再生しようとするところを冷気で凍らせて暫く再起不能にする。その姿は幻想郷に来る前の… 普段のやる気の無い駄神主とはかけ離れた姿である。

『反魂蝶 八分咲』

それを見て、西行妖も持てる全てを開放して神主に襲いかかってきた。

「ちいつ！ さっきので全力じゃないのかよ… お陰で演算のやり直しじゃねえか面倒くせえ!!」

襲いかかるそれら全てを吹き飛ばし、一旦の休息を得る神主。連戦と、先程の演算による脳の疲れを回復する為に懐から取り出した串団子を一瞬で頬張る。

『炎刻 魔術師の赤』

そして熱そのものを纏わせた串を投げつけ、自らも赤を通り越して白に近い温度の弾幕を連射する。何処のアヴドウルだよとか、なんか後ろに鳥が見えただとかそんなツッコミをする暇も無いほどの切迫した表情。

余りの弾幕に再生するスピードが追い付かない。彼の現在…幻想郷最強の男の本気は其れ程のものであった…が

「ゴポッ!? ゲホッ…」

限界が来てしまった。攻撃を食らっていないにも関わらず口から血を吐く神主。それと共に弾幕が収まってしまい西行妖を止める術が無くなってしまう。

「零治?」

巫女が叫ぶが、今の彼に無数の攻撃を避ける事など不可能だ。

血飛沫と共に、博麗の神主の五体を枝が全て貫通する。

「… ああー、痛え… 先が短いって事を計算に入れてなかったな… ころも早く時間切れになるとは…」

勝ちを確信したバケモノは残りの全てを後ろの4人に向けて放つ。2人が得物を構えるが恐らく全て対処仕切れない量であると判断しているヤツは、まるで感情があるかの様に喜びを現して彼女らの命を奪おうとする。

しかし、

「待ちな… まだ終わってねえぞ」

博麗の神主が全身を貫かれたままにも関わらずそれらを全て止めた。何を持って止めたのかはわからない。気迫か、能力か、それとも別の何かか。だが… その言葉を聞いて、西行妖は確かに止まってしまう。

「テメエの思い通りに死んで… テメエの思い通りに道連れにして… それには最早何も言わねえ。昔此処で何があったのか？ 俺はあくまで部外者だからな。だが、こいつらは関係ないだろ」

桜の木が震えていた。風なのか、自ら動かしたのか。何方にせよ震えていた。

「テメエと関係ない奴まで… 巻き込むんじやねえよ… このクソ桜!!」

「WOOOOGYYAAAAHHHツ!!」

それが何なのか、死人である彼にはわからない。思わず叫ばずにはいられなかったこの状況… バケモノは標的を神主に変えた。

「そうだ… それで良い… 霊夢!!」

神主は合図を出す。

「でも… 貴方が…」

「良いからさっさとやれ！ 此処でグダグダしても面倒くせえだけなんだからよ!!」

博麗の巫女は涙を流すも、神主はそれを許さなかった。何度も、何度も串刺しにされる神主。

「やれええええええ!! 博麗の巫女おおおお!!」

「っ、」

『霊符 夢想封印』

彼女の想い人の叫びと共に、封印の為の弾幕が放たれた。真っ直ぐに博麗の神主と西行妖のところへと向かう弾幕。

「…リ… 絞り取ツテヤル! キサマノ生命ヲ!」

「吹き飛ばしてやんよ!! その穢れたる野望全部なあ!!」

それは白い光となって、2人を包み込むのであった。

To be continued...

B B Aの過去だと？ 面倒くせえ

彼女はずっと1人だった。自分と同じ妖怪は最早居ない。自分の能力は人間からも、妖怪からも恐れられていた。

ある日、彼女に友達が出来た。ただの人間…。それなのに自分を怖がらずに友人となってくれた。生涯で初めての友人。

そして…

友の為に彼女は「いや大体解ってっから。東方の2次創作見てれば大体似通ったの載ってるしこれ以上話す必要はないからB B A・読者が知りたいたいののはテメエの過去じゃなくて前回の最後でどうなったかなんだからよ」

… さて、この自重をしないクソ野郎の言う通り読者の皆様も色々気になる事があると思われるので説明の為に少しだけ時間を巻き戻す。そもそもは数分前の事だった。

—数分前—

「絞り取ッテヤル！ キサマノ生命ヲ！」

「吹き飛ばしてやんよ!! その穢れたる野望全部なあ!!」

白い光が迫って来ている状況で叫び出す両者の内、先に動いたのは博麗の神主。ありつたけの熱を解放して枝を焼き切り、西行妖の真下の地面に手を突っ込む。

「間接的に触れたぜ！ BBA!!」

瞬間、博麗の神主と地面に埋まっていた霊体は空間に現れた隙間に飲み込まれる。霊体は一行の元へ、博麗の神主は八雲紫がいる屋敷の縁側に移動した。この間0.2秒である。

「ゼエ…ゼエ…」

「本当に感謝しているわ…それと謝罪をしなければ「その前に治療と糖分補給をさせろ。ガチでヤベエ状況なんだ」

そう言いつつ、博麗の神主は血塗れで横たわる。紫は隙間から包帯と薬を取り出して彼の治療をした。

……………
……………
……………

そして、現在に至ると言うわけである。因みに駄神主は今、縁側の端にある柱にもたれかかりながら紫の過去を聞いていた。

… 最も、第四の壁を破壊した様な台詞と共に中断させたのだが。

「俺はさつきあのクソ桜に貫かれた際、走馬灯みたいのが見えていた… すぐさま自分のじゃねえって気付いたがな。テメエの面が毎回映ってたから」

神主は、何故自分が知っているのかを話した。その顔はいつも彼女

相手に見せる殺意の目ではなく、気怠そうで悲しそうな目であった。

「…アレを止める為に… テメエを守る為に、其奴は思い出を犠牲にした。それでもテメエは…」

神主はそれを踏まえた上で問いかける。自分が憎んでいた相手の真意を聞きたかったのだ。

「… 例え、思い出がなくなっても。嘗てとは変わってしまったとしても… それでも私は彼女の友人幽々子でい続ける。それが彼女との約束で… 恩返しだから」

八雲紫は神主にそう答えた。1人だった自分に歩み寄ってくれた友人。自分の悲しみや憎しみを全て受け入れてくれた友人。大切なものを守る為に全てを犠牲にした友人。

彼女が今の様に… 独りを救う為の幻想郷を作ったのは… 嘗ての友人みたいになりたかったから… なのかもしれない。

「… 今でもテメエが俺にした事は忌々しいと思っている。だが… その気持ちは、尊敬する」

「そう…」

そう言つて神主はいつも通りの気怠そうな表情に、紫はどこか掴み所のない雰囲気に戻る。

「出来ればテメエとは早く会いたかったよ… そうすりゃあこんな事にならずに、こんな気持ちにならずに済んだ」

「過ぎ去った事を気にしても仕方がないわ。だから…」

外に視線を向けるスキマ妖怪。今はもう花一つ咲かなくなった桜の下には簡素な墓が建てられていて、霊夢一行と白玉楼の2人が俯いていた。

そう、予め言っただけでなかった上に0.2秒という速度ということもあり、彼女らは博麗の神主が死んでいると思っただけ。特に霊夢に至っては何時もでは考えられないほどの涙を流して悲しんでいた。

「… 気絶している間、俺の葬儀ってどの辺まで進んだんだ？」

「さあ？ 少なくとも粗方は終わったと思われるわ」

「嫌、さあじゃねえよ。つーかこれ出るに出来ない状況じゃね？ カーズと共に吹っ飛んだ後のジョセフ並に気まずいんですけど…」

駄神主はスキマ妖怪にこの状況を打破するアイディアもとい助けを求める。しかし彼女は何処吹く風、何処からか取り出した扇子で口を覆いながらクスクス笑いつつ、能力で出現させた裂け目に逃げようとする。

「おい逃げんじやねえぞ?! どうすんだよ?! テメエがさつさと自己申告しなかったおかげで下手すればまた博麗ドライバー喰らうかもしれない状況に追い込まれてんですけど?!」

「… 幻想郷は全てを受け入れる。それはそれは残酷な話ですわ」

「残酷でもなんでもねえよ?! ただの連帯責任じゃねえか?! つーかまじでどうす 零治、これは一体どういう事かしら?」「… する…」

彼の失敗は大声を出した事。縁側で大声で叫べば誰だって気付く。ましてや聞き慣れた声を聞けばなおさら。振り返るとそこには顔を真っ赤にした博麗の巫女の姿。

「これは違うんだ違うんです霊夢さん別に貴方様を騙す為にこんな壮大なドツキリを掛けた訳ではないんです全てはこのBBAの・・・」

そう言つて博麗の神主は元の位置に視線を戻すが件のスキマ妖怪は居ない。代わりに書き置きとしてメモが一枚あつた。

『そう言えば急ぎの用事があつた事を忘れてたわ。悪いけど痴話喧嘩はそちらで勝手にやってくれと助かるわ♪ by永遠の17歳ゆかりん』

「(逃げやがつたあの野郎おおお!? これ一人で切り抜けるとか無理なんですけど?!)」

応急処置をしただけなので重傷なことには変わらない。故に何時もの手であるスタイリッシュ逃走ができない神主。

「… 零治」

「は、はい?! (お… 怒ってない…?)」

霊夢が俯いて居るのを見て、淡い期待を抱く神主。

「… この、この！ 心配させたんだから!! 馬鹿っ!!」

「ちよ、ま、おま、グーはまじでやめろ?!」

今回の異変を終えて、下手したら死ぬ程の重傷を負つた神主。
流石に博麗ドライバー(という名の処刑)は無かつたが、結局痛い

思いをする。

こうして、幻想郷に長らくやって来なかった（色々な意味で）春が訪れるのであった。

「春ですよ」

T o b e c o n t i n u e d . . .

百鬼夜行

宴会!! 宴会 ! 宴会... 面倒くせえ

「宴会よー!」

「いよっしやあああああ!! こちとらこれだけが楽しみなんじや
あああああああ!!」

.....
.....
.....

「宴会よー!」

「WRYYYYYYYYYYツ!!」

.....
.....
.....

「宴会よー!」

「...お、おう... またか...」

.....
.....
.....

「宴会よー！」

「…」

.....
.....
.....

「宴会「ちよつと待てや」

1ヶ月で通算4回。さしもの駄神主もこれには違和感を感じた。何かがおかしいと思ひ靈夢にその旨を指摘する彼。だがしかし、相手は深く物事を考えない博麗の巫女。神主の意見等聞く耳持たずであった。

「(おかしい... 試しに靈夢に吉良吉影の名前出しても爆発しなかつたし... まさか第3の爆弾に変わる新たな能力が!? ... んなわけねえか。つーか何で俺が人集めしなきゃならんのだ面倒くせえ)」

今現在、博麗の神主は人里に來ている。彼が内心で述べた通り人手を集める為だ。右手には買ひ物のメモ帳のみたく、宴会に誘う人リストが書かれてあつた。

「上白沢の野郎のところは行つたから... なんか⑨と金髪人食ひ妖怪に因縁つけられたけど」

実は異変のない平和な時は、博麗の神主はちよくちよく寺子屋に來て臨時教師をやつていたりする。こう見えて彼は頭は滅茶苦茶良い。其れこそ大学教授顔負けな程の頭の良さなのだ。

まあ最も、彼の普段の授業は少年誌を使つた... もつと言えば少年○ヤンプを用いた授業ではあるのでその本領が発揮されることは余

り無いが。最近頭突きされる回数が生徒より多いというのは専らの噂である。

「さて… 後は…」

彼が見る視線の先には、紫の短髪が特徴的な小柄の女性。もう1人は黒髪短髪で白いワイシャツを着た烏天狗。彼女らは博麗の神主を見つけると肉食獣の如き目でこちらに近付いた。

「良いところに来ましたね、零治さん。実は…」

「あややや、これはこれは博麗の神主こと菊池零治さんじゃありませんか。丁度良いところに現れました。実は折り入って相談があるんですが…」

「是非私の幻想郷縁起／文々。新聞の為に貴方の事を根掘り葉掘り聞きたいんです」

要するに取材である。読者の皆様もご存知であるが、この駄神主はそんな面倒くさい事この上ないのほしくない、つーか死んだ方がマシだと思ふ程の主義である。例え両手に華であるこの状況下であってもそれは一切変わらない。

「… あれだ。『根掘り葉掘り』ってよオ、『根を掘る』ってのはわかる… スゲーよくわかる。根っこは土の中に埋つとるから…」

だが「葉掘り」って部分はこういう事だあゝっ!? 葉っぱが掘れるかつつーの! 掘ったら裏側まで破れちまうだろうが!! 掘れるもんなら掘ってみやがれコンチクショウってなあ!!…………… つーわけで俺は逃げる」

よくわからない主張を言ってスッキリした後、最早慣れるどころか

洗練された動きで逃走を図る馱神主。その鮮やかな足取りは、人間は愚か妖怪ですら追いつけない速度である。しかもちやつかり能力を用いて加速しているあたりセコイ。流石は馱神主である。

「いよつしやああああ!! あのクソメイドが居ない今俺を捕まえられる奴は「あやや? 何処へ行くんですか、零治さん?」... ですよね」

しかし、幻想郷最速の種族である鴉天狗のそのまた最速を誇る速さである新聞記者... 射命丸文に速攻捕まる。哀れ馱神主、彼の逃走は所謂失敗フラグなのである。

「嫌だ... そうやってある事ない事書くんだろ! エロ同人みたいだろ!! 読者の皆様が喜ぶ様な薄っぺらい本に載ってそうな展開に発展すんだろ!! エロ同人みたいだろ!!」

「そんな事はありませんって... き。大人しく私の文々。新聞と」

「私の幻想郷縁起の為に覚悟して下さい」

「嫌覚悟って何!! ただの取材にしては妙な単語聞こえたけど覚悟って何?!」

馱神主が叫ぶが2人は聞く耳を持たずに彼の両腕をガツチリホルドして連れ去る。その先には立派なお屋敷。

「マジでちよつと聞いてますかって言ってるんだよAQN+きめえ丸うううううう!! 精神的でも肉体的でも俺が死んだらこの小説の主人公誰が務め... Noooooooooooooooooo!!」

ボタン、と紫髪の少女... 稗田阿求の屋敷の扉が閉まった時。馱神

主は一際大きな悲鳴を上げたのだった。

.....

「ハイ特注宇治菊池団子一丁……ってどうしたんだいしけたツラしてよ」

数十分経ち屋敷から出た後、博麗の神主は燃え尽きた灰みたく真っ白な姿でいつも行っている甘味処へと赴いていた。今回頼んでいたのは特大サイズの団子……それに塗りに塗りたいくらい餡子、アンコ、あんこ。一口食べれば胸焼けが、二口食べれば体重が、全部食べれば糖尿病まっしぐらな団子である。

「おばちゃん……俺、明日からお天道様の元で堂々と歩けないかもしれない」

いや何を今更、という喉元まで出てきたツツコミを腹の奥に沈めて押し黙る甘味処の女将。髪の毛まで白くなってしまつて糖尿病予備軍の天パ待みたくなっているその様は、もう見るに耐えないの一言だった。

「……ま、これでも飲んで元気出しな」

そう言つて緑茶を差し出す女将。なんだかんだこの店の常連であるが為励ましを掛けたのだった。

「ありがとう……クソ……霊夢の野郎よりによつて太陽の畑だ？ただでさえ彼処はアレなのにこんな精神状態で行けつて……死ねるか？レクイエムに殴られて永遠に死ねるかこんちきしょ

う…」

「お前さんも大変だな…」

最早哀れみを通り越して同情心すら湧いてしまう彼の後ろ姿。これ以上何を言うべきか困っていて何も言い出せないせいで、お勘定という言葉が出るまでこの空間内はしばらく沈黙で保たれていた。

……
……
……

「よし、じゃあ逝ってくるぜおばちゃん」

「なんか字が違う気がするけど気のせいってことにしよう… あながち間違いないけど。所で次は太陽の畑だろ？ 大丈夫なんかい？」

「大丈夫だ… こんな事もあるうかと復活の呪文を書いてきたから」

そう言って博麗の神主が見せたのは一つのメモ。

『らせん階段』『カブト虫』『廃墟の街』

『イチジクのタルト』『カブト虫』『ドロローサへの道』

『カブト虫』『特異点』『ショット』

『天使』『紫陽花』『カブト虫』

『特異点』『秘密の皇帝』

学のない女将でもこれを見た瞬間わかった。

これは復活の呪文じゃねえよ、と。

T o b e c o n t i n u e d . . .

やっぱガチの戦闘は面倒くせえし、死ぬ

「あら… これは随分と珍しいお客さんね」

太陽の畑… そこは幻想郷で最も美しい花園であり、幻想郷で最も危険な花園である。博麗の神主はその入り口にて一人の女性と相對している。

「今夜宴会があるみたいでな… あんたも参加してもらいてえんだわ。風見幽香さんよ」

既に臨戦体勢に入っている幻想郷最強の男。それは目の前の女性
が其れ程の危険人物である事を物語っている。

「暫く見ないうちに随分と偉くなったじゃない。博麗の神主」

「今更取り繕うが、戦うつもりなんだろう？ 殺気がプンプンするぜ。
今すぐにでも始めたそうな殺気がよ」

最早逃げる事などしない。そんな冗談が通じる相手ではないこと
がわかっているから。

「宴会には参加するわ… 少し運動してからね」

その瞬間、両者はすぐさま動き出す。最初に動いたのは博麗の神
主。自分より一回り大きいエネルギー弾を瞬時に作り出し相手に放
つ。

「なるほどね… 単調な攻撃と見せかけて」

それを避ける彼女… 風見幽香。しかしエネルギー弾の後ろに時間差で博麗の神主が突っ込んで来ていた。それすらも読んで彼女は日傘で突き刺さろうと、片腕を弓矢のように引き絞る。

「二重のトリックね？」

突如後ろから襲いかかるエネルギー弾。先程放ったものは、一旦前に進み後退する様予め決めていた。前方には拳を構えた神主がいるというはさみ打ち、風見幽香は引き絞った腕の方にある傘を後ろの方へ向け軽めの光線を放ち相殺。

「… 流石にこの程度じゃ無理か」

「少しは楽しめそうね」

残った方の手で神主の拳を受け止める。その際の衝撃で周囲に風が靡いて植物を揺らす。

神主は触れた所から凍らせる為に冷気を拳に纏い始める。受け止めた手から氷が広がり肩の辺りまで一気に広がる。

「… ふん！」

しかし、彼女が妖力を開放するとすぐに止まり、氷が溶けてしまう。凍った時間が極端に短かった故に芯まで凍っておらず、細胞一つ壊死していない。

「ちいっ!？」

「舌打ちしている暇があるかし、らっ!!」

掴んだ右手を振り回して神主を投げ飛ばす。自分の庭を傷付けな
い為に真下ではなく斜めに投げ飛ばし、すぐ近くの森へと彼は突っ込
んでいった。追撃の為に追いつける大妖怪、その表情は獲物を狩る捕
食者のそれである。

「あんな華奢な身体からなんつう馬鹿力… オラア!!」

神主は両腕を振りかぶって、前にクロスさせる動作と共にエネル
ギー弾を大量に放つ。さしもの彼女もこれを無視してまで前に進め
ないので、弾いたり避けたりして一旦進みを止めた。

その隙に体勢を整えてから彼女がいる上空へと飛ぶ神主。右手に
は、先程甘味処で食べ終えて余った串を極限まで凍らせた氷剣を携え
ている。

「これでも喰らいやがれえええ!!」

「興奮ぎめね…」

そう言いながら、彼女は日傘を剣の様に振りかぶり彼の氷剣に応戦
する。

全てを凍て付かせる剣と幻想郷で枯れる事のない花のぶつかり合
い。それは一回だけでは終わらず数秒で数十回のペースで斬り合っ
ていた。両者は剣術の心得など知らないが、数多の実戦を経た我流の
振りはその道のプロが見れば見事なものである。

「そろそろか…」

どんなものであれ、凍った物質というのは脆い。何度も強烈にぶつ
かり合えばすぐに罅が入り壊れる。

亀裂の生じたそれに気付いた幽香は、今まで以上のパワーを持って

「ブツ潰れろお!!」

『超熱線 ブレストレイザー ゼロマグナム』

拳と共に至近距離で放たれた熱線。それは範囲こそ狭めなので太陽の焔に被害はなかったが、火柱ならぬ熱柱が空高くまで連なる程の威力であった。

.....

幻想郷トップクラスの戦い。結果は引き分け。油断していた事もあって、あの後彼女の十八番であるマス虹タ色ースのパーク光をまともに受けてしまった神主。これ以上戦ってもラチがあかないので……面倒くさいので神主が戦いを止めるよう言ったのだ。

「随分と衰えたわね。最初に会った時と比べると」

「つたりめーだ。日頃だらけるのが俺のモットーだからな、鈍っていても別に不思議じゃあねえ」

さも当たり前に気怠そうな表情で話す博麗の神主。その言葉が少しばかり気に入らなかったのか、彼女は怒気を含めた声色で話す。

「そういう嘘は嫌いって……言わなかったかしら？」

「人の嫌がる事をすんのが俺のモットーなんでな」

それでも彼は何一つ崩さず話を続ける。あの日から、例え何を言われようとも彼は自分のこの考え方を変えていない……変えるつもり

など、ないから。

「式としての契約がある限りは貴方は此処にいられるけど…その力も、能力も徐々に弱まっている。一体幻想郷に来てどれほどの無茶をしたのかしら？」

心当たりなど幾らでもある。なんだかんだ、面倒くさいという理由で働いていないとはいえ、最終的には何故か無茶をしてしまう…それが博麗の神主という男だから。

「知らねえな。生憎俺は記憶力が悪いんだ。覚えんのが面倒くさいから。意味ないしな、覚えていたところで」

「そう…貴方はさいごまでソレを貫くつもりなのね…」

「何だ？ 文句でもあんのか？」

「ええ…張り合いが無くなるから」

その言葉を最後に博麗の神主は次の場所である紅魔館へ、風見幽香は自分の居所である太陽の畑へと飛ぶ。

「…今だって、相当無茶をして。これで良くやる気が無いと言えるわね」

最初に神主の拳を受けていた彼女の右手には血がべつとりと付いていた。神主が先程まで立っていた場所にも血が滴り落ちている。

「今の貴方はどっちなのかしら？」

自分のものでない赤を見つめて、彼女はそう呟いた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

お土産だど？ 面倒くせえ

わかさぎ姫は困惑していた。霧の湖に住んではや数百年以上：：なんか空が赤く染まったり、春が来ないので湖ごと凍ってしまったりと色々な目に遭ってきて慣れた筈の彼女がだ。

「(あわわわわ!? 何であの人血塗れな上に上半身裸何ですか?!)」

その原因は博麗の神主である。先程の戦闘で汚れた神主装束を湖で洗っている神主：：ゴシゴシと音を立てる度に血が湖へと滲み出ている。

「(ま、まさか殺人現場!? という事はあの人は血も涙も無い殺人鬼?!)」

故に、彼女は視界に写っている神主をそう判断してしまう。まあ、彼の場合強ち間違いでもないが。

「ふー、さてと。次は：：」

そう言っつて、洗い終えた上着を熱で乾かして着る神主。辺りをキョロキョロしているのを見て、自分を殺す為に探しているんだと勘違いしたわかさぎ姫は物凄いスピードで潜った。

「(：：私は何も見ていない何も見ていない何も見ていない何も見ていない何も見ていない何も見ていない何も見ていない)」

そして現実逃避。さっきの事は白昼夢だと自己完結したのだった。

.....
.....
.....

辿り着いた先は紅魔館の門前。どうやら予め神主が来る事を予期してたのか、いつも寝ている筈の門番が臨戦体勢で起きている。

此処で下手な事や失礼な事を言えばかなりまずい事になるだろう。

「ちわーす。博麗の神主です。今日はおんたんところの… セシリア・オルコットさんに用があつて来ました」

だがこの駄神主、やらかした。下手な事？ 失礼な事？ んなもん関係ねえと言わんばかりのセリフを宣う駄目人間。基本穏やかな彼女も彼相手だと少なからず苛つきを見せる。

「前回といい… ふざけているのですか？」

「… あ、レミリア・スカーレットだっけ？ 名前長いから覚え辛えんだよな… まじで」

彼は言うが、そもそも人の名前を忘れるどころか間違えて覚えるのは失礼だし、彼女の名前は幻想郷で覚えやすい名前の部類に入る（と思う）。

「あ、何だあれ？」

「えっ？」

余所見をした瞬間、瞬時に門番の後ろに回って首筋に手刀を当てる。そして門の横に横たわらせつつ手慣れた動作で顔に落書きをす

る。その一連の動作はまさしく卑怯な事を厭わないクス野郎…博麗の駄神主そのものだった。

「肉はシンプルすぎるし、中国でいいか」

哀れ紅美鈴。職務を全うする時に限って彼女はこんな目にあつてしまうのだ。見るも無残な姿にされた彼女を尻目に、駄神主は紅魔館へ堂々と入っていく。

.....

.....

.....

『幻世 ザ・ワールド』

一瞬の間に周囲を覆ったナイフ。

『氷刻 ドライマジック』

ほぼ至近距離で放たれたそれらは全て凍らされていた。

「入るなり不意打ちたあ…随分と危ねえことすんな、駄メイド。予め演算しとかなかったら刺さるところだったじゃねえかよ」

「不意打ちが服を着て歩いている様な男が何を言っているんですか？
駄神主」

開口一番の憎まれ口。この2人は会う度にこうやって殺気を放ちながら会話を続ける。マジで前世に何かあったんじゃないかというぐらい陰悪な仲なのだ。

「あ！ 霊治ー!!」

故に最近地下室から出る事を許されたフランドールの声が聞こえてくるまで、彼らはお互いの出方や間合いを伺っていたのだった。

「あ、咲夜も一緒だ!! 2人で仲良く遊んでいるの?」

最近館内の図書館で読んだ本の知識を元に結論を出そうとするフラン。しかしその瞬間、2人は即座に否定の言葉を喋る体勢に入る。

「違う! 誰がこんな駄神主/メイドなんかと!!」

「ふーん... ま、いつか。それよりも零治! あーそーぼ!!」

そんな否定に少しばかり疑問を浮かべた彼女はしかしながらその事を頭の隅に追いやって、すぐさま博麗の神主に遊びをせがむ。だがこの神主、例え100人のロリコンであれば100人は喜んで引き受けるであろうこの提案を受ける程の人間ではない。つまりは今の彼には遊びをするつもりなど毛頭無いというわけだ。

「残念だったな、今日は気分じゃねえ」

瞬間、フランは涙目になり神主の首元にメイドがナイフを押し当てる。あと数センチ引けば出血多量で死ぬ距離であるが、神主は汗一つ垂らさず話を続けた。

「まあ落ち着け。こんな事も在ろうかとさつき人形野郎の所からお土産をパク... 貰って来たから」

そう言いながら、神主は胸元の衿からあるものを取り出す。それは

拳ぐらいの大ききで、車輪が付いたドクロのラジコンの様な姿をしている。まるで今にも襲いかかろうとするぐらい不気味なそいつの名は・・・ そう!!

「さあさあ、本日の商品はこちらのCHAとなっておりませう!! 最近おもちやがすぐ壊れちゃう、運動不足気味で困っちゃう、そんな事って結構ありますよね?」

なんかどこぞの通販ショッピングのBGMが何処からともなく流れると共に、神主の口調がどこぞのセールスマンみたく変わる。

駄神主の取り出したそれを食い入る様に見つめるフラン。因みに咲夜は無表情である。

「そんな時はこちらの出番です! 一度押したら使用者の熱を感知して半永久的に追いかける自動操縦機能。3ページ半に渡るオラオララッシュにも耐える事の出来る耐久性。この二つを兼ね備えたこれを使って鬼ごっこをしたり、スパーリングをしたり、動く爆弾として投げ遊んだりもできます!! そして次に言うセリフはこうでしょう。でも、お高いんでしょ?」

「でも、お高いんでしょ・・・ ハッ!」

駄神主のネタに敢えてのるフラン。495年もの間地下室にて暮らしていた彼女がなんでそのネタ知ってるんだとか、そういうツッコミはなしだ。

「でも大丈夫! 通常1000000円の所をなんと・・・!!」

▪ 1000000

←

▪ 600000

「たったの60000円！ たったの60000円でございます!!」

「凄い！ これがあれば毎日楽しく遊べるね!!」

生憎この雰囲気ですツッコミを入れたり、一緒にボケたり、傍観者として笑いながら見過ごすという行動を十六夜咲夜という人間は出来なかった。出来るはずもなかった。

「さあさあ今すぐお電話を！ ダイヤルは090—29」

『メイド秘技 殺人ドール』

「Noooooooooo!?!」

電話番号を言い切る前に大量のナイフで八つ裂きにするメイド。最早通算何度目かわからないナイフ串刺しを味わいながら、神主は紅魔館にて一際大きい悲鳴を上げる羽目となったのだ。

ザマア駄神主。悪い行いをすれば例え主人公であろうと天罰が下るのは子供でも知っている事実である。それはここ幻想郷でも例外ではなかったのだった。

To be continued..

面倒くさかったが…… やつと宴会だぜひやつほう!!

紅魔館にてメイドに、後ついでに道中にて白玉楼の庭師に伝言をしつつ、博麗の神主が最後に向かった場所は香霖堂と呼ばれる骨董品屋であった。

「よう、旦那…… 儲けはどうだ?」

「ボチボチ…… って言ったところかな? こんな所まで何の用だい、博麗の神主?」

そこにいる店主に話し掛ける神主。彼は宴会とはある意味別件でこの場所に態々来たようである。

「…… 何、ちよいとな」

「成る程……」

そう言つて店主は棚の方から一つの拳銃を取り出す。今はボロボロとなつているそれは、幻想郷では絶対に見かける事のできない程最新式のもの…… 外の世界から此処に流れ着いた一品である。

それを手に持って暫く眺める神主。まるで感慨深いナニカを思い出すかの様に彼はじつとそれを見つめていた。

「…… それ、買わないのかい? 君のだったんだろ?」

「残念だったな、今は違うんだよ。だから買わねえ…… 例えタダでもな」

彼の脳裏に浮かぶのは嘗てこれを持っていた頃の事。長年使っていた謂わば相棒の様な存在であったが、それは過去の話。敢えて口には出さない。

「全く、難儀な性格だよ。君は」

「タダの面倒くさがり屋さ。俺は」

血で錆び付いていた拳銃を置いて、博麗の神主は店主に話し掛ける。

「そういや旦那、宴会が今夜あるんだがどうするよ?」

「残念だけどパスするよ」

「そうかい... んじゃ俺はその宴会の準備があるんでこの辺で」

「あ、それだったら、ツケの件霊夢と魔理沙に伝えてくれないかい?」

その質問に理想的な答えを言うことが出来なかったのか、博麗の神主は静かに何も言わず香霖堂を出て行った。

ドアとベルのランコロンという音が鳴った後、後に残ったのはいつも通りの静けさであった。

.....
.....
.....

「遅い！ 何処ほつつき歩いていたのよ!!」

博麗神社にて、そんなさげび声が響いたのは夕暮れ時。どうやら神主が集めた人手の何人かが先にやって来て準備していた為、いつでも始められる体勢へと入っていた。

「そりゃあ、あれだよお前。今日は男の日だったからつい遅れちまつたんだよ察しろ」

「いや察したくないから。というか男の子の日って何？ 知りたくもないけど」

だがしかし、相変わらず博麗の神主は何一つ表情を変えず気怠そうなのでのらりくらりと言い訳をする。

「とりあえず急ぐのぜ！ 人も集まって来たし、そろそろ乾杯の挨拶をするから!!」

そういって、久々の登場である魔理沙が2人の話を遮る。どうやらあの会話の一瞬で神主が声を掛けた人物は全員集まった様だ。半ば強引に駄神主をその中心に頓挫している高台へと移動させて、乾杯の挨拶をさせようとする。

「そうは行くかアアアアアア!? この俺とて無理なものは無理なんだ!!?」

「大人しくしなさい！ もうあんたがやるのは決定事項なんだから!!」

「無理だって！ だって俺あがり症だし!!」

ここぞとばかりにコミュ障アピールをかます駄目人間。だがこいつはマイナス方面での精神がダイヤモンド並だという事を皆知って

いるので、耳を傾けず手慣れた動作で捕まえて壇上へと上がらせた。

「「「.....」」」

「：： えー、その：： あれだ。野郎ども！ 宴会
じやあああああああ!!」

当然駄神主は乾杯の際の礼節に関する知識など持ち合わせていない。精々大学の飲み会程度だ。そういうわけなので彼はその場のノリで誤魔化した。

普通であれば白けてしまうであろう状況だが、そこは常識にとらわれてはいけないことに定評のある幻想郷。住人達は総じてこういったノリが許せるタイプであった。

「「「YE A A A A A A A A H!!」」」

それ故に、何故かやたらと発音のいい英語とともに幻想郷最大規模であろう宴会が始まのであった。

.....
.....
.....

「ふいふい。やっぱ一仕事終えた後の酒は美味えな... 俺は未成年だけど」

賑やかである神社... その外れにて一人酒を飲むは博麗の神主である。

彼は人混みに塗れるのはあまり好きではなく、彼女らとは少し距離

を置いてしまっている。博麗の巫女と違い、彼は宴会では人の中心に余り居たがらないのだ。だからこうやって何時も一人酒を楽しんでいる。

「… 貴様、見ているな！ なんちつて」

誰もいないところでそんなギャグをかます神主。酔っているのか少しばかり顔が赤い。しかしその酔いもすぐ様冷める事となる。

「驚いたね、まさかこうも見事にバレるのは」

「… へ？」

白い靄みたいなのが集まったかと思えば、一人の少女が出現した。ほっぺをつねるなり目を擦るなりして見たが、幻でも飲み過ぎでもない。その上彼女の頭に付いているものを見て、神主は少しばかり冷や汗を掻く。

「… つち、鬼か。よりもよって…」

鬼… 古来より日本に伝わる割とポピュラーな妖であり、好戦的な性格をしている。その上単純な戦闘力は数ある人外の中ではトップクラスなので、もし遭遇したら余程の事がない限り地獄を見る羽目になる。

万全な状態ならいざ知らず、今の神主は強敵（風見幽香）との戦闘と酔いが回っている事による演算の乱れでまともに戦える事さえ難しい。ましてや面倒が大の苦手な彼のとって強敵との対峙はあまりよろしい展開ではなく、寧ろお腹いっぱいなのである。

「何の用だ？ 言っとくが俺よりも魔理沙や霊夢の方が楽しめると思うぜ？」

相手の目的を聞くと同時に、自分の仲間を売る駄神主。はつきり言っただけの様子は主人公のそれではない。

「あんたも知ってるだろ？ 今年が春が短いって事。だから宴会が極端に少ないから逆に増やしてやったまでさ」

「（… オーケー。つまりあの糞剣士とカービー擬きは後でぶっ殺す）」

鬼がここに来た理由に関する心当たりを瞬時に解し、八つ当たり気味に原因の2人に死刑宣告を心の中でかます神主。その様子を見て知っただけで知らずか、鬼はただただ笑みを浮かべていた。

「で、噂の博麗の神主… つまりあんたと勝負をしに来たのさ」

「悪いけどパスでおなしやす。さつきも言った通り霊夢か魔理沙が適任なんで!!」

駄神主は逃げるを発動した！

「おやおや？ 鬼の頼み事を断るってのかい？」

しかし残念！ 回り込まれてしまった!!

「断る！ この菊池零治が最も好きな事の内の一つは自分で強いと思ってるやつに「NO」と断ってやる事だからなあ!!」

「ほう…」

そこまで聞いた鬼… 伊吹萃香は拳を握って片腕を振りかざし、地

面一発殴った。

たったの一撃で、轟音と共に決して小さくないクレーターを形成させる。にっこりと微笑みを浮かべている当事者を見て、博麗の神主は

「嘘です冗談ですアメリカンジョークです!? いやー、勝負したいなほんと!! オラワクワクしてきたぞ!!」

跪いて謝罪と共に前言を撤回するという、別の意味でプロ並みの手の平返しを発動させた。

こうして、半ば無理矢理鬼と勝負することとなった博麗の神主。はてさて、これからどうなる事か? 結末は神のみぞ知る。

T o b e c o n t i n u e d . . .

飲み比べだ？ 面倒くせえ

「さあさあ始めました！ 世紀の大勝負!! 山の四天王の一角にして我等が上司！ 伊吹萃香様と幻想郷最強の男とも名高い外道のクソ野郎、博麗の馱神主の飲み比べ対決でございます!!」

博麗神社の境内の中心にて、2人の人物が胡座をかいて堂々と座っていた。

「すいませーん！ 俺18歳で未成年なんで酒飲めないんですけど!!」

「じゃあ先程飲んだのは水だったのかい？」

「すいませーん！ こいつはシラフですけど俺は既にある程度酔ってるからどう見ても不公平に見えるんですけど!! 鬼つてのは正々堂々を重んじるんじゃないんすか？」

「そう言うと思ってほれ、これを飲めばあつという間に酔いが覚める。鬼の秘薬だ」

… 訂正、馱神主が此の期に及んで勝負をしたくないと足掻いていた。やれハンデをつけろだの、俺を相手する前にこいつらと勝負しろなど、明らかに主人公のそれでないセリフを吐く馱目人間。

その様子を見て、多くの者は相手方の鬼に賭けていた。博麗の馱神主に勝つと賭けたのは、霊夢、魔理沙、紫、幽香、フランぐらいである。

「ルールは至って単純！ 萃香様の瓢箪から出る酒を予め用意した盃

に入れて、どちらが多くのか杯数飲めるかを競い合って貰います！」

「無理ゲーじゃねえか?! 鬼の飲む酒が俺に飲める訳ねえだろ!!」

駄神主は、珍しく至極真つ当な事を言う。確かに鬼が飲むような酒を飲める保証なんて何処にも存在しない。

「それではスタート！」

「聞けや人の話いいいいいい!!」

だが無駄だった。此処は幻想郷、そんな常識なぞあつて無いが如しである。そんなこんなで両者の酒飲み比べ対決が始まってしまったのである。

.....
.....
.....

「中々やるねえ、あんた。さっきのアレが？みたいに良く飲むじゃないか」

「はっ！ こんなもん水みてえなもんだし!! あと数十杯来ても余裕でいけるわ!!」

現時点で通算15杯目。萃香の方は頬の赤らみ具合がほんの少しであるが、博麗の神主は既に首の辺りまで真っ赤になって汗まで掻いている。誰がどう見たって前者が勝っていることなど明白であった。しかし先程神主に賭けた者達は一向に変えようとしなない。

「さーて... 16杯目だぞーらあ!!」

信頼とか、憧れとか、惚気とかもあるだろうがそれ以外の最大の要因として、彼なら絶対に何かしらやると思っていたからである。

「言っておくが、袖に仕込んである脱脂綿は既に気付いているから無駄だよ。今から使ったところでね！」

「」

だがしかし、酒飲みという土俵内では向こうの方が一枚も二枚も上手であった。袖から脱脂綿を潔く捨てつつ16杯目を飲み干す神主。戦いはまだ始まったばかりである。

.....
.....
.....

「ぐっ……」

「ほらほらどうした？」

50杯目にて異変は起こった。限界を迎え始めたのは萃香の方である。さしもの彼女も鬼が飲む酒でもトップクラスのアルコール度数を誇るやつを50杯も飲めばそうなるだろうが、博麗の神主は顔自体は物凄く赤くなってこそすれどリタイヤする気配が毛頭ない。

「残念だったな……俺に酒飲みで勝てるやつなんざそもそも存在しねえんだよ!! バーカ!!」

先程とは打って変わって、物凄く憎たらしい笑みを浮かべながら挑発する駄神主。それを見てカチンと来た彼女は盃を飲み干し次の酒

へと瓢箪へ手を伸ばす。

「まだまだ！ 勝負は此処からだ!!」

さて、多分読者の皆様もお気付きたとは思いますが博麗の神主はイカサマをしている。先程の脱脂綿の下りはフェイクで、本命はこちら。しかも絶対にバレる事など無いに等しいイカサマである。

その内容を説明する前に、少しだけ中学生の頃の授業を思い出して貰いたい。実験とかで、水とアルコールの混ぜた液体を沸騰させる事をやっていた人もいるであろう。その際に沸点（沸騰する温度）が低いアルコールが先に水蒸気となっていく光景を見ている筈だ。この現象は蒸留と呼ばれ、主に水と混ぜた液体だけを取り出す際に使われる。

さて、此処でもう一つ思い出して貰いたいのが博麗の神主の能力だ。彼の能力は熱を操る能力。つまりは瞬時にアルコールだけ蒸発するまで盃の温度を上げてから飲むという芸当は訳ない。つまりは熱湯に近い温度の水を飲んでるも同然であったのだ。顔が異様に赤いのもその為である。

「ぐっ…： もう駄目…：」

100杯目、赤を通り越して青ざめた顔色の彼女は倒れて敗北を宣言した。

「なななんと!? 世紀の大決戦の勝敗は…： 誰が予想した事でしょう、外道駄目人間クソ野郎主人公失格の博麗の神主に軍配が上がってしまったあああああ!?!」

余りの光景に実況の烏天狗を除いて誰一人声を上げる事の出来なかった。暫くして博麗の神主はスクツと立ち上がり倒れている鬼の

元へ歩み寄る。

「その程度じゃ俺には一生勝てねーよ!!」

流石外道。トドメを刺す事になんのためらいもなかった。薄れゆく意識の中、伊吹萃香は生まれて初めての戦い以外での殺意を目の前の男に覚えていたのだった。

.....

戦いを終えて、神主は勝者の宴と称してのカラオケみたいなものを披露する羽目となった。バックダンサーはアリスの人形が勤め、プリズムリバー三姉妹が演奏してくれるという何気に凄い布陣。だが博麗の神主は一向に舞台へ上がろうとしない。

「歌だど?なんで俺が歌わにやならんのだ魔理沙」

「いいじゃないか。皆お前の歌を聴きたくて今か今かと待っているんだぜ」

「そんなわけ... まじかよ」

舞台裏から客席を見ると、確かに宴に参加してる全員が既にスタンバっている。さりげなく霊夢が最前列のど真ん中にいるのはおそらく偶然であろう。流石に此処までされて、無下に来る訳がない。つかこの布陣で逃げ切れる自信が全くない。という内心を抱きながら壇上へと上がる博麗の神主。

「さて... お前らに聞かせてやんよ俺の歌」

＜キャラクターレイジサーン

＜コツチヲミロオ…

＜ガンバッター、オウエンシテルワー

＜URYYYYYYYYツツツ！

「合いの手どうも、なんかどつかで聞いた事のあるセリフが多かったけど… まあいい。そんじゃ始めるぜ！ 準備は良いなテメエら！！」

神主に言われて頷く人形たちと三姉妹。その様子を見た彼は息を大きく吸い込みマイク（お値段以上の河童製）を手に取り声を高らかに出す。

「二曲目は… Bad apple!!（駄神主ver）　じゃあああああああああ!!」

「二二わあああああああ!!」

博麗神社に響き渡る歓声、そして歌い出す博麗の神主。

余談ではあるが、彼の歌はそれはそれは上手かったと多くの人が絶賛していたのであった。

To be continued…

時代遅れか… 面倒くせえ

「よっ、気が付いたか」

「…まさか一番見たくない顔を最初に拝める羽目になるとはね…」

宴が終わり、神主を含めた多くの参加者は後片付けをしつつ各々自分の住まいへと帰る。しかしながらそのタイミングでも酔い潰れていた萃香は起きなかつたので、ほぼ満場一致で博麗神社に暫く置いておく事となつたのだ。

日にちを跨ぎ、漸く目が覚めた彼女。そんな様子を博麗の神主は何時もの如く気怠そうに見つめていた。

「とりまあれだ。大体の事はBBAから聞いたぜ… 何でテメエが今回の異変を引き起こしたか、本当の理由をな」

「…聞いたのか。全く、随分とお喋りな親友を持つてしまったようだ… 私は」

嘗て、妖怪の山にはそれなりの数の鬼が存在していた。力や妖力こそ強大であつた彼らだが、決してそれを用いて多種族に襲いかかつたりなどはせず、精々が力比べをするなどといった決闘を重んじる種族であつた。

多くの妖怪達はそんな彼らに敬意を評して、力比べを申し込まれた際は正々堂々と正面からぶつかり合うという事をしていただけだ。だがただ一種族… それをしなかつた種族がいた。

「結局、同じだな… こうやって正々堂々と単純な比べ合いすら、たつた一つの悪知恵を引き絞つた策略には勝てなんだ。私も… 鬼も…」

時代遅れなのかもしれないねえ…。」

人間は、生きるため、勝つ為だけにただ貪欲に知恵を用いて勝利をもぎ取った。力に頼らないその方法見て、鬼達は激怒し愛想を尽かしてしまった。それからだ、1人… また1人と妖怪の山から鬼が居なくなっていたのは。

今や、自分を含めて4人しか鬼という種族が居ない。他は、何処にいるのかさえわからない… 彼女はあちこちを探し回った。本当は気付いて居ただろう。妖怪というのは人の畏れから成り立つ。詰まりは人間に負けて、抱かれる恐怖が薄れてしまった彼らは… それでも彼女は、諦めなかった。こうやって、人を集めて賑やかな宴会を開けば嘗てみたくまた一緒に盃を交わしつつ、力比べをして… そんな日が戻ってくると信じて居たから。

「… 時代遅れ、か。俺が此処に来る前もテメエらみたいな連中は居たよ」

博麗の神主はそれを聞いた上で話し出す。彼の脳裏には、彼自身の捨てた思い出が映っていた。

「其奴は、裏の世界の住人でありながら今時類を見ない程相手を思いやる連中だな… 正々堂々、殺しを行わず、決して卑怯な手を使わない連中だった。例え仲間を人質に取られても見捨てたりはせず、助け出そうと馬鹿やってたのさ…。」

「其奴らは…。」

神主は目を瞑りながら敢えて言おうとしなかった言葉を口に出す。

「ああ、死んだよ。そういう奴は何時だって早死にする… ましてや裏の世界じゃあほぼ確実といってもいい程にな」

「…じゃあ「けどな」

「其奴らは皆死ぬ時は満足そうに死んでいくのさ。己のルールを貫き通した、例え此処で死んでも自分の信念は守り通したって…俺はそういう奴らを見ていると、思わず憧れてしまう。そういつた連中は時代遅れかもしれないが、捨てたもんじゃねえと尊敬の念を抱いちまう」

それは、今の自分とは正反対の者達に対する憧れだったのかもしれない。もしくは自分が持っていないものに対する嫉妬だったのかもしれない。それでも博麗の神主は、自分の言った連中の事を思い出しでは尊敬の念と共に黙祷を捧げている。

「…その割には随分とえげつない手を使うらしいじゃないか、博麗の駄神主」

「それはアレだ。俺のアイディンティティだし、最終的に勝てばよろうなのだアアアアアアア！ だし…っか今俺の事なんて言った？ ごく自然な流れで悪口言っただろ角女。俺これでもその言い方結構気にしてるからね？ 主人公として自覚している分それ言われるととめっちゃ傷付くからね？」

「おっと失礼。外道駄目人間と呼べばよかったかい？」

「それもうただの悪口じゃねえかあああああ!? なんで割といい感じの雰囲気醸し出してあげたってのにこんな事言われなきやなんない訳?! あれか！ ツンデレのツンの部分でこの後滅茶苦茶デレ」

瞬間、駄神主の頭上に確かな衝撃音が鳴り響く。人知を超えた怪力で放たれたそれは彼の頭蓋骨に確実なダメージを与え昏倒させる。

GENKOTU、通称メメタアは古来より收拾がつかなくなったボケを鎮圧する為に用いられた最終手段であった。

「本当：： あんたは私の神経をつくづく逆撫でして嫌いだよ」

呆れ顔になりながらそんなセリフを吐く萃香。割と寛容である彼女にここまで言わせるのはある意味この駄神主の才能なのかもしれない。

「それでいて、面白い奴だよ：： 本当」

そして、人知れず寂しさに包まれていた彼女にここまで言わせるのはある意味この神主の人となりからなのかもしれない。

彼女は自分の能力を用いて霧となり、お礼である特製の酒瓶を一升残してその場を去った。

.....
.....
.....

「痛つつつ」

「全く：： 鬼から拳骨貰うって一体どんな事を口走ればそうなるのか」

暫くして、痛みに悶絶する神主に湿布がわりのお札を貼り付ける霊夢。一応霊力が込められていて、治療能力を高める上にある程度の痛み止めになる優れものらしい。

「仕方ねえだろ：： ったく、なんで俺が何かしら行動を起こしたり喋ったりするとこんな目にあうんだか」

「一度鏡見てみればわかる事だと思っわ。まあ、見えるのはあんたのその頭の手入れされてない野原だけだけど」

「テメエもかあああああああ?! 天然パーマで何が悪い?! あれか、サラツサラのストレートヘアー以外はd i sられなきやいけない決まりでもあんのか幻想郷には!？」

最早涙目になりながら博麗の駄神主は霊夢に思った事を言い出す。これが何処にでもいる普通のタイプの主人公であれば同情する余地の一つでも生まれるだろうが、生憎駄神主にはそういったものは生まれてこない。

「泣くんじやないわよ。女々しいわね」

「女々しくもなるわ! そもそも今回の異変が解決したのつて俺のお陰でもあるのに誰も感謝の一つもしないってどういう事だおい!!」

それでも叫ぶ事をやめない博麗の駄神主。宴会での珍しく結構働いたツケなのか、彼は不平不満を垂れ流しにする。

宴が終わり、何時もと変わらない光景が広がる博麗神社。

「少し黙ろうかしら?」

この後博麗の巫女の少しドスの効いた声と共に博麗の駄神主が先程とは別の意味合いで叫び出すのも何時も通りの流れである。

幻想郷にて最早恒例になるかもしれない、正真正銘の小うるさい夏が漸く始まりを迎えたのであった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
:

視点：魔理沙

「ちわーっす旦那あ。なんか面白いガラクタでも入荷した…誰だテメエは？」

「人にもものを訪ねる時は、まず自分の名前を名乗るのが礼儀じゃないのか？ お前」

そいつとの出会いは香霖堂…

「おお!? こいつあ…イナズマ○レブン3じゃねえか!! イギリス代表に俺が居る(中の人的な意味で)事で話題の3じゃねえか! 懐かしいなおい!!」

「聞けよ人の話!」

そして、最悪の初ファーストコンタクト対面でもあった…つーか今でも思うけどまじで彼奴なんなんだ? 私が言うのも難だが相手への敬意とかそういうったものが皆無ってマジ何なんだ?

……
……
……

「成る程な…お前が色々と噂になっている博麗の神主か…」

「しっかし最近のイナ○レはあれだな…ジョジョに寄せてる様にか見えねえ。化身とか何だよ、スタンドじゃねえか。それを身に纏ったりするってアニメ版第3部の最終決戦じゃねえんだからよ。しまいいにはアレスだかアキレスだかしらねえが天秤って…どう見てもメイドインヘブンの一巡後の世界意識してんじやねえ

かああああああああ!!」

「だから聞けや人の話いいいいいい!!」

ほぼ初対面で、しかも数分程度の会話わかった。こいつに普通の精神で会話するのは不可能に近い事と、ある意味噂以上の人物だって事が物凄くわかった。

「あ、そーいやテメエの名前を聞いてなかったな。誰だ?」

「やっとか… 私は霧雨魔理沙。お前が多分世話になっている博麗の巫女の… ライバルだ」

博麗の巫女のライバル… その日までに、一体何回この紹介をしてきただろうか。勿論実力を考えればまだまだ格下、生まれ持った天才である彼女のライバルというのは周囲が否定してた。私がそう名乗るたびに、身を弁えろという言葉が返されてきた。

… 努力で人は変えられるんだ。その為に自分はそれを否定する父の元を去り、今の今まで頑張ってきたんだ… 何度も言われても… 何度も言われても…

「ふーん。あ、そ。おい旦那あ、コレって幾らするんだ?」

否定するどころか、無関心。3度目のそれに私はとうとうキレてしまった。無理もない、否定された気がしたのだ。自分の今までの努力が、目の前の気怠そうな男に否定された気がしたから私は

「おい、いい加減にしろよ。お前」

「あん?」

幻想郷でのルールに測った戦い… 弾幕ごっこを申し込んだのだ。

……
……
……

「ふいふ、成る程。随分と派手だった。それだけだ」

「くそ… 何で…」

結果は惨敗。向こうの事情は知らないが、相手は初心者の手筈だ。なのに向こうは一切苦しい顔などせず、ただただ圧倒的に試合を運んでいた。

私は思わず涙が出ってしまった。こんなものなのか？ 所詮は凡人だからなのか？ まるでそう言われている様な錯覚に囚われて私は泣いてしまった。努力では生まれ持った天才には一切勝てないと思いきらされてしまった。

「何で… 私は… 何の為に今まで…」

「さて、帰ったら旦那からパク… 譲って貰ったDSとソフトで超次元サッカーを… 此処電気がねえから無理じゃねえかああああああ!? なんてこったガラクタ掴まされたじゃねえか?!」

「これじゃあもう…」

「ああもう誰かいねえのか？ なんか機械とかそんなん扱っている研究所に住んでる奴とか!」

「もう… 私は…」

「…」

もし、こいつがその時に励ましの言葉を言ってなければ私は生きる
気力すら失っていたと思う。その時の言葉は心に響いた気がしたの
だ。多分あいつ自身そのつもりで言ったつもりじゃないんだろうが。

「おい魔法使い」

「… 何だぜ？」

「そういや俺の紹介がまだ済んでなかったのを忘れてたな… 俺は菊
池零治。テメエが言う様に生まれ持つての天才だ。何でも出来て、勝
負事にも負けた事は両手で数えられる程度… テメエとは大違いだ」

「イヤミのつもりか…？」

「テメエと違って俺は頑張ることが大つつつつ嫌いだ。年がら年中
グータラで、食つちや寝食つちや寝の駄目人間。努力とはかけ離れた
人物だって自負がある…」

「何だよ。じゃあ尚更「テメエはそんな奴相手に逃げて終わるのか？」
え？」

「強いだの弱いだの知った事か。そんなもんで価値が決まってたまる
か… どう生きたかで決めるもんだろうが」

「どう生きたか…？」

「はつきり言って俺は負け組だ。人生をかなり無駄遣いしている駄目
人間。対してテメエは努力という方法で人生を充実させてる勝ち組。」

番組でいうところのレギュラーキャラだ。なのに俺に一回負けて、逃げんのかよ？ こんな努力も何もしないクソ野郎に負けっ放しで良いのかよ?」

そうだった。自分はいつの間にか拘り過ぎていた…。勝ち負けも確かに重要だが、大事なのはどう努力して来たのか。どうやって今まで生きてきたかじゃないか。

私はそう気付かされた。他ならぬ目の前の駄神主に気付かされたのだ。

「そうだったな…。博麗の巫女のライバル…。ひいては誰にも負けない魔法使いになる私がこんなところで挫けちゃ笑い者だぜ!!」

「まあアレだ。多分テメエが頑張れば俺ぐらい余裕で倒せる日が来るんじゃないの? って事だ。つーわけで俺は帰る。折角の買い物が無駄に終わっちまった訳だしマジで死にたい」

「いやそれで死ぬとか大袈裟だろ」

この日から、私はより一層努力する様になった。

「あん? ゲーム舐めんよおらあ! こいつは古来より魔力が込められていてな…。やり過ぎた人間は次第に取り憑かれて生気を吸い取られて眠りにつくんだ…。けれどやめられない止まらない」

「それただ単にゲームに熱中し過ぎて寝不足になった奴だろうが!? つーかわかつてるならやるなよ?!」

「馬鹿野郎! 俺にとってゲームは人生そのものだ!!」

「何処の恋愛アドベンチャーゲームだよ?! ゲーム漬けの人生って、

そりゃあ負け組確定な訳だぜ!？」

そしてこの日から、私はこの外道駄目人間のツツコミ役をやらされた。こいつのツツコミをする際に何故か知る筈のない知識を知ってしまったているのは気のせいだと信じたい。

.....

.....

.....

「そろそろツツコミをやめたい。どうすれば良いのぜアリス？」

「私に相談されても無理という言葉しか出ないわ」

To be continued...

永夜異変

どう見ても満月だろ？ 面倒くせえ

9月末、満月を眺めながら団子を食べる季節。それは幻想郷の人里でも例外無く行われていた。

「ふいふ、月見酒ってなあやっぱ格別だなおい！ とりまのんびりとしやすか」

「ええ、最近色々あったしね。偶にはこういうのも良いかもしれないわ」

そんな平和な幻想郷では、博麗の神主も博麗の巫女も態々表に動くことなどせずにのんびりと境内で酒に興じている。

「飲んどる場合かーッ!!」

だがそれはあくまで普通の人間視点での話。妖怪達は今現在確かに感じている不完全な満月を見て、態々博麗神社へと集まり緊急会議を開いている。

レミリアと咲夜の紅魔館組、妖夢と幽々子の白玉楼組、魔理沙とアリスの魔法使い組、幻想郷の事実上の管理者である紫という錚々たるメンツがシリアスな雰囲気醸し出している状況だというのに呑気に酒を飲んでいる2人を見て、数少ないツツコミ担当である魔理沙は思わずそう叫んだ。

.....
.....
.....

「別によお、満月がちよつと欠けるぐらい別に良いだろうが。サブリーミナル効果でカタツムリになる訳でもないし」

酔い覚ましに水を一杯拝借してから話に入る神主。しかしその水、神社にて手や口を清めるためにあるヤツなので、バチ当たりな事この上ない。しかも知っててやっているのだというから流石駄神主と云うべきである。

「そのちよつとが駄目だとしてわからないのかしら？ 博麗の駄神主」

「あん？ なんか言ったかマダオ？」

駄神主のセリフに物言いをしたのは吸血鬼であるレミリア。満月というのは自分を含めた人ならざるもの達にとって数少ない、魔力を満たす日でありそれがなかったら最悪死に至る事だつてある。

「つか、このクソ野郎のせいで自分は妹に舐められっぱなしだからムカつく。という心境もあり殺気を含めた声色で話しかけたのだ。」

「波紋疾走でテメエの首から下消滅させてやろうか？ マダオ吸血鬼」

「そつちこそ、ロードローラーでぶつ潰しても良いのよ？ 博麗の駄神主」

「何でああああああ!! まじでお前から前世で何かあったレベルの仲の悪さじゃねえか!? 何で出会ったら即喧嘩に発展するんだよ?!」

紅魔館の連中と博麗の神主は滅茶苦茶仲が悪い。何せ各々がムカつく訳（詳しくは紅霧異変を参照）理由を持っているわけで、しかも

それに関して駄神主は一切謝罪しないのでフラン以外は彼に対してこんな感じの態度をとる。

それが毎回起きるのでツツコミ気質の魔理沙は叫ばずにはいられなかった。哀れ魔理沙、お前は既にツツコミ役だ。

「あら…：少し遅れて来てみれば随分と面白そうな事をしてるじゃない」

「!？」

しかし、そんな茶番も突如終わりを迎えた。ある人物…：太陽の畑の管理者であり実力、残虐性共に幻想郷トップクラスの大妖怪、風見幽香。最早シリアスを通り越してスプラッタが起こりそうなオーラに喧嘩していた2人も、それ以外の全員も息を飲んでしまう。

「あら？　喧嘩はもう終わりかしら？」

「な、ナンノコトカナ。俺とこいつはマブダチ、喧嘩なんてあり得ないじゃないっすかー…：なっ！」

「え、ええ!!　私達は親友同士ですもの!!」

このまま続けたら地獄を見る。知っている駄神主は兎も角初対面のレミリアにさええそう思わせる彼女はまさしくアルティメットサディスティッククリーチャーの名を冠するに相応しいそれだった。

漸くシリアスな雰囲気に戻り、今回の事件とそれを解決する手立てを話し合い始める。その際何時もは不真面目な駄神主がきつちり正座して話を聞く行動をとっている事から、彼女が如何に恐ろしい妖怪なのかがわかるのであった。

.....

.....

今回の異変はどうやらその性質上人間と妖怪の二人一組ペアで
各々行動をしなくてはならないらしい。これに異議を申し立てたの
は言わずもがな博麗の神主。というのも

「いや待てや。妖怪組は俺苦手だつての知ってるだろ... ペース乱さ
れるわ仲が悪いわ面倒くせえわd「おっと手が滑った」ごふう!？」

紫、レミリアとは仲が悪く、幽々子に関してはなんかペースを乱さ
れるし、幽香に関しては論外、アリスとは余り面識がない。ある意味
真つ当な意見ではあるがそもそも彼の内心は面倒臭いが9割を占め
てる。そういう訳ですぐさま黙殺(物理)された。

そんなこんながあったペア分けは相性や互いの能力やらを考慮し
た結果、以下の通りになった。

霊夢&紫ペアの『幻想の結界チーム』

「残念だったわね、霊夢」

「何言ってるの? 全然悔しくないわ (零治とペア... ぐすん)」

魔理沙&アリスペアの『禁呪の詠唱チーム』

「やった... やったぜ! 漸く(ツツコミから)解放される!!」

「あら、それじゃあ私がボケに回って「それだけはやめてくれアリス
!?!」... 冗談よ」

咲夜&レミリアペアの『夢幻の妖魔チーム』

「咲夜... わかっているわね?」

「はい、あの駄神主の抹殺でございますねお嬢様「オイコラテメエら」

妖夢&幽々子ペアの『幽冥の住人チーム』

「焦らずのんびりゆっくり行きましようか、妖夢」

「いやそれだと駄目なんですって、幽々子様」

此処までは問題ない。メタイ話が原作通りのペア分けなので異変解決では一切の問題がない……。だが最後の一組が問題だった。というか問題しかなかった。

神主&幽香ペアの『究極の外道チーム』

「よかったわ。貴方以外骨が無さそうだったもの」

「ちよつと待てやアアアアアアア!? 何で俺がこの人とペアなんだ?! どう見ても余ったからほい、つて感じだろこれ?! あれか?! この前実写版ジョジョに関してボロクソ言ったからなのか?! そうだとしたら理不尽な事この上無いぞおい?!」

ある意味予想通りの結果であり、本人からしてみれば残酷な結末となったペア分け。余りの事によくわからないセリフを口走り始めてしまう駄神主。それだけだったらいつも通りの彼が酷い目に合う一コマで済むだろうが、冷静に考えてみてほしい。

博麗の神主も風見幽香の様に自主的に動こうとはしないが、一度動いてしまえば冷酷な悪人の如く外道な戦い方で勝利をもぎ取るタイプなのだ。そこに容赦のカケラもない。つまりは似た者同士がペアになってしまった訳で…

((や、ヤベエ。残りものがどう見ても不幸しかない))

その事に気付いた人間組が恐怖に陥り、まだ見ぬ黒幕と立ちほだか

るであろう敵たちに対して思わず心の中で合掌してしまう程だった。

「… もういいや。どうせ面倒くせえ事しかないんだつたら… 八つ当たりだゴラァ！ 立ちふさがる奴は全部ぶっ潰す!!」

「ふふっ… 腕がなるわあ。こんなにもいじめがいのある妖怪が沢山出てきているんだもの… 幾つの血が流れるのかしら？」

それはそれは不幸だっただろう。何せ幻想郷で最も動かしてはいけない人物… その上怒らせてはいけない人物を動かして怒らせてしまったのだから。故に、人間組の彼女らにできる事は何も起らない様に祈る事であった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

面倒くせえから妖怪狩りじやああああああ!!

今宵は偽りの満月。故に下級、中級の妖怪は妖力を得られず半ば暴走状態で暴れまわっていた。凶暴性を増した彼らに普通の人間が勝てるはずもない。

地獄絵図……今回の異変は従来のと比べてダントツにこの言葉がぴったりであろう。

「ギャアアアア!? た、助けてくれ?!」

「な、何だあの二人強い……強すぎる上に容赦がねえ!」

「う……うろたえるんじゃないツ! ドイツ軍人はうろたえな、ギャアアアア!」

……主に暴走した中級、下級妖怪にとってのという言葉が前につくが。

「な、なんだ……あの女の目……まるで養豚場の豚を見るかのような冷たい目だ……残酷な目だ……」

「それよりももう一人の方だ……あの姿……間違いないツツツ!!」

辛うじて無事である妖怪たちはその惨劇を作り出した二人の方へと視線を合わせる。異変解決の正義の味方とはとてもじゃないか言えず、寧ろ立ちはだかるもの全てを破壊するラスボスというのがぴったりな二人。

「俺はイライラしてんだ……そんな状況で襲い掛かってきて……覚悟は出来てんだらうな?」

「博麗の神主だ！ に、逃げるぞ!!」

ゆらり… ゆらり、と近づいていくさまは夏にぴったりなホラーゲームにでも出てきそうな怨霊。そういった類に近い存在であるはずの妖達は逃げた。とにかく逃げた。

「ここまで来れば…!?」

だが無情かな… この作品内での逃走は所謂失敗フラグである。それは神主以外も例外ではない。

「見イツケタ」

彼らは最後にこう思った。

嗚呼、人って妖怪にもなれるんだと…

「もう全部あいつら二人で良いんじゃないか…？」

少し離れた後方にて、他のメンバーの内魔理沙がそんなことを思わず呟いてしまう。幻想郷最恐の二人が手を組むとこうまでも相手に同情せざるを得ない状況になるのか？ そんな思いが彼女の脳内の八割を占めていた。

「そう言いたいけれど、そうもいかないわ。何せ今回の異変にあの妖怪達は一切かかわっていない… 仮に部下だったら脅して居場所なりを吐かせるけどそれが出来ない。このままじゃイタチゴッコどころかあの二人が幻想郷のパワーバランスを崩壊しかねない」

だからこそ貴方たちの出番よ、と言いながら今回の作戦を言い渡す
幻想郷の支配者・・・八雲紫。その様はまさしく妖怪の賢者たる風格
である。故にその場にいる誰もが真剣に彼女の提案を聞いていた（幸
いなことにこんなシリアスをぶち壊しにする駄神主は戦闘中である）

「要するに貴方たちにしてもらいたいのは、今回の異変に関する調査。
あの二人が暴れまわっている妖怪を殲滅する揺動隊だとすればここ
らは異変解決の本命といったところね・・・各自どんな方法を使つて
もいいわ」

へバナナはおやつに入んのか？ BBAー!!

前方にてそんな声が聞こえるが無視して進める紫。そして彼女の
合図と共に各々は別々の方角へと散らばっていくのであった。

.....
.....
.....

「つたくよ・・・俺らが揺動部隊だと？ よりによって面倒くせえ役割
じゃねえか・・・よ!!」

「あら、こうやって片っ端に甚振れて良いじゃ・・・ない!!」

「俺はアンタと違ってそういう趣味はねえんだよ。精々相手を如何に
気持ちよくぶっ飛ばせるか考える程度だ・・・よ!!」

数十匹の妖怪の群れがたった二人によって完膚なきまでに叩きの
めされている。最早揺動部隊じゃなくて殲滅兵器と化している。と
ても主人公とその仲間がやるような光景には見えない。幸いなのは

全員死なない程度に半殺しにされている事か… 全く嬉しいことではないが。」

「あゝ、ちかれたちかれた。残暑が続いているせいとかクソ暑いしよ…。」

さすがに疲れたのか、大量の汗を掻きながら博麗の神主は毒を吐く。何せ夜中とはいえ、夏が終わったばかりということとで気温は20後半を越していたのだった。

「… そんなにキツいのかしら?。」

神主にそんなことを聞く相方の大妖怪。質問の内容とは裏腹に彼女は一切怒気を含めていない。

「ああ、きついで。何せ妖怪退治はダルいことこの上無いし」

その問いに対して、博麗の神主はいつも通り気怠そうに答える。息があがっているが、かなり余裕そうで、その気になればまだやれる様な表情を作って…

「私がそんな事を聞いてるわけじゃないことぐらい、わかってるでしょ?。」

「… 俺がアンタに嘘ついているとでも?。」

「貴方が熱による干渉を受けないのはわかっているわ。それなのにその汗…。」

「…。」

そこまで聞かれた神主は何も言わず、その場をの転がり始めた。どうやら疲れたのでしばらくの間休憩することにしたらしい。

その態度に彼女は敢えて何も言わずに残っている敵……先ほどから隙を伺っているだろう前方の気配に視線を向けた。

「生憎私に隙なんて存在しないから、さっさと出て来たらどうかしら？」

瞬間、前方の気配が瞬時に彼女の目の前まで間合いを縮める。玉砕覚悟で突っ込もうとする蛍妖怪……名前をリグル・ナイトバグという。彼……失礼、彼女は目の前の相手をはるかに格上だということはわかっていた。そして不意打ちがばれた。

だから下手な事はやめて彼女は自らの最大の技を持って一矢報いようと……この勝負に勝とうとしていた。助走をつきつつ蹴り技のために足に力を入れる。それを見た幽香も敢えて躲そうとせず迎え撃つ体勢と入った。

「喰らえ!!」

「!」

瞬間、カウンター気味に放たれた花妖怪の両腕。何より驚くべきはそれを両足で受け止めた虫妖怪であろうか。一瞬の攻防の間にそんな芸当をしてのけた彼女は両腕をクロスさせながらその技名を言う。

サンダークロスブリットアタック
「稲妻十字空烈刃!!」

「へえ……」

両腕を封じられ無防備となった花妖怪の顔面……もつと詳しく言えば首筋に渾身の手刀がぶつけられた。

格上の妖怪とはいえ、首筋という急所に攻撃を喰らえばひとたまりもない。ましてやこちらは後腐れなく今あるすべての妖力を込めた両手で攻撃した。だからこそリグルは勝ちを確信したのだった。

「な、何っ!?!」

笑みを崩さずにケロツとしている彼女の顔を見るまでは。

「少しはスジがあつて良いじゃない…嬉しくて思わず本気を出しそうだわ」

笑顔というのは、獣が獲物を見つける際牙を見せることが起源だといわれている。彼女の笑顔を見たリグルは自分がどういう立場に置かれているのかをようやく理解してしまった。

「あ… ああ…」

最早、月がもたらす狂気も関係ない。どちらが食う立場で、どちらが食われる立場なのかを否が応でも理解してしまったのだ。

「今度はこつちの番。少しは楽しめたわ」

『花符 マスターズパーク』

いつの間にか突きつけられた傘を見ながら、彼女は今までの記憶が走馬灯として頭の中に浮かんできて…

「い、い、い、い…」

せめてもの抵抗に否定の意をこの場で言うが聞き入れてもらえず…

「死にたくない、死にたく…」

がたがたと震えながら涙を流して…

「貴方は良い悲鳴を聞かせてくれるかしら？」

断末魔に近い悲鳴を上げるのだった。あまりにアレな叫び声なので文字には表すことが出来ないが、それを聞いたものであれば誰もが同じことを思うだろう。

嗚呼、その場所は地獄なんだな…と。

To be continued…

なんだかんだで調査は面倒くさいのぜ… ハッ!?
by 魔理沙

「大丈夫だ… 一応この人里の歴史は食べたから妖怪どもは襲いかかって来ないだろう」

そう言っつて、入り口前で仁王立ちする1人の女性。本来であれば人ならざる姿へとなる筈だが、生憎今宵は偽りの満月。人の姿のままであつた。

「し、しかし本当に大丈夫でしょうか… さつきから妖怪達周囲をうろうろしていますが」

そんな心配の声を上げる村人。だがそれを諭すかのように自信満々の声で彼女は答える。

「まああれだ… ステルスとか、透明になるとかそんな感じだ。つまり人里は見えない訳で… 待てよ、」

そこまで考えて彼女が想像したのは、見えない人里の中にて堂々と立っている自分達の姿…

「丸見えではないかあああああああ!?!」

「えと… 人里の中にいるものも含めて透明になるのでは…?」

叫びだし狼狽えた彼女に他の村人がフォローを入れる。その言葉を聞いてハッと気を取り戻した様だ。先程の堂々とした構えに戻る。

「ああ、そうだった。我々も含めて透明なのだったな… 待てよ、私達

が透明でも外から摂取した食べ物とかは……」

彼女が再び想像したのは、胃の中の内容物……即ちう〇こが辺り一面に浮いている情景……

「丸見えではないかああああああ!!?」

「あれです！ 多分周囲の風景に合わせて擬態みたくなるんです、多分!!」

再び叫び出した彼女にもう一度フォローを入れる村人。彼女……上白沢慧音は良くも悪くも心配性な女性である。

「あ、そうだった……例え私達の中身が見えようとも人里がそれに合わせてカモフラージュして……やはり丸見えではないかああああああ!!?」

「「面倒くせえなこの人?!」」

巨大な〇んこにカモフラージュした人里を想像して叫び出す彼女にツツコミを入れる村人達。何時もであれば数少ない常識人である立場の彼女だが、状況が状況なのか凄く取り乱していたのだった。

「……どうやら貴方の目には見えてないみたいだけど、此処が人里の様ね」

「ああ……けどなんか……色んな意味で騒がしいのぜ」

いつの間にか、うろついていた妖怪達を倒した魔理沙とアリスの二人組はその光景を見て、なんとも言えない微妙な表情を取っていた。

.....

「すまないな... どうも迷惑をかけたようで...」

「嫌々、異変が起きたら恐怖や不安で怯えるのが普通だ。私だって最初のころはそうだった」

(原作とは違って) 周囲の妖怪たちを鎮圧していた光景を村人が見ていたからか、人里の者、そして慧音は二人を快く受け入れてくれた。

「わあ！ お姉ちゃんの人形すごく可愛い!!」

「見せて見せて!!」

「ちよ、ちよっと...」

そんな傍ら、アリスは人里の子供たちに囲まれていた。人とのかかわりをあまりしない彼女は、純粹無垢なそれにどんな表情を取ればいいのかわからず、珍しくも狼狽えている。

「良い笑顔だな...」

「ああ... だからこそ守らなければならない」

そんな微笑ましい光景を、話しあっていた二人は感慨深く見つめていた。アリスの方はというと、子供たちに押されて渋々と自らの特技を生かした人形劇をやっており、子供たちが喜んでいるのを見て満更でもない笑みを浮かべていた。

「…聞きたいことがあるんだが」

「大体検討は付いている。今回の異変の場所の事だろうか？ それだったら迷いの竹林に向かうと良い」

その察しの良さに驚きの表情を取る魔理沙。まるで自分たちが来ることを予期しているかのような口ぶりに、一瞬彼女の能力なのかと考えたが、それは彼女自身の言葉で否定された。

「先ほどな、血塗れの男女がこの場所に来た… 血塗れと言っても返り血だが。男の方は村で一押しの子をかっさらって、女の方は何もせずにさっさとその場を後にしたのさ」

「ーおいけーね」

「ーけーねではない慧音だ… 何だ、博麗の神主？」

「ー多分この後二人の魔法使いが今回の異変の場所を尋ねるから… 迷いの竹林って答えてくれ」

「ーそれは妖怪の脅迫で得たやつか… お前は行かないのか？」

「ー知ってんだろ？ 俺が面倒くせえ事は大嫌いだったのは… だから俺の仕事をするまでさ」

「ーそうか… わかった。伝えておく」

「アイツはいつもそうだ… 他人の事を考えずにすぐに自分勝手に行動する。お陰でどれほど迷惑を掛けられたか」

言っている事とは裏腹に、彼女の表情は穏やかなものだった。それ

はまるで教え子の話をする教師の様であり、教師も味方になってくれる親もいなかった魔理沙は彼女の話す人物に少しばかり嫉妬に近い感情を抱いていた。

「… 余程、いざという時には頼りになるやつなんだな」

「ああ、全くだ」

まるで博麗の駄神主とは大違いだな、と内心で呟きながら彼女は帽子を深くかぶる。これは昔からの彼女のくせであり、そろそろ行動に移すかという意味合いが込められている。

「もう行くのか？」

その事を察した慧音は、魔理沙に質問をする。それは暗に心配の意味が含まれていた。

「生憎私は異変解決のプロだぜ… さっさと行かなきゃ霊夢に出し抜かれてしまう」

そうやって魔理沙は笑みを浮かべながら子供たちに囲まれているアリスを呼び出す。彼女は少しばかりさびしそうだだったが、それでも異変解決の為すぐさま切り替えて子供たちに別れの挨拶をする。

「… さて、警備に戻らなければな」

その一連の光景を見た後、上白沢慧音もすぐさま切り替えて人里入口へと向かう。

月が照らす夜の人里、片方は守る為、もう片方は解決の為、それぞれ別の道を歩いていく。だが偶然にも、その背中と同じ雰囲気だった

と… その様を見た村人たちは後に語っていたのだった…

t o b e c o n n t i n u e d . . .

—オマケ—

「ひ!? やだよ… 怖いよ!?」

逃げまどいながらそんな事を呟く雀妖怪。彼女がどうしてそこま
で必死になっているかは、後ろの光景にある。

「待ってってば。ほんのちよつと、ほんのちよつとだけでいいのよ
〜」

涎を垂らしながら捕食者の目で自分を見つめている桃髪の幽霊。
普段では考えられないほどの執念と追いかけるスピードに彼女は恐
怖していた。

「こ、来ないでえー!!」

自分は歌を歌っていたはずだ。そりゃあ相手の視界を奪う歌だか
らお縄に頂戴されるなり退治されるまでならわかるのだが、食われる
のは予想外にもほどがある。

「うふふふふ… 小骨が多いけど美味しいのよね。じゅるり」

「駄目だ話一つ聞いてない!？」

弾幕を放とうにも、今の彼女にとって後ろの捕食者の雰囲気に圧倒されてできない。まさに吸血鬼に睨まれた人間、もしくは柱の男に睨まれた吸血鬼、或いはリサリサに睨まれたジョセフという状況である。

「大人しく捕まりなさい」

「嫌アアアアアアア!？」

幽霊と妖怪の命がけの鬼ごっこは、まだまだ続きそうである。

「… 私物凄いい蚊帳の外ですね。まあ良いですけど」

視点：咲夜

そういえば、私がお嬢様と初めて会ったのはこういった感じの満月だった。

赤い空に赤い月だったという違いはあれど、私が物心ついたときに見ていた光景は今のように周囲が殺気立っていて、化け物があちらこちらで暴れまわっていた。

「…」

「ひっ!? やめ」

—ズシュー—

手元にあつたナイフで私は周りを斬っていた。

疑問に思わなかったのは、殺らなければ殺られるということを知りながらに理解していたからだろう。斬って、斬って、斬って…いつの間にか私は周囲から化け物と呼ばれた。

「… どうして、私は此処にいるの?」

生きる事、死ぬ事が私には解らなかった。生きる意味、死ぬ意味を教えてくださいるものなど独りである少女に誰が教えられよう? だから一人で考えざるを得なかった。

—ガキン—

「きゃっ!?」

「へへっ… 漸くテメエを殺せるぜ。この傷の憂さ晴らしによお!!」

独りで考えた故の油断だった。能力を使えば抜け出せるだろうし、そもそもこんな状況にならなかっただろうが、その頃になると私は生きる事に何の執着もわかなくなった。

死ねば、此処から抜け出せると思っていた。けれど、私は死ぬ事が出来なかった。

「…貴方、一人かしら？」

彼女は手を差し伸べながら私にそう言い放った。血塗られて、化け物と呼ばれた能力ちからを持っている私の姿を見ても引つ込めようとしなかった。

「名前は…そう。だったら…」

その日から、十六夜咲夜という名前が与えられ、私はレミリアお嬢様に仕えることとなった。

私に生きる意味が見つかり、死ぬ理由が消え去ったのだ。

……………

「おい駄メイド、お客様命令だ。菓子折りの一つでも持て成しやがれこの野郎」

そんな私があのかそ野郎…失礼、駄神主と出会ったのは十年ほど経った頃だ。初対面から、今に至るまで彼とは馬が合わない。様々な無礼を働いたり、神経を逆なでする事を行ったり…それでいて、彼はまるで昔の自分みたいな目をしているのだ。

「入るなり不意打ちたあ…：随分と危ねえことすんな、駄メイド。予め演算しとかなかつたら刺さるところだったじゃねえかよ」

最初は前二つの理由だけの苛立ちかと思っていた…：けれど何度も出会っているうちに二つ以外の何かがそこにあるのだと気づき、それが同族嫌悪に近いものだとして理解したのである。

「不意打ちが服を着て歩いている様な男が何を言っているんですか？
駄神主」

自ら一人になろうとしている様で、全てをあきらめている様で…：けれど、私は一切同情しない。寧ろ昔の自分を見ているかのようでいつそう苛立ちが募る。私は人間なんだな…：そう痛感した。

どうやらお嬢様は彼がそうになっている理由をある程度知っているみたいだが、聞こうという気分にはならなかった。

『メイド秘技 殺人ドール』

「Nooooooooo!?!」

だから駄神主に何か聞くということもしない。精々日頃の憂さ晴らしをするためにナイフで串刺しにするだけだ…

……
……
……

「咲夜、ぼーっとしてどうしたの？」

「…：すいません。ちよっとした考え事をしていました」

こういう満月の日はいつも心ここに非ずとなつてしまう。治そうと努力はするのだが癖みたいなものだ、今回もお嬢様に心配をかけてしまった。

「へえ、因みにどんな考え事をしていたのかしら？」

その質問に正直に答えるべきか。一瞬迷ったがお嬢様相手に嘘をつくわけにはいけないし、つく必要もないから正直に私は口を開く。

「こうやって私はお嬢様の元で仕えています、満ちた月が欠けて消えるのと同じように何れ終わりを迎えるのだなと」

私のその言葉に、お嬢様は少しばかり考えて言葉を溜めていた。アレは言うべきか言わないべきか迷っている表情だ。十数年も仕えればなんとなくわかる。

「そう…なら、咲夜も不老不死になつてみない？ そうすればずっと一緒に居られるわよ」

きつと、お嬢様はいつか消えてしまう私に対してというよりも、それで悲しむ自分自身のために言ったのだろう。私には生きる理由がある…けれど、それは人として。

「大丈夫です、生きている間は一緒に居ますから」

だから笑顔でそう言った。生きている間、死ぬまでの間、たとえ何があろうとも私はこの方の従者として共にいる…それがあの日、手を差し伸べてくれた少女への微かな恩返しである。

「それに仮にそういうことをした場合、あの駄神主が

『ねえねえ人間やめてどんな気持ち？ 石仮面被っちゃってどんな気

持ち？ 日向ぼっこもできず川遊びもできずガーリック入りの料理食えなくてどんな気持ち？ 俺だったら絶対なりたくないわ、マダオ二号(咲夜の新しいあだ名)』といった具合にイラつかせるというのが目に見えていますので」

冗談で言ったが、あの駄神主の場合それをやりかねない。それどころか吸血鬼になって増えた弱点を突いてくるだろう…。そう考えると何が何でも人間をやめたくはないと思う。

「ふふっ、それもそうね…。聞くだけ野暮だったわ」

そう言つて、お嬢様は笑顔で目的地があるだろう場所へと方向転換して再び飛び進み始めた。

「きつと、わかっているんですね」

お嬢様はある程度の運命を見ることが出来る。確定的なように曖昧なそれは時に、あらがえないものとして見せつけられるのだろう。

「…さて、どうやら後ろが追いつきそうだから急がなければ」

遠目でよく見えないが恐らく全員だろう。数と、彼特有の面倒くさいという叫びが聞こえることから断定できる。というか揺動はどうした駄神主と突っ込みたい。多分ほぼ全部の妖怪を粛清したから来たのだろう…。あまり考えたくはないが。

そこまで考えて、私はお嬢様が居る方へと方向を変えて飛び進むのだった。

To be continued…

こっから先は面倒くせえ

博麗の神主は、追われていた。妖怪ではなく（1人は人間じゃないけど）人間3人にそれはもう鬼気迫る勢いで追いかけられていた。

読者の皆様ならば、どうせあの駄神主は面倒くせえだのと言いなから逃げているのだろうと考える。他の、ちよいとばかり勘の良い読者であれば別働隊である筈の彼がどうして追われているのか理由を考えるだろう。そして、本当に……ガチで勘の良い読者であればこの異変が起こった……メタイ話永夜異変の章の始めの回で気付いている筈だ。

「いやマジでごめんって!?! 冷静に考えたら今回の異変の場所が行きつけの竹林だって、ついさつき思い出したんだって!?!」

あれ? そういえばこの駄目人間竹林の存在知ってるんじゃない? ということに（詳しくは春雪異変の西行妖と駄神主の戦い中の彼のセリフを良く見てればわかる、普通に言ってるから）

「だからって、私達の苦労が水泡になった気分を味わえとでも言うのですか?」

「ああ、そうだぜ。お前はいつもこう言う大事な事は言わないから……わかってるだろうな?」

「零治く、最近漸く博麗ドライバーが完成したの。後はわかるよね?」

最悪な事に幽香達妖怪組（1人は幽霊、もう1人は魔女だが）は面白がっているのか助ける気配が無い。今回ばかりは本当にうっかりしていたのだが、普段の行いのせいでそれを信じるどころか許される事は限りなくゼロである。

「…ゆ、許してヒヤシンス」

後ろを振り向き器用に逃げながら可愛げのあるつもり謝罪を口にする駄神主。

「無理」

だが残念、彼女達に慈悲など無かった。

「Noooooooooooo!?!」

割といつも通りの叫び声が夜空に響き渡るのだった。

……
……
……

「それがこの駄神主がボロボロになった顛末って訳ですか…」

竹林前にて屍と化している博麗の神主。幻想郷にいる暴走した妖怪達（妖怪の山にいるのも含める）を風見幽香と共に片っ端から戦闘不能にしたので合流してきたのだが、黒幕が潜むラストステージ前でこれでは先が思いやられる。

幸いだったのは一応死なない程度に手加減はしてくれた事と彼自身の異常なしぶとさだろう。お陰で何とか直ぐに動ける様になった。

「2話ぶりの出番がよ…何でこれなんだゴラァ！俺が何かしたか?! したってんなら「零治」…はい、すいません」

「まあ、それは良いとして…さっき言ってた事は本当なのか…竹

林の中の具体的な場所はわからない上に相手は一筋縄じゃいかな
いって」

魔理沙が話を戻す為に切り上げた後、博麗の神主に質問した。それ
を聞いて何時もとは違う真剣な表情でああ、と肯定の意を述べる彼の
雰囲気を感じ、場にいる全員が深刻な表情となる。

「まず此処迷いの竹林についてだが…こいつは名前の通り入ったら
最後、余程精通している奴じゃなきゃ絶対に出る事も目的地に着く
事も出来やしねえ。そしてだ、今回の異変の多分…いやほぼ確実に黒
幕であろう奴らは下手したら俺以上の厄介さを備えてる、その上2人
誰かはわからないが不死身の奴がいる」

因みに、どうしてそこまで知っているかという通院した際に見か
けたうさ耳で学生服の様な衣装を着た少女と世間話（と言う名の脅
し）で聞いたらしい。一応こういうところはちやつかりしている彼
は、体温の変化とかでそれが嘘でないと確認したらしい。

「強い上に不死身…そのスキマ妖怪か亡霊さんの能力で何とかな
らないかしら？」

「何とも言えないわね…そもそもどうして不死身なのかによるし。
それが境界として干渉できればあるいは…けれど同じ幻想郷の住
人を殺す訳にはいかないわ」

「私も同意見よく。もし肉体的な意味であれば容易く出来るけど…
仮に出来ても余りしたくないわ」

幽香のセリフに、紫と幽々子はほぼ不可能だと答えた。やはり、い
くら相手がすぐに再生する不死身であるからといって殺すのはタ
ブーに近いのだ。

「じゃあ説得は…」

「残念だけど魔理沙、これ程までの規模の異変を起こす奴が態々応じるとは思えないわ」

続けて出てきた魔理沙の意見もアリスが却下する。そして一瞬の沈黙がこの場を覆った所で、もう一度神主が口を開いた。

「…まーそういうことだ。多分こつから先に待ち受けてんのはこれまで以上に面倒くせえやつだろうよ…そして最悪負けてそのまま死ぬって事もありうる」

余り手入れされていない髪をポリポリと掻きながら、博麗の神主はそこまで言つて一拍軽い深呼吸をした。

「家でゴロゴロするか？ それとももう一踏ん張りするか？ だ」

その言葉を聞いて、皆一様に別々の表情を…だがその内心は全く同じである事を証明する為に神主の横を通り過ぎて、

「…それがテメエらの答えか」

後一步で竹林に入れる距離まで近づいたのだった。

「あら、私がそんなのに怯むと思つたのかしら？ 零治」

「右に同じだ。異変解決のプロを舐めてもらつちや困るぜ」

「そもそももつと夕子の悪い駄神… 人間の相手をしているから慣れています」

「幽々子様の元に仕えたその日から、逃げるといふ選択肢はありません」

そんなセリフを言いながら各々の組が竹林に入っていくのを見て、やれやれと肩を窄める神主。妖怪組は何も言っていなかった、同じ様に前に出ていたので考えている事は一緒なのだろう。

「ちえ… ったくよ。そこまで言われちゃ俺がサボれねえじゃねえか」

そう言っつて、博麗の神主も後に続く。

「そうね… 所で、いつから貴方はそんなに指図出来る立場になったのかしら？」

「博麗の神主様になった時からだ、なんつって」

風見幽香の問いに、洒落た答えを言う神主。先程からの珍しい態度に彼女は少しばかり笑みを浮かべて、後に続いた。

……
……
……

そして、各々は別々の道(うち2つは同じ目的地へのルート)を通った末、敵と対峙する。

「うさうさうさ… こんな竹林に態々何の用ウサ？」

「おっと… 兎か。態々煮て焼いて食われにでも来たのか？」

「気を付けなさい魔理沙。この兎の余裕っぷり… 恐らく何か仕掛け
ているわ」

「ご名答、騙しのプロとまで言われた兎の手口… とくと味わうが良
いウサ！」

禁呪の詠唱チームvs因幡てる（と愉快的兎たち）

「喰らえ!!」

「危ない！ 幽々子様!!」

「あらあら、何処からともなく銃弾が… 危ないわね」

「予想以上に数が多いせいで何人か侵入を許してしまいました…
せめて貴方たちは此処で食い止めます！」

幽冥の住人チームvs鈴仙・優曇華院・イナバ

「何故か吸血鬼と同着だったのが癪だけど… とりあえず黒幕が居そ
うな館に着いたわね」

「右の道に進んで見たは良いけど… どうやら巫女の勘はハズレだっ

「たみたいよ、霊夢」

「ふふふ、まんまと着いて来た様ね…」

「廊下が…無限に?!」

「アハハハツハ！ 我が頭脳の医学薬学は世界一イイイ！ できんことはないイイイーーーーッ!!」

幻想の結界チーム vs 八意永琳

「成る程… どうやらこっちが当たりだったみたいね…」

「ええ… どうも博麗の馱神主と同類の者が居ますが…」

「はあ… 戦うのは面倒くさいのよね… 月の奴等を阻止したと思えば地上の奴等が攻めてくる… 面倒くさいから五つの課題で散ってくれるかしら？ 貴方達」

「見てて滅茶苦茶腹が立つわ… 咲夜」

「ええ。この者を死なない程度に八つ裂きにするのですね」

夢幻の妖魔チーム vs 蓬莱山輝夜

「でかい熱を追って見りやあ… 誰か居んな、おい」

「鳴く夜雀も黙る丑三つ時の竹林。こんな時間にほつつき歩く人間が居るなんてね」

「あら、妖怪もいるわよ」

「つーかこんな所で1人でいるとか… 遭難者か何かか？」

「お生憎様、私は昔からここに住む人間。そう言うあんたは博麗の神主と… 噂の花妖怪だろ？」

「… 全然違います、俺はただの竹取のパーマです!! んでもってこっちは「あら、こんな所に汚いハエが」ゴフウ!」

「少し、退屈しのぎに付き合ってきたり出来ないか？ 永く生きてると、碌に暇も潰せないんでな」

究極の外道チーム vs
??????